

1

ともに生きる

2

地域で生きる

3

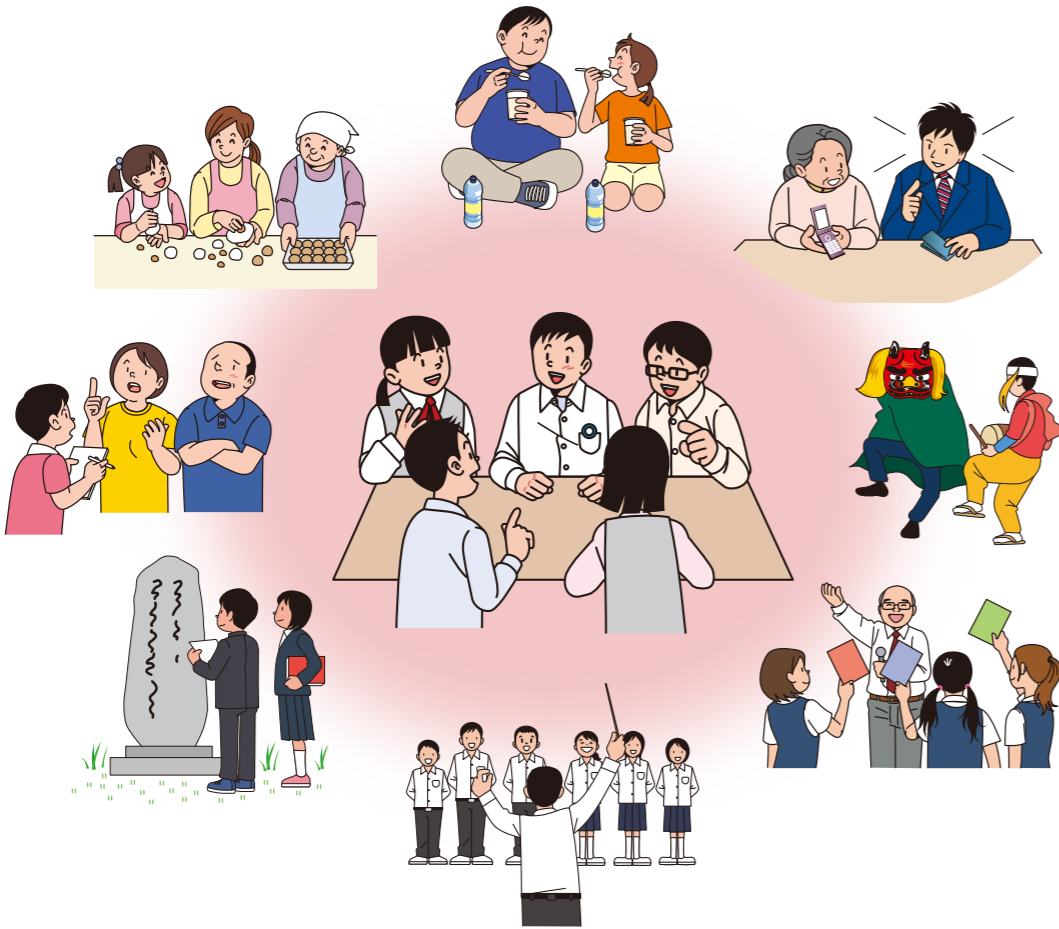
社会を変える

4

協力して大きな力に

5

思いを寄せる



福祉教育でみんなしあわせ!

福祉教育で みんなしあわせ!



信州流 福祉教育 実践事例集 2011~2014

信州流 福祉教育 実践事例集 2011~2014



社会福祉法人
長野県社会福祉協議会

社会福祉法人 長野県社会福祉協議会



CONTENTS

- 福祉ってなあに？…………… 1
- 体験から考える「私たちのしあわせ」… 2
- 掲載事例のご案内…………… 3

*「様々な人とともに生きる」をまなぶ

- ノーマライゼーションを体感！…………… 4
長野市立 保科小学校
- 違いを越えて伝え合う…………… 8
東御市立 北御牧中学校
- 高齢者にケータイ操作法を指南…………… 10
長野県 北部高等学校
- 「いのち」の重みを受け止め
いとおしむワークショップ体験…………… 12
長野清泉女学院高等学校
- 善光寺ユニバーサルマップ
アプリ プロジェクト…………… 14
信州大学教育学部附属 長野小学校
国立 長野工業高等専門学校
- 地域の身近な人たちとのふれあい…………… 18
千曲市立 埴生小学校
- 笑顔で「ニコ・ハキ・ドン」
麻績村筑北村学校組合立 筑北中学校
- 「伝えたいな」私たちの気持ち…………… 19
箕輪町立 箕輪東小学校
- ありがとうの「和」を広げたい！
諏訪市立 諏訪西中学校
- SO 交流で広げよう、心のつながり！…………… 20
松本市山形村朝日村中学校組合立 鉢盛中学校
- 交流を深めよう 泉野っ子タイム！！
茅野市立 泉野小学校
- みんな集まれ！ 元気っ子タイム…………… 21
信濃町立 信濃小中学校
- 児童会活動でみんななかよしに
中野市立 高丘小学校
- 合言葉は「ふれあい」
松本市立 二子小学校

*「地域とともに、地域で生きる」をまなぶ

- ここは 地域みんなの学校…………… 22
駒ヶ根市立 中沢小学校
- ふるさとしてなんだろう？…………… 24
飯山市立 常盤小学校
- 町道の「桜トンネル」を守ろう！…………… 28
辰野町立 辰野中学校
- 「ふるさとサクラといえど…」…………… 26
長野市立 櫻ヶ岡中学校
- 柳中セミナー…………… 30
長野市立 柳町中学校

- 地域とつながろう！…………… 32
長野市立 綿内小学校
- まちのお宝番組をつくろう！…………… 34
長野市立 綿内小学校
- 伝えていこう！ 地域の物語…………… 36
長野市立 古牧小・緑ヶ丘小・南部小学校
- 花いっぱい元気な町に…………… 38
下諏訪町内の小中高特別支援学校 6 校
- 中学生がイベントスタッフに
大町市立 仁科台中学校
- 地域に元気を！…………… 39
上松町立 上松中学校
- 地域の伝統芸能を受け継いで
箕輪町立 箕輪西小学校
- 南木曾町のお宝発見！
南木曾町立 南木曾小学校
- 休日ボランティアで村内をきれいに！…………… 40
泰阜村立 泰阜中学校
- 学友林はわたしたちの教室
飯田市立 川路小学校
- 地域に貢献!! エコ・クリ プロジェクト
飯山市立 城北中学校
- 唱歌「ふるさと」の発祥地をきれいに…………… 41
中野市立 豊田中学校
- 仁慈 ~情けは人の為ならず~
喬木村立 喬木中学校
- 地域に学ぶ「くぬぎの時間」
須坂市立 須坂小学校
- つながろう！ 私たちの「憲法」…………… 42
高森町立 高森中学校
- シカの食害問題から学ぶ…………… 44
長野日本大学学園 長野小学校
- STOP! 奈川の人口減!!…………… 46
松本市立 奈川中学校
- 電車廃線から地域を考えた…………… 48
長野市立 松代中学校
- 未来をつくる中学生議会…………… 50
高山村立 高山中学校
- リヤカー商店開店！…………… 51
長野県 飯田長姫高等学校
- *「みんなで協力して、
大きな力を育てる」をまなぶ
- 夏休みのトマト収穫作業…………… 51
安曇野市立 堀金中学校
- 地域の方々とともにアルミ缶回収
佐久市立 野沢中学校
- アルミ缶でつながるふれあいの輪
上田市立 長小学校
- ネパールでみた“Yodakubo”…………… 52
上田市長和町中学校組合立 依田窪南部中学校

*「悲しい経験をした人に、思いを寄せる」をまなぶ

- 被災地でのボランティア活動に参加…………… 52
長野県 長野工業高等学校
- 私たちがだからこそできること…………… 53
栄村立 栄小学校
- 絆音楽祭で村の人を元気に！…………… 54
栄村立 栄中学校
- 豊間中学校との笑顔の交流…………… 56
須坂市立 相森中学校
- きささげ夢プロジェクト…………… 57
筑北村立 聖南中学校
- ぼくらは未来の設計者…………… 58
軽井沢町の3つの小中学校と
岩手県大槌町の小中学校
- 私たちにできること…………… 59
軽井沢町立 軽井沢中部小学校
- 福島の人たちに思いを寄せて…………… 60
須坂市立 森上小学校
- みんなで育てた りんごで被災地支援
飯田市立 飯田東中学校
- たねぶろじえくと
上田市立 塩田西小学校
- 有志で被災地支援ボランティア活動
長野県 白馬高等学校
- 被災地とのメッセージ交換…………… 61
佐久市立 田口小学校
- できることをしよう
東御市立 滋野小学校
- 栄村出身の同級生のために
長野県 飯山北高等学校

楽しくなくっちゃウソ！の福祉教育は、 たとえばこんな授業です。…………… 62

「福祉教育のつどい」開催レポート基調講演
地域にまなぶ・地域をまなぶ
福祉教育のめざすもの 長沼豊氏 …… 64

「つながりマップ」を作ってみよう！ …… 68

学習指導要領等の改訂のポイント…………… 70

[資料] 長野県教育委員会
信州型コミュニティスクール 概要版…………… 72

広げよう つなげよう
ボランティアのココロ…………… 76

長野県内の社会福祉協議会・
ボランティアセンター一覧…………… 77

この事例集は、2011～2014年度発行「小中学生ボランティア新聞『やまびこだより』」「高校生ボランティア新聞『福祉教育実践ガイド』」を再構成したものです。
*文中の学年、所属等は初掲当時のものです。

福祉ってなあに？

「福祉」とは「しあわせ」という意味です。ここで言う「しあわせ」とは、だれにも抑圧されたり、管理されたり、排除されたりすることなく生きていくことができることです。

自分の持っている願いや生き方を大切にすると同時に、他者の願いや生き方も尊重し、自分たちの生きている場所で、様々な人や社会資源とかかわり、活かしあいながら生きていくことができることです。

こうした福祉の視点は、日本国憲法第 25 条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。(生存権)」、第 13 条「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。(幸福追求権)」に基づいています。

「welfare (狭義の福祉) でなく、well-being (よく生きること)」(上野谷)、「ふくし=ふだんのくらしのしあわせ」(原田)とも言われています。

平和で、民主的な社会の中で、自由に、幸せに、誰もがその人らしく生きていくことができること。誰もがきっと望んでいる生き方や社会です。

そんな「ふくし」を、長野県内の子どもたちは、実際にどんなふうに進んでいるのでしょうか。本誌ではその一部をご紹介します。

これまでの「福祉教育」のイメージが変わる、かも！？

参考：新福祉教育実践ハンドブック/上野谷加代子、原田正樹監修/全国社会福祉協議会



体験から考える「私たちのしあわせ」

障がいがある人を表す言葉を、友だちを馬鹿にする場面で使っていることに衝撃を受けた、長野市立保科小学校の篠原先生。「差別はいけない」と伝えるだけでなく、障がいがある人を丸ごと知って、共に生きていける子どもになってほしいという思いから始まったのが、障がい者施設との2年にわたる交流でした。

「差別・排除はいけない」という抽象的なことを自分の心で感じ、具体的に実行すること。交流を通して、子どもたちは「ノーマライゼーション」を学んでいきました。
▶詳しくは、4ページへ

駒ヶ根市立中沢小学校がある中沢地区は、高齢化が進んでいます。だからこそ、この子どもたちは地区の宝！学校を地域に開き、地域の人々がみんなで、子どもたちの学びや体験を支えています。

地域の中に学校があるように、学校の中に地域が入り込んでいる、「信州型コミュニティスクール」の事例です。
▶詳しくは、22ページへ

3月11日、震災の犠牲者を思って黙祷した、飯山市立常盤小学校の子どもたち。被災地の人々の思いに近づく手がかりとして、かつて常盤地区を襲った大水害で被災した人の聞き取りを行いました。

自分たちの地域の災害の記憶から、「ふるさと」を考えた事例です。ふるさとを離れざるを得なかった被災地の人の気持ちに寄り添っていきます。
▶詳しくは、24ページへ

辰野町立辰野中学校の伝統の活動が、地域の桜並木の清掃です。50年前に、一人の生徒の思いから始まり、代々の生徒たちに引き継がれてきた活動です。今ではボランティアセンターを拠点に、桜並木があるまちづくりを地域の人と一緒に考えています。

ボランティアセンターが関わることで、中学校の活動と地域の思い、様々な人々がつながって、みんなでまちづくりを考えることができました。
▶詳しくは、28ページへ

「いじめ」は切実な課題です。高森町立高森中学校生徒会では、高森中からいじめをなくす運動に取り組み、その思いをどんな決まりより重い学校の「憲法」として制定しました。「憲法」はやがて町を動かし、条例に育っていきました。

「憲法」という形にしたことで、メッセージがより大切なものになりました。中学生の思いが行政を動かした事例です。
▶詳しくは、42ページへ

依田窪南部中学校では、使わなくなった通学カバンをネパールの学校に送っています。大切にしてくれる遠い国の子どもの姿に、自分たちの暮らしを振り返ります。

小さな行動でも、みんなで取り組めば大きな力になります。古いカバンが遠い国と私たちをつないでくれました。
▶詳しくは、52ページへ

東日本大震災の翌朝、震度6強の大地震に見舞われた栄村。避難生活を助けてくれた人々に恩返しをしたいと、栄中学校の生徒たちは、得意の歌で感謝と元気を届けました。「栄村のために何かできませんか」と言ってくれた中学校にも協力を呼びかけました。

災害に見舞われて悲しい思いをしても、その試練がたくさんあることを教えてくれました。当事者だからこそ発信できることがあります。
▶詳しくは、54ページへ

しあわせに生きる力をはぐくむのが「福祉教育」

福祉教育の始まりは、身近なしあわせ・ふしあわせへのちょっとした気づきです。それを自分の生活に引きつけて考え、共有し、行動するのが福祉教育です。「福祉(welfare)」について知るだけの学びではなく、基本的人権と民主主義に基づいて、社会の中でどう生きていきたいか、幸せな生き方とはどんな生き方かという、本当の意味での「ふくし=well-being」を、関わりの中で具体的に「実現していく学び」です。

各学校、地域でさらに豊かに取り組むためのガイドブックとして、この「実践事例集」を活用してください。

掲載事例のご案内

いま・ここから、しあわせづくりの福祉教育を始めよう。では、具体的にはどんなことをすればいいの？…次のページから、その実践事例をご紹介します。

「様々な人とともに生きる」をまなぶ

わたしとは違う人に出会い、違いを持つ人とともに生きることを考えた事例

障がいがある人、高齢の人、外国から来た人…。違いはあるけど、みんな同じ人間。「違い」と「同じ」の間を行き来する中に沢山の驚きと感動があります。それが「共に生きる」のはじまりです。

「地域とともに、地域で生きる」をまなぶ

地域の人々と、地域の良いもの、課題に気づく、考えた事例

この地域の先輩たちや豊かな自然、目の前の課題に目を向けます。「ふるさと」ってなんだろう、どんな地域に暮らしていきたいかを考えます。

「足元から、社会を変える」をまなぶ

目の前の課題に向き合い、その解決方法を考え、社会に働きかける事例

子どもたちのまなざしでみた社会には、たくさんの矛盾や課題があります。その解決のために、自分たちで考え行動する、「社会参画」の第一歩です。

「みんなで協力して、大きな力を育てる」をまなぶ

小さな思いや行動を集め、大きな力に育てた事例

どんなふうに仲間を募り、力を集め、育てていくか。その力をどう生かすか。様々な工夫をしながら、地道な活動を続けている事例です。

「悲しい経験をした人に、思いを寄せる」をまなぶ

災害で被災した人に思いを寄せ、共感を持って行動した事例

東日本大震災、長野県北部地震は、みんなの心を揺さぶりました。ほっとけない、をどんなふうにかに变えたか、災害から振り返って私たちはどう生きていきたいかを考えます。



* ノーマライゼーションを体感!

「絆プロジェクト」障がい者施設との交流活動

やまびこだより No.128 (2013年度)より

アトリエ CoCoの皆さんと2年間にわたって交流をしました。



障がいのある人に怖れや先入観もあつた子どもたち。学校の近くにある施設で働く人たちと出会いました。障がいがあっても、仕事熱心で、明るくて、優しく、一緒にいるととても楽しい人たち。「みんな友達になる」って、わくわくするね。



アトリエ CoCoとの交流活動「絆プロジェクト」

ある日、長野市立保科小学校の5学年を受け持つ篠原先生は、子どもたちが友達に、「障がい者」を表す差別的な言葉を使うのを聞きました。それは友達を罵る言葉だ、と子どもたちは言いました。先生はショックを受けました。

学級で話し合うことで子どもたちはすぐに反省したと言ったけれど、本当に心で受け止めてもらえただろうか、障がいのある人を心で理解し、共に生きていける人になってほしいのだけど……。

そんな思いを抱えた先生は、学区内に障がい者の施設「アトリエ CoCo」があることに気づきます。さっそく施設長の綿貫好子さんに相談。真夏の暑い日、子どもたちは施設見学に行きました。「障がいのある人は、どんな人だろう」。そう思いながらの訪問でした。

皆さんの仕事は高温の中でのクリーニング作業や、野菜の出荷。暑い中での重労働に、一生懸命取り組んでいました。「障がい者は何もできないから、仕事も簡単」と思っていた子どもたちの

先入観が吹き飛びました。CoCoの皆さんは初めて会ったのに、笑顔で迎えてくれました。「障がいがあっても、できることを頑張っていて、私よりずっとすごい」「帰るとき、見えなくなるまで手を振ってくれたよ」……子どもたちは驚き、感動し、もっとその人たちのことを知りたくなりました。こうして、交流活動「絆プロジェクト」が始まりました。

みんな一緒に生きている、それが「ノーマライゼーション」

交流では一緒にものを作り、ゲームをしました。教えたり、教えられたり、協力して何かをしたりする、双方向の交流です。

歌を歌うと、一緒に歌い踊って嬉しい気持ちを全身で表現する CoCoの皆さん。初めは驚きましたが、まっすぐに気持ちを伝えてくれるので、みんな嬉しくなってノリノリ。ゲームをすれば、勝っても負けてもみんなハイタッチ! 回を重ねるごとに、子どもたちは、どうしたら一緒に楽しめるか調べ、工夫して企画するようになりました。

耳の不自由な人には、覚えてたの手話でこちなく話しかけました。新築された体育館に招待し、手作りのおやつでもなしました。CoCoの皆さんは、子どもたちと共に過ごす時間を心から楽しんでくれました。

「絆プロジェクト」は、子どもたちが卒業するまで続きました。6年生の3月。最後の交流会では、CoCoの皆さんが、この日のための特別な替え歌を歌ってくれました。思い出の写真と一緒に菜を作り、アトリエ CoCoからの感謝状をいただきました。「この交流がなかったら、私はずっと障がいのある人を避けていたと思います。でも、皆さんに会って、みんな普通の人と同じなんだと思いました」「これで最後だと思うと、さみしい……」。

綿貫さんは、「ノーマライゼーション」という言葉を教えてくれました。「どんな人でも、地域で普通の生活をしていくこと」、つまり「みんな友達」ということ。アトリエ CoCoの皆さんを、子どもたちは友達として、心から尊敬しています。それが「ノーマライゼーション」なのです。

つながりマップ ノーマライゼーション=みんな友達と知る



障がいがあるってどんなこと?

身体や脳が、他の多くの人と同じように機能しないために起こる「暮らしにくさ」のことを「障がい」と呼びます。でも、その「暮らしにくさ」は、地域の中で楽にすることもできるのです。

障がいがあっても、なくても、みんな友達になれる!



「障がいがある人の施設との交流」活動のポイント

①まずは、いいとこさがし

保科小学校とアトリエ CoCoの交流では、第1回目は必ず皆さんの働いている様子を見学に行きます。何にもできない人だと思っていたのに、大変な仕事を一生懸命やっているということに、子どもたちは驚き、感動します。この感動が、「もっと知りたい! 会いたい!」という思いにつながっていききました。

②時間をかけて、顔の見える関係づくり

時間をかけて、一人ひとりの顔が見える交流になっていることもポイントです。一人の人として出会うことで、お互いの魅力や障がいのことをよく知っていくことができます。「偏見」は相手を知らないことから生まれてくるのです。身近なところで、日常的な出合いを重ねていくことで、同じ地域に暮らす仲間同士という意識、顔の見える関係が育っていきます。

③一方的に与えるのではなく、双方向の交流

子どもたちはどうしたら一緒に楽しめるかを調べ、工夫して企画を考えました。回を重ねるごとに、自分たちを気遣ってくれる CoCoの人たちの姿から学ぶこともたくさんあると気づきました。どちらか一方が与えるのではなく、お互いにいい時間を共有することで、自分たちにとって大切な友だちと思える連帯感が芽生えました。綿貫さんいわく、「案ずるより産むが易し」ですよ。

プロセス

*篠原賢朗先生がまとめた「アトリエ CoCo のみなさんと、保科小学校6年生の「絆」プロジェクト」～2010年7月～2012年3月までの活動報告～をもとに構成

障がいがある人を理解していく認識の三段階

概念的段階

(抽象的・普遍的段階)
ノーマライゼーションって何？

↑ 思考の「のぼりおり」 ↓

過渡的段階

(半抽象的段階)

↑ 思考の「のぼりおり」 ↓

ノーマライゼーションを自分の体を使って体験

体験的段階

(感覚的・具象的段階)

参考文献「認識の三段階連関理論・増補版」
庄司和晃著 季節社刊

2010年7月 初めての CoCo

施設見学

- ♥ 綿貫さんのお話
「アトリエ CoCo ってどんなところ？」
「障がいがあるってどんな人？」
「ノーマライゼーションってなに？」など
- ♥ 施設の見学
農場、クリーニング工場
- ♥ CoCo の皆さんにご挨拶
- ♥ みんなで合唱

CoCo の皆さんも楽しめるにはどうしたらいいんだろう？
聞こえない M さんにもわかるように紙に文字で書いて教えてあげよう。



2010年12月 二度目の訪問

CoCo で交流会

- ♥ 5年生が合唱披露
- ♥ 4チームごとに交流
①折紙紙チーム
②フライングディスクとペタペタ遊びチーム
③しおり作りチーム
④リース作りチーム
- ♥ 綿貫さんのお話



普段みんなで活動することが苦手な人も、一緒に楽しんでくれたようです。

5年生

暑いにお仕事を復讐や常態やっています。お等々負じました。



障がいのある人は私たちよりも何倍、何十倍もがんばって生きていることが分かりました。

聞こえない人もいるんだ……。

ぼくたちの歌が心に届いているんだね。

5年生

「認識の三段階」から見た子どもたちの変化

子どもたちは第2回の交流からノーマライゼーションという抽象的な概念を自分の身体を使って体験。自分で体験したことと、抽象的な理論と結びつき、体験的段階と概念的段階との間を思考が「のぼりおり」することを通して、より深く理解していきました。

ねらい くふう 取り組みへの思い

誰もが持つ「素晴らしさ」に気づく子どもに

長野市立保科小学校 篠原賢朗先生



子どもたちから、障がいがある人を蔑視するような言葉を聞いた時はショックでした。けれど、ただそういう言葉を使わない、と約束するだけでなく、子どもたちの中に芽生え始めた、差別の気持ちを根絶やしに出来ないかと考えたんです。

障がいがある人への差別や偏見を持たないでほしい。障がいがあるから何もできないのではなく、それぞれの素晴らしいものがあると気づいてほしい。周りの友だち、学校全体、身の周りのすべての人をそんな気持ちで考えられる子どもになってほしいというのが、大きなねらいです。

障がいがある人のことを考えながら接することができる子どもは、いろいろな友だちも理解して接することができるのではないのでしょうか。

♡♡♡

1回目は仕事の見学に行き、一生懸命働く姿をまず見ることから始めます。子どもたちは、大きな乾燥機の前で汗だくなって熱の塊みたいな洗濯物を出している様子

子どもの時にこういう経験がなかったので、障がいがある人たちは特別な人たちだとずっと思っていました。私も毎回子どもと一緒に感動しながら勉強しています。前の夜は興奮で眠れないくらい、楽しみにしています。

を見て驚き、一生懸命な姿に感動し、皆さんがとても優しいことに喜びを感じて、感動して帰ってきます。

毎回、こちらから何かを与えるばかりでなくて、CoCoの皆さんも子どもたちを盛り上げてくれるという、双方向のやり取りがあります。

交流会の企画は子どもたちが考えました。「CoCoの皆さんのことを、よく思い出して。一緒に楽しめるものにしよう」と、一人ひとりのことを思いやり、工夫をします。聞こえない人と話すために、手話も練習しました。そういう準備も毎回楽しみなんです。

交流の後には、全員の感想文を学級通信に載せます。家の人にも読んでいただけるようにしました。大人たちも、これを読んで障がいがある人に対する意識が変わってほしいと思っています。6年生の児童が、「CoCoとの交流がなかったら、きっと私は障がいがある人たちをずっと避けていたと思います」という作文を書いてくれました。本当にこれをやって良かったと思いました。

こんなに多くのことを学ばせてくれる「教材」が近くにある。利用しない手はないと思います。

2011年5月 小学校にご招待 学校でお楽しみ交流会

- ♥ 6年生による歌
- ♥ 劇
「保科小学校って楽しいところだよ」
- ♥ お互いに自己紹介
- ♥ ゲーム
①「猛獣狩りへ行こう」
②「フライングディスクを楽しもう」
- ♥ 綿貫さんのお話



もっと仲良くなりたい。

ぼくたちと同じだ。

仲良くなろうと思ってたくさんの人と手を触れようと思いました。

2011年11月 心の学習発表会

絆が深まる4回目の交流会

- ♥ 6年生による歌
- ♥ 劇「おかしな雪だるま」
- ♥ ゲーム「フライングディスク」
チームに分かれて競争
- ♥ おやつ時間
6年生が作ったスイートポテト
- ♥ 綿貫さんのお話
「絆」プロジェクトと命名



6年生

他人に優しくできる人になりたい。

私はアトリエ CoCo のみなさんが大好きです！

2年間の交流はよいことばかりでした。CoCoのみなさんに感謝したいです。

交流会のための歌や劇のリハーサル、改善点の話し合いを繰り返しました。



「劇、楽しかったよ」とか、「ありがとう」と何度も声をかけてくれて、うれしかったです。

6年生

「ノーマライゼーション」とは何か 障がいがある人への理解 認識の深まり

学校と、障がいがある人が働く施設。「お互いを知りたい」という思いが会って、絆が結ばれました。子どもたちも大人もいっぱい感動し、たくさん学び、大きく成長した「絆」プロジェクト。

「ノーマライゼーション」とは何かを体感して！

「地域で普通に暮らす」ってなんだろう？

1990年代以降、「障がいがある人も地域で普通の暮らしをする」ノーマライゼーションの考え方が福祉施策の中に盛り込まれてきました。そのことにより、かつては「障がいがある人は専門の施設で暮らす方が良い」とされ、ずっと施設の中で暮らしていた人々が、様々な制度やサービスを利用して地域で暮らせるようになってきました。今の大人たちが子どもだった頃と比べて、地域で障がいがある人に出会う機会が増えているのには、こうした背景があります。

アトリエ CoCo のような地域で働く施設、普通の家のような建物で共同生活を行うグループホームなどの他、一般の企業で働いたり、アパートや公営住宅で自立して暮らしている人も、結婚して家庭を築く人もいます。

障がいがあるということは、日常生活の中で、ある一部分について「暮らしにくさ」を感じることもある、という状態です。障がいがある人も私たちがそうしたいと思うように、住み慣れた地域で、いろいろな人と関わりながら、自分の力を活かして、自律的な生活をするを願っています。それは当たり前の権利で、誰にでも保障されています。

障がいがある人は特別な人ではありません。一人ひとりが当たり前の、私自身と同じようにかげがえのない個性を持つ一人の人だということを心に留めておくことが大切です。

三つのお願い

障がいがある人が地域の中で一緒に生活するのは当たり前。電車と一緒に乗るのも、一緒に働くのも当たり前。みんな、地域の中で普通に生活したいのです。だから、

- 一つ、悪口を言わないでね。
- 二つ、差別は絶対しないであらう。
- 三つ、いじめを絶対してはいけません。

みんな仲間で、一人ひとり誰にでもいいところがあります。赤ちゃん、お年寄り、障がいがある人も、外国の人も、み～んな友だち、同じ人間なのですから。

社会福祉法人廣望会 アトリエ CoCo

(長野市若穂保科)

多機能型障害福祉サービス事業所。知的に障がいがある人がそれぞれの特性に合わせて、クリーニング、農作業、軽作業を行っています。自分の家やグループホームから通い、工賃(給料)を稼いで、それを小遣いや生活費にして、自立して普通に地域社会の中で生活しています。

http://www12.ocn.ne.jp/coco-net/



綿貫好子さん

社会福祉法人廣望会
アトリエ CoCo 施設長



* 違いを越えて伝え合う

視覚障がいがある人と美術館に……

やまびこだより No.135 (2014年度)より

1 とせいの生きる

1 とせいの生きる

視覚障がいがある人と美術館に……
見えない人がどうやって見るの？

東御市梅野記念絵画館で
ボランティアを体験しました。



障がいがある人は、大変。ものすごく苦労していてかわいそう。「障がい疑似体験」ではそんな感想がよく聞かれます。けれども、本当にそうでしょうか。障がいがある人は助けを待つばかりの人ではありません。そのことに気づき、「してあげる⇒助けてもらう」だけでない、対等な関係を作るための豊かな出会いを紹介します。



見えない人が美術館に？

11月の日曜日、上小地域障害者自立生活支援センター主催による「エンジョイライフサロン」が、東御市の梅野記念絵画館で開催されました。この日は視覚障がいがある人たちが多く参加し、美術館での休日を楽しみました。地元の北御牧中学校の6名の生徒がボランティアとして参加しました。

見えない人がどうやって絵を見るの？それがこの美術館で行っている「対話型鑑賞」です。静かにしなくてはいけないイメージの美術館ですが、今日はグループでおしゃべりをしながら絵を鑑賞します。

この絵の中では何が起きている？どんな雰囲気？美術館ボランティアの方に助けて頂きながら、ただ説明するだけでなく、自分が思うことを自由に語り合います。おしゃべりをしていると、自分

ひとりでは気づかなかったものが描かれていること、絵から受ける印象が人それぞれ違っているということに気づきます。自分が受け止めた絵の魅力を言葉で伝える方法も、それぞれ想像力をフル回転させて考えます。

色はどう説明したらいい？大きさは？雰囲気は？好きな絵であればあるほど、どう伝えるか悩んでしまいます。ここではどんな意見も正解。いろいろな感想やイメージが出てきます。

「私は目が見えなくなったことがないから、見えない人がどんなふうにイメージを描くのかかわからない。でも私はこの好きな絵のことを、自由に話せばいいんだと気づきました」と、美術部に所属する女子生徒は話していました。

違いを埋めていくのではなく、違う感覚を出し合うからこそ、物事を立体的に、深く感じられるということ、少しの工夫で、同じように楽しめることを知りました。

「見えない人だなんて意識しなかった」

この日は、陶芸体験も行いました。陶芸では、少しのサポートがあれば、見える人も見えない人も同じように作品を作れます。見えない人と一緒に作品を作った1年生の生徒たちは、どんな手助けが必要か、ひとつひとつその人に確認しながらのびのびと作品づくりを楽しんでいました。「一緒に作っているあいだ、相手が見えない人と意識しなかった」と話していました。

障がいがある人は「かわいそうな人」ではありません。時にサポートが必要な人。そして「違い」はあっても、同じ時間を楽しめる仲間です。障がいの有無という「違い」をもつ同士が、「アート」を通して違いを越え、違いを楽しみ、一緒に歩く。そんな体験をすることができました。

必要なのは、想像力と工夫、気持ちを言葉にする少しの勇気。

迫力があるなあ。引く音がしろう。

人の身体より大きい！

裸の人たちが、何人も、大きな魚を運んでる。



誰かの驚き、誰かの提案で、いろんなイメージがわいてきますね。

一人だけ、こっちを見ている。何かに気が付いたのかな？

「対話型鑑賞」とは

「対話型鑑賞」は、1980年代にニューヨーク近代美術館で生まれた美術鑑賞の方法で、グループで作品について想像力を働かせながら話し合い、その対話を通して作品の理解を深めていくという方法です。グループでの対話を通して、作品の中にあるイメージを創り出す力、自分で考え、表現し、コミュニケーションする力などが養われます。県内では梅野記念絵画館のほか、信濃美術館（長野市）などでも対話型鑑賞によるガイドが行われています。

実際に体験してみると、誰かと「おしゃべり」をしながら見る作品には、一人で見るときよりずっと多くの発見があるということに気づきます。同じ作品が、これまでとはまるで違うもののように見えてくる瞬間があります。

グループの関係性の中であらわれる発見、別の見方、新たな感動というのが、この対話型鑑賞の楽しさです。



「見える人」と「見えない人」のように、私たちは「違い」を持つ人と一緒に生きています。

●「違い」を越えて伝え合うためのポイント●

1 共通の目的を持って一緒に何かをしよう

一緒に何かをする。スポーツなどで仲間に。

2 相手のことを想像して、工夫しよう

どうしたらできるかな？ 伝わるかな？

3 間違いを恐れない

失敗したら、ごめんなさいと言えばいいのです。感じ方は人それぞれ。「正解」は一つじゃない。

絵を見た後は、一緒に陶芸も楽しみました。



見えなくても、自分の目で見て作ります。

「陶芸」なら、ちょっとしたサポートがあれば同じようにできますね。



楽しかったね！



＊ 高齢者にケータイ操作法を指南

地域授業「超ボランティア」の活動から

福祉教育実践ガイド 2012年度版より



超ボランティア班による携帯電話講座



フロアホッケー体験



スマイルボウリングで高齢者の方々と交流

北部高校には「地域」という授業があります。地域の産業や文化・歴史を学んだり、自分の進路を見つめるために、社会人講師の方々からお話を聞くなど学習内容は様々です。「生きた教材」におおいに触れて、豊かな感性を磨いています。

県内の高校では唯一の科目 体系化された「地域」の授業

飯綱町にある長野県北部高等学校では、県内の高校としては唯一「地域」という授業(以下、地域授業)を設けています。

地域授業では、地域の産業や文化、歴史を学んだり、自分の進路を見つめるために、ゲスト講師を呼んで話を聞いたり、内容は様々ですが、いずれも地域の方々に学びます。

1年次はクラスごとの体験学習を中心に、さらに2年次には自分の興味関心に沿ったテーマを選択し、年間を通じて学習します。

2年次はそれぞれ「班」として、保育、超ボランティア、郷土料理、地域の自然、文化・歴史などに分かれ、活動します。

高齢者のハートをゲット！ 超ボランティアの携帯電話講座

地域授業の中でもその名称から強い印象を受けるのが「超ボランティア」班です。その名の通り、「超ボランティア＝

ボランティアを超えるボランティア」。

最近行った活動の中で、特に地域の方々に好評だったのが、「携帯電話講座」です。携帯を持っていても若い人のように使いこなせない高齢者を対象に、生徒たちがマンツーマンでその使い方を教えます。

地域の方に教えていただくだけでなく、自分たちが地域で教えられることはないか…「携帯電話講座」は、生徒たちが発案。飯綱町ボランティアセンターのコーディネーターに相談しました。「そういうば、電話で話すのはできるけれど、それ以上使えない人も多い」と、ユニークな提案にコーディネーターのほう気がつかされました。ボランティアセンターでは、チラシや有線放送で宣伝したり、会場を設定したりと、彼らの活動をバックアップしました。

受講者は、孫のような高校生たちと、雑談をしながら気兼ねなく携帯電話の操作法を教してもらい、講義はもちろんですが、それ以上に楽しい時間を過ごせたという方も多かったそうです。回を重ねるごとに、準備にもますます力が入る

ようになりました。生徒たちも、「地域の方と話せて楽しかった」「教えるのって大変」「人生の先輩からいろんなアドバイスをいただけてよかった」と、この出会いから多くのことを感じていました。

地域授業はカリキュラムに組み込まれた正課活動で、厳密にはボランティア(自発的な活動)ではないかもしれませんが。時には希望に反して「超ボランティア」班に振り分けられることもあります。「超ボランティア」班で1年間活動をした生徒の中にも、「ボランティアなんてだるい」と言う男子生徒がいました。けれども実際にやってみたら、いつの間にか誰よりも楽しく話し、仲良くなっていったそうです。

自分たちの得意なことから発想し、コーディネーターなどの関係者に相談をしながら実際にやってみる。地域の方に喜ばれたという達成感が次の活動につながります。地域の人々の中で、自分の可能性にも出会えます。地域授業は、生徒たちに「出会い」の喜びも教えてくれます。



携帯電話講座



「超ボランティア」班で活動した

生徒会長 2年 青木恵己里さん

生徒会長 2年 小林奏太さん

携帯電話講座に参加した生徒たちの感想

メモを取りながら聞いてくれてうれしかった。教えることの難しさを学んだ。

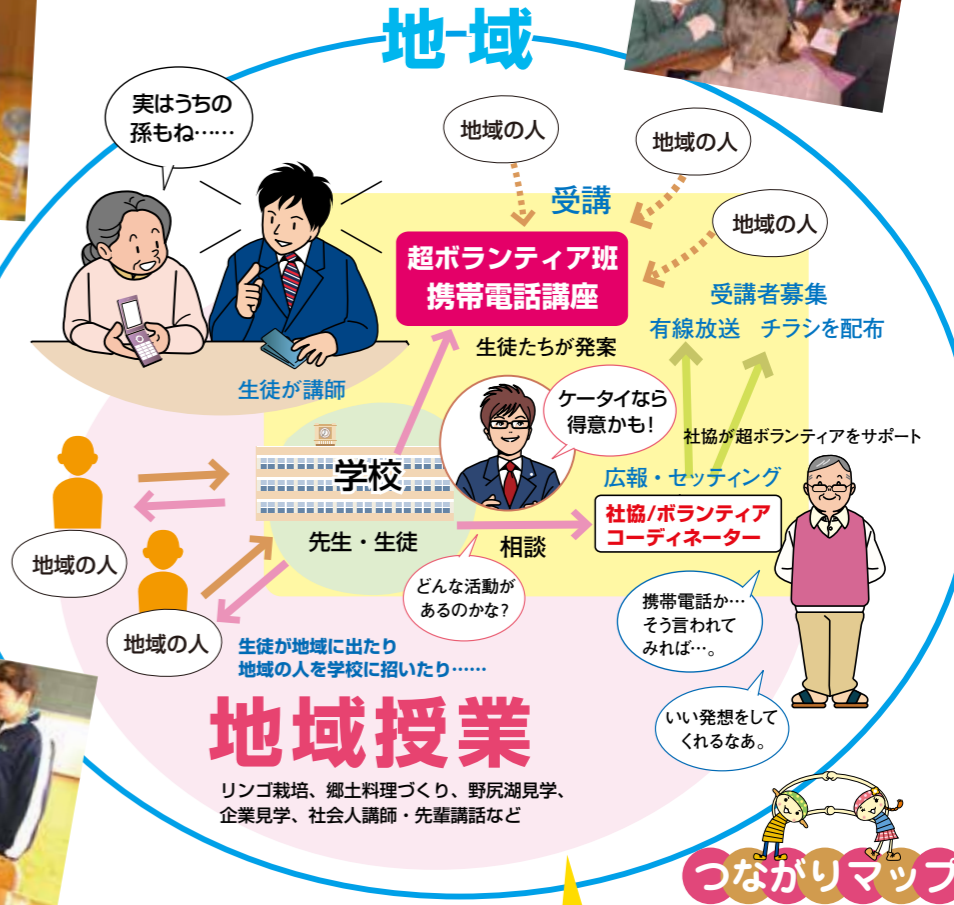
知らない地元の話とかも聞けて、逆にいろいろなことを教えてもらった。自分のおばあちゃんの家に行っている気分で楽しかった。

初めはボランティアなんてっていう気持ちだったけど、ボランティアにもいろいろな形があるってわかった。

超ボランティア班の活動



超ボランティアでは、障がい者や高齢者の方との交流を中心に、携帯電話講座、ティザービスでのお手伝いやフロアホッケー、スマイルボウリング、福祉体験などの活動をしました。



地域授業

リンゴ栽培、郷土料理づくり、野尻湖見学、企業見学、社会人講師・先輩講話など

つながりマップ

●北部高校「超ボランティア」班顧問 間部一男先生より
超ボランティアとは、周りから見るとボランティア活動なんだけれど、活動している本人はボランティアを意識することなく、多方面にわたって自主的に取り組むことを目的とする意味合いがあるのではないかと思います。私は着任して1年目でしたので、当初は違和感がありましたが、地域や社協の方々にお手伝いいただき、生徒と一緒に活動してとても楽しい経験をさせてもらいました。毎回初体験の活動ばかりで戸惑っていた生徒も、回を重ねるごとに次は何をするのか、楽しみにしていたようです。





福祉教育実践ガイド 2012年度版より

「いのち」の重みを受け止め いとのおしむワークショップ体験

設問に対して色紙で答える旗揚げアンケート。
すぐに集計して、全体で意見交換を行います。



アイスブレイクでリラックス



先生も生徒も一緒に学びます。

大きなテーマを真剣に 楽しく考える2日間

長野清泉女学院高等学校は、県内唯一のミッションスクールで、カトリックの精神に基づいた教育を行っています。「ミッションスクールとして、生徒のいのちへの感性を育み、他者に積極的に働きかけることができる女性を育てる体験学習の場を設けたい」という先生方の願いから、毎年夏休みに、ワークショップ「いのちへのまなざしを深めるために」が開催されています。このワークショップは今年で7回目となりました。「いのち」って何？「生きている」ってどういうこと？大きなテーマを真剣に、楽しく考える2日間。「いのち」に向き合う職業（医療・看護、福祉・幼児教育など）をめざす生徒たちと先生方が参加します。

「あなたの子どもに障がいがあることがわかったとしたら」

1日目は、まずコミュニケーションを学ぶ講座。ファシリテーターの内山二郎先生による身体を使ったコミュニケーションや傾聴体験で、自分の気持ちをのびのびと表現する楽しさ、受け止めて

もらう嬉しさを体験します。

心と身体がほぐれたら、午後は「いのち」についての多様な価値観に触れる、旗揚げディスカッション。「生まれ変わったら何になりたい？」「今の自分に生まれてよかったと思うのはどんなところ？」などの問いかけに答えていきます。

この日最後の質問は、「出生前診断で、あなたの子どもに障がいがあることがわかったらどうしますか？」。この問いに対して、先生方も驚くほど様々な答えが出ました。女性は誰でも直面する可能性がある、そして社会でも大きく取り上げられている、重い難問です。胎児のいのちは誰のもの？幸せな人生って何だろう。家族ってなんだろう。そもそも、いのちって何？

ワークショップの中では、どんな意見もその場限りのものとして自由に発言することが約束ですが、短い時間の中で決断をし、意思表示をしなくてはなりません。それぞれが真剣に考えた重い決断を内山先生は丁寧に拾い上げ、「いのちって何だろう」という問いとして返します。

2日目は、ボランティア体験。市内で活動する様々なグループの方に、活動への思いを聞きました。前日の「いのち」

への問いが頭に残る生徒たちに、障がいを持って生まれた息子さんを持つお父さんが、こんなことを話してくれました。「障がいのある子は、実は親を選んで生まれてくるそうです。その言葉に出会って、私はこの子の障がいを悲しむのではなく、共に楽しく生きていこうと決めました」。参加していた生徒たちも先生方も、その言葉に圧倒されました。

教科学習では学べない 本当に大切なことを

一般に、高校生では体験学習の機会が激減します。長野清泉女学院では、出会い、体験するこのワークショップは生徒の人間性を育む大切な場だと考え、担当の先生方が丁寧に計画しています。プログラムの企画には、長野市ボランティアセンターが全面的に協力し、学校と社会をつなぐ役割を果たしています。

経済・効率重視の世の中で、本当に大切なものは何か。生きているってなんだろう。これから自分はどう生きていくか。すべての人間関係の基盤にある、「いのち」をいとのおしむ心。このワークショップは、たくさんの人との出会いの中から、教科学習では学べない大切なことを学ぶ場となっています。

ワークショップ●旗揚げアンケート方式ディスカッション

「いのち」について考えよう！

設問について、自分の気持ちに一番近い色紙を1枚あげましょう

ワークのねらい

- ◎自分の考え方を整理しましょう
- ◎自分とは違う、いろいろな考え方や価値観があることを理解しましょう
- ◎ワークを通して「いのち」についてどんなことに気づいたか話し合しましょう

設問 生まれ変わるとしたら、
(抜粋) あなたは何に生まれ変わりたいですか？

- ①青 人間
- ②赤 動物、虫、魚など
- ③緑 植物
- ④黄 生き物以外
(空気、石、星など)
- ⑤白 その他



内山先生のワークは楽しく、そして時に鋭く、生徒たちの心を開いてゆきます。

●長野市ボランティアセンター より

プログラムが長く続く間に生徒さんたちの様子も少しずつ変化して来ています。以前授業でやっていたロールプレイという形が成立しにくくなっていると感じました。ただ、それは巷で言われる「コミュニケーション力が不足している」というより、自己表現する場が普段の生活の中で不足しているのではないかと思います。

そこで、今年は先生方と相談し、「いのち」というテーマをよりクローズアップしようと、少し重いテーマをあえて生徒さんたちにぶつけてみました。結果はご覧の通り。大人でも困惑するような問いに、生徒さんは正面から向き合ってくれました。互いの意見を受け止め、「でも、私はこう思う」としっかり自分の意見も積極的に発言。思いを伝え合うこと、そこからあらためて「いのち」について考え合うことができたと思います。

大人になっていく女の子たちに、「いのち」について深く考える心を持ってほしい。先生方の思いが、様々な人たちと出会う楽しいワークショップになりました。夏の2日間、参加者は様々な「いのち」のありように触れ、考え、五感でそのいとのおしさを受け止めています。

設問 出生前診断で、あなたの子どもに障がいがあることがわかったらどうしますか？

- ①青 たとえ障がいがあっても、授かった「いのち」に変わりはないので産む
- ②赤 子どもには健全な体で育てたいので産まない
- ③緑 子どもの将来の幸せを考えると産まないほうが良いと思う
- ④黄 自分だけでは決められない。パートナーや家族と決める
- ⑤白 その他



地域で活動するみなさんの温かさが生徒たちの心をほころばせてくれます。

●長野清泉女学院高等学校 担当 竹村正之先生より

たった2日間の体験学習ですが、若い生徒たちには、自分を見つめなおし、人とのあり方を真剣に考える大変貴重な体験の場になっているように思います。中にはこのワークショップを機に自分の進路の方向性を定めたり、ボランティア活動を始める生徒もいますが、多くの生徒にとっては、ここでの学びを現実の場でどう生かしていくかが大きな課題となっています。今後も多くの方々のご協力を得ながら、より充実したワークショップにして行きたいと考えています。



2014年事例

善光寺ユニバーサルマップ アプリ プロジェクト



みんなで調査に出発!



福祉教育のついででの出会い

始まりは2012年2月、長野市ボランティアセンター主催「福祉教育のついで」でした。NPO法人ヒューマンネットながのの川崎昭仁さんは、自身も車いすを利用する障がい者です。出会ったのは国立長野工業高等専門学校(高専)の藤澤義範先生。川崎さんは「一緒に何かできませんか?」と声をかけました。そして、ヒューマンネット理事長島崎潔さんが継続していた「障がい者に必要なユニバーサル情報の発信」に技術を活用して「アプリ」という形にしようという活動がスタートしました。

趣旨に賛同した、障がい当事者、障がい者支援団体、福祉分野の専門家、企業の方、ボランティアが、ヒューマンネットを中心にプロジェクト方式でアプリづくりをしていくことで合意。「自分達の欲しいユニバーサルマップ」を思い描き始めました。

多様な人々とつながりあって

コーディネーターは、できるだけ多様な人々に関わってもらうことが福祉教育になると考えました。障がいのある人だけでなく、高齢者や子育て中の人たちにも必要な情報があるはずだと。

もともとボラセンと関わりの深かった子育てネットの稲村和美さんにこのプロジェクトの話をしたところ、「実は、うちの子どものクラスで中央通りの活性化について学習しているが、今ちょっと行き詰っていて……」という情報が!

「それなら」とコーディネーターはプロジェクトへの参加を提案。信州大学教育学部附属長野小学校の当時5年1組担任竹内良之先生へとつながりました。竹内先生はプロジェクトの経緯と目的を聞いて、調査活動を手伝いたいと申し出てくれました。

子どもたちの気付き

プロジェクトメンバーと附属小学校の子どもたち、ボランティア、県内の高校生でつくるサークルN-stationなど本当に多様な人々が関わりました。調査項目は、福祉住環境コーディネーターのアドバイスをもらい、道路や駐車場はもちろん、店舗についても間口の広さや段差、トイレの有無、人的介助があるかなど細かく調べました。調査に当たっては、商店の協力も不可欠でした。

小学生と大人と一緒に調査に行った際、「もっとちゃんと話して」と注意されたり、怒られることもありましたが、子どもたちにとっては大変ありがたいこと

で、社会を知る機会になりましたし、お店のみなさんから「地域を大切に」することの大切さを学ぶこともできました。

さらに、この取り組みがもたらしたものの一つに、長く一緒に一つの物を作り上げた仲間として、障がいのある人たちと子どもたちの間に、良い関係と連帯感が築けたことです。川崎さんはじめ、みなさんは何度も学校を訪れました。わからないことは怖いことではなく、親しくなればなるほどその人のことを知りたくなります。

そんな関わりの中から、子どもたちは、車いすの人が自力で登れる斜度と自分たちが感じる斜度の違いを知ったり、トイレの存在がいかに大切かを知ります。そして、中央通りにはどうして誰でも使えるトイレが少ないのかといった疑問を抱き始めました。「石畳を作るお金があったら、トイレを作ればいいのに……」そんな思いも生まれました。でも、子どもたちはそれがとても難しいということも知りました。

「トイレを作ってほしい」と言っていたのは他人事だったのかもしれない。簡単に作れないなら、どうしたらいいのかを一緒に考え続けていくことが大切なんだと気付いた」ある子どもの発言です。

●信州大学教育学部附属長野小学校 竹内良之先生より

「この子たちが成長して大きくなった時が楽しみだなあ」
2年間続けてきたアプリづくりの最後の調査が終わった時、近藤さんが遠くを見ながらそうつぶやいた。近藤さんは足が不自由で、杖をつきながら移動されるため、歩く速さがゆっくりである。それでもすべての調査に同行して下さった。そんな近藤さんの言葉が耳に入ってきた教師は、「それってどういうことですか?」と聞き返した。すると近藤さんは語った。

「この調査をしてきた子どもたちが大人になったら、この町の未来は確実によくなるなあって思ってる。嬉しいです。そう思うと本当に嬉しいんですよ」

川崎さんをはじめとするたくさんの方々に出会い、調査活動を共にした子どもたちにとって、道路の段差や斜度は、意識もなかったものから、いつも気に留まるものへと変わっていった。2年間の調査活動を振り返った孝志は、「今までやってきたのは、小さいことのかたまりだと思った」と語った。教師はそこに、微力ながらも積み上げてきた子どもたちの今を感じた。

しかし、子どもたちと一緒に調査活動をしてきた近藤さんは、目の前にいる子どもの姿だけではなく、子どもたちの未来を思い、その可能性を信じ、目を輝かせていた。近藤さんが子どもたちに見たものは、子どもたちの未来と、このまちの未来だった。教師は、この活動が、子どもたちの将来にもつながる学びになる可能性に気づかされた。近藤さんの生の声は、この子たちがつくる長野の未来への期待だった。



トイレの入り口の幅は?



介助しますよ。(旅館の人)

古い旅館には段差もあります。どうしよう?



駐車場の支払機。車いすの人には使いづらい。

●国立長野工業高等専門学校 電子情報工学科 准教授 藤澤義範先生より

長野高専では、以前から福祉機器開発に関する研究に取り組んでいました。その成果を長野市の「福祉教育研究会」などで発表していました。その中でヒューマンネットながのの川崎さんと出会い、このプロジェクトが始まりました。

プロジェクトを通して、多くの方と知り合うことができました。障がいがある人もない人も共に暮らせる環境づくりと一緒にやっていきたいと心から思うようになりました。「技術は人を幸せにする」という言葉を胸に、活動を続けてきました。

小学生や高校生も参加し、障がいを持つ子どもたちと歩き、商店街の人と触れ合い、怒られもしました。いろいろな人達の思いがこめられたアプリは2015年3月7日に一般公開します。

アプリ開発に携わった学生も卒業します。そして、次の学生がこの活動へ参加します。これからもずっと「地域とともに歩み、技術で人を幸せにする」活動をしていきたいと思えます。

●NPO法人ヒューマンネットながの 川崎昭仁さんより

最初は正直な所「いまさらそれをすることに意味があるのかな?」と半信半疑でした。でも、みなさんといっしょに作って行く過程こそ大切な場だったと痛感しています。

たくさんの方の思いを集めて議論した中から合意点を見出したり、調整したりするのは楽ではありません。でも、できたものを見た方から「こういうものほしかったよ」とか「良い取り組みだね」と言ってもらったことで、これは意味のあることなんだと確信しています。

完成したアプリは必ずしも完璧ではありません。これからも多様な人々と関わりながら、さらにパワーアップしていきます。今後どんな人たちがここに関わってくれるのかワクワクしてきませんか?



公開されているアプリのトップ画面
アドレス <http://unip.info/>



お話をさせてください。

「障がい者支援『マイステップ』」



「思いは同じ！」

「協力しよう」

「中央通りを、良くしたい」

「ユニバーサル情報が、つめたアプリだ〜」

「IT企業の人」



NSK 長野障がい者企画 当事者のみなさん

成竹 さん



篠原さん



近藤さん



「このエリアが、つくる未来は、明るい」

「カメラマンです」

「ビデオカメラで、車いす目線を記録」

高崎さん

「30年やっています、ユニバーサルマップが、ほしい」

「車いすのローカー、川崎さん」



NPO法人 ヒューマンネットほかの

「一緒に、つくろう！」

高専

「技術は人を、幸せにするのだ！」



「学生が、アプリを作りました」

「ハードで、超えられなくても、ソフトウェアでも、手に入れよう」

「保護者」

「調査にも同行」

「子どもたちの、頑張り、更だたい」

「ボランティア」

「専門性！」

「福祉住環境、コーディネーター」



「ぼくたちも、手に入れよう！」



N-Station 高校生 ボランティアサークル

「仲見世の人」



「中央通り、良くしたい！」

「車いす？」

「いいですよ、」

つながりマップ

イラスト：阿部今日子（長野市ボランティアセンター）



小さい段差だけど、車いすでは越えられません。

* 地域の身近な人たちとのふれあい ともに生きていくことのできる私たちに

千曲市立 埴生小学校

やまびこだより No.124 (2012年度)より



おばあさんとお話するのは楽しいなあ



「ふるさと」をいっしょに歌って楽しかったよ

更埴サービスセンターの皆さんとの交流



稲荷山養護学校の友だちと

埴生小学校ボランティア委員会では、更埴サービスセンターの皆さんとの交流を行なっています。交流会では一緒に「ふるさと」を歌うと、おじいさん・おばあさんはとても楽しそうで、私たちまで楽しい気持ちになりました。

また、牛乳パックで作った箸置をプレゼントすると、とても喜んでくださいました。他にも昔の遊びや趣味について、一つずついねいに話してくださいました。中に

は泣いているおじいさんもいて、理由を聞いてみると、私たちと話ができてうれしかったと言ってくださいました。

交流会から帰るときは、「今日はありがとうございました」と言ってくださり、私たちも心から「ありがとうございます」と言いました。

はじめは緊張していたけれど、笑顔があふれるいい交流会になりました。私は、いっしょに住んでいるうちのおばあちゃんとも、これからもたくさん話をしようと思いまし

た。また、総合的な学習の時間を使って、稲荷山養護学校の友だちとも楽しい交流をしています。このように身近な人たちとたくさんふれあい、楽しい時間を過ごしながら絆を深め、同じ地域の中でともに生きていくことのできる私たちになりたいと思います。

* 「伝えたいな」私たちの気持ち 3年間の介護老人施設「わかな」との交流を通して

箕輪町立 箕輪東小学校

やまびこだより No.134 (2014年度)より



本当だね。ありがとうね。

車いすでお散歩



おしぼりを手渡ししながら昼食準備



盛り上がった風船バレー

6年2組は4年生の時から3年間、小学校的の近くにある介護老人施設「わかな」のおじいさんおばあさんと交流してきました。5年生の時には、自分たちでクイズや劇を考えて発表したり、折り紙と一緒に折ったりしました。すると、とても喜んでくださいました。

「もっと、喜んでほしいな……」そんな気持ちを持ち続け、6年生になってから3回目の交流会をしました。「今度は、もっ

と笑顔が見たい」という願いをこめて、寄り添ってできる活動をしました。車いすを押しながら話しかけたり、なじみのある昔話の紙芝居を読んだりしました。また、風船バレーも、順番に風船を受け取ってもらえたので、楽しい時間が過ごせました。昼食の準備では、職員の方に教えてもらいながら一人一人におしぼりなどを渡しました。「ありがとう」という言葉がうれしくて、私たちの気持ちが通じたのかなと感じ

ました。今は4回目の交流会を計画しています。今までの経験を生かして、みんなが笑顔で喜べるようなステキな交流会にしたいと考えています。



好評だった「昔話」の紙芝居

* 笑顔で「ニコ・ハキ・ドン」 福祉交流体験を通して学んだこと

麻績村筑北村 学校組合立 筑北中学校

やまびこだより No.129 (2013年度)より



手作りの福笑い

中学生が来ると楽しいもんだね。



我が校伝統の「筑中ソーラン」も披露

◀どんな交流をしたら皆さんが楽しんでくださるのかを考えました。



▲帰る頃には涙を流す人も……。

また来てくれや〜。



◀車いすのタイヤをきれいに。

筑北中学校では「ニコニコ・ハキハキ・ドンドン課題解決(通称:ニコ・ハキ・ドン)」の合言葉のもと、様々な活動を行っています。地域を知り、地域に学ぶ活動の一環として筑北タイム(総合的な学習の時間)で、1年生は地域の施設を訪問し、福祉交流体験を行っています。昨年度は「てととと麻績宅老所」「グループホームてととと和合」「デイサービスセンターみづぎ」を訪問し、交流活動を行いました。

最初の交流では、利用者さんに声をかけても振り向いてもらえなかったり、話を通じなかったりと課題が残りました。施設職員の方にアドバイスをいただき、相手の方がどのように感じてくれるかを大切に考え、交流内容を決めていきました。次の交流では、声の大きさやしぐさ、表情にも気を配ると、利用者さんの笑顔が見られ、帰る時には涙を流して握手して下さる方もいました。

この体験を通して私たちは、相手の立場で物事を考えることや、相手の考え方や生き方を大切に思う気持ちを学びました。今後も福祉交流体験を重ね、地域に生きる一人として学んでいきたいです。

* ありがとうの「和」を広げたい! 地域と笑顔でつながるボランティア

諏訪市立 諏訪西中学校

やまびこだより No.123 (2012年度)より



▲緑化委員とボランティア委員で協力して育てた花を贈りました。

◀利用者の方々の明るい笑顔で、私たちも和みます。



諏訪西中学校では、「地域の方々とのつながりを大切にしたい」という願いから、介護老人保健施設「すばらしき仲間たち」やデイサービスセンター「西山の里」を訪問し交流活動を続けています。

2010年度からはさらにつながりを広げたいと考え、同じ地域に住む豊田小学校と湖南小学校の児童の皆さんに呼びかけて、一緒に諏訪湖清掃に参加したり、緑化委員とボランティア委員で育てた花を施

設に届けたりしました。施設訪問では、利用者の方々がいつも優しい笑顔で「ありがとう」と声をかけてくださいます。その「ありがとう」の言葉は私たちの心を温かくし、緊張していた週一回の訪問も、だんだん楽しみなものになりました。文化祭では、施設の職員の方から「相手に感謝の気持ちを持ち、いつも笑顔でいてもらえるように心がけています。」というお話

▲「地域をみんなで一緒に守りたい!」小学生と一緒に諏訪湖清掃。をお聞きしました。笑顔ということの意味を考えながら、私たちもお互いが笑顔になれるような交流を続けていきたいと思うようになりました。これからも、地域の方々私たちが笑顔で和めるつながり、ありがとうの「和」が広がっていくようなふれあいを続けていきたいと思ひます。

SO交流で広げよう、心のつながり！ アスリートの方々とともに、スポーツで汗を流す

松本市山形村朝日村 鉢盛中学校 中学校組合立

やまびこだより No.125 (2012年度)より

バスケットボールの試合



SO (スペシャルオリンピックス)とは、知的障がいのある方にスポーツトレーニングと競技会を提供している国際的なスポーツ組織のことで、そして、SOに参加する選手をアスリートと呼んでいます。

フロアホッケーの試合



ハイタッチでお別れ

楽しかったね。

鉢盛中学校では、生徒会活動や総合的な学習の時間の一環として「SO (スペシャルオリンピックス)交流」を行っています。交流は月に1~2回程度、アスリートの方々に中学校の体育館に来ていただき、日曜日の午前中に行われます。中学校からは福祉交流委員とボランティア参加の生徒が毎回30名ほど参加し、アスリートの方々とバスケットボールやフロアホッケーに取り組み、スポーツを通

じて交流を深めています。

最初は緊張気味の生徒も、アスリートの方々が笑顔で声をかけてくれるので、パス練習や作戦タイム、試合を重ねていくうちに、自然と会話がはずむようになっていきます。まとめの会では、心の距離がぐっと近づいた現れとして車座も小さくなり、うちけた表情で感想を伝えあい、最後は再会を願ってハイタッチでお別れします。

交流を通して生徒は、アスリートの方々のペースに合わせて活動すること、アスリートの方々に伝わるていねいな言葉づかいを意識することを学んでいきます。そして、日常の学校生活においても相手の意識に立って行動できる生徒が確実に増えているように感じます。今後もさらに、「SO交流」の輪を全校に広げていきたいと思っています。

交流を深めよう 泉野っ子タイム!! 聴覚障がいがある方との6年間の交流を通して

茅野市立 泉野小学校

やまびこだより No.129 (2013年度)より

手話をつけた歌を発表



すっかりなかよくなつたよ!



ジャガイモもち作り

泉野小学校の6年生は今年度12人。1年生の時からずっと聴覚障がいがある方との交流会を続けてきました。

昨年度は、市の「人権の花の交流会」で、一緒に行った人権の花を育てる活動の様子と、音楽会でも披露した手話をつけた「翼をください」の歌も発表しました。

今年度は、どんな活動をしようかと年度当初に話し合い、各学期に1回ずつ交流をすることにしました。1学期には、去

年と同じように一緒にプランターに花を植え、心温まる活動ができました。夏場にはその花がたくさん咲いて玄関を彩りました。

10月の2回目の交流では、自分たちの畑で採れたジャガイモを料理することにしました。どんな料理にしたらたくさん話せるか、また安全に調理ができるかなどを

話し合い、ホットプレートで作れる「ジャガイモもち」を作ることにしました。調理中にも、手話や通訳の方を通してたくさん話ができました。最後に、PPバンドで作ったかごをプレゼントしたところ、「今度は私たちからも何かプレゼントをしたい」と言っていただきました。

6年間の交流を続けて、手話で簡単な話ができるようになったり、どうしたらもっとなかよくなるか考えられるようになりました。

プランターづくり

みんな集まれ! 元気っ子タイム 縦割りグループの活動を広げよう

信濃町立 信濃小中学校

やまびこだより No.128 (2013年度)より

信濃小中学校には、1年生から9年生(中学3年生)が交流する縦割りグループがあり、一緒に遊んだり給食を食べたりして楽しく交流をしています。

そのほかにも「元気っ子グループ」という名前の1年生から4年生だけの縦割りグループもあります。月に2回、「なかよし元気っ子タイム」を開いて、一緒に遊んだり、みんなでがんばりたいことを話し合ったりしています。

今年度は「ニコニコあいさつ隊」を結成して、グループごとに選んだ場所で全校のみなさんに元気よくあいさつをする活動を

しています。同じ校舎で生活している中学生も「おはようございます」と声をかけてくれて、とてもうれしいです。

6月には、「元気っ子グループ」で「ごみゼロ運動」を行いました。学校のまわりでごみ拾いや草取りをしたいところをグループごとに決めてから取り組んだので、いろいろな場所がきれいになって気持ちよかったです。

これからもアイデアを出し合って、学校や地域のためにいろいろなことに取り組んでいきたいです。

玄関で元気にあいさつ



おはようございます!

中学生と交流



児童会活動でみんななかよしに 今年度のテーマは「協力」です

中野市立 高丘小学校

やまびこだより No.130 (2013年度)より

高丘小学校では、全校児童がなかよくなれるように児童会が中心になってテーマ「協力」に向けて活動をしています。

児童会祭りでは、各委員会の活動内容を生かした保健給食委員会の「栄養バランスクイズ」、リサイクル委員会の「キャップつみ」などのアトラクションがあります。それぞれ、1年生から6年生まで全校の児童が、楽しみながら、遊びを通して自然に交流できるような活動内容になっています。

各委員会の活動も盛んです。なかよし委員会の「なかよし給食」では、姉妹学



なかよし委員会の「なかよし給食」

級ごとに、一緒に給食を食べて交流しています。代表委員会の「あいさつウィーク」では、期間中、各クラスの代表委員が全員昇降口に立って、あいさつや握手で全校のみなさんを迎えたり、スタンプラリーを

しながら、楽しくあいさつに取り組めるようにしたりして、なかよしの輪を広げています。また、清掃委員会は、月に一回ずつ、クリーン登校日を設定して、友達と通学路のごみを拾いながら登校するように呼びかけています。

これらの行事や活動を通して、全校のみんながなかよくなれるようにがんばっています。



清掃委員会の「クリーン登校日」

合言葉は「ふれあい」 広げよう! 「仲良しの輪=和」

松本市立 二子小学校

やまびこだより No.132 (2014年度)より

二子小学校では、「ふれあい」を合言葉に「仲良しの輪=和」を広げる活動に取り組んでいます。

全校縦割り班の「ふれあい活動」では、6年生のリーダーを中心に、遊びやお弁当の会食と一緒に楽しんでいます。児童会では、「つなげよう二子小の和」をテーマに、姉妹学級や縦割り班のつながりをいかにしながら全校が仲良くなるような集会を催しています。

私たちの「仲良しの輪=和」は、学校の外にも広がっています。クラブでは、手品や卓球・手芸などを地域の方々に教

えていただいています。児童会なかよし委員会では、近くの介護老人福祉施設へ行って交流を楽しむ活動を行っています。

4年生は、和太鼓に取り組み、音楽会をはじめ、地区の文化祭や介護老人福祉施設で演奏しています。この太鼓は、10年以上前に地域の方から教えていただきました。今では学校の伝統として根づき、毎年秋に3年生が4年生から太鼓の技を引き継ぎます。私たちはこれをとても誇りに



地域講師の方とのクラブ活動

感じ、大事に受け継いでいこうと思っています。

これからももっと「仲良しの輪=和」を広げていけるようがんばっていききたいです。



4年生の太鼓演奏

＊ここは 地域みんなの学校

地域の中に学校がある、学校の中に地域がある

やまびこだより No.134 (2014年度)より



ホタルの幼虫を放流



音楽の授業



108人は中沢の宝!
～応援隊にご協力お願いします～

中沢地区の全戸に配布した「応援隊員募集」のチラシ



放課後学習

駄菓子屋さん

中沢小学校コミュニティスクール構想

- ◎中沢を知り中沢を愛する子を育てます。
- ◎中沢を元気にする活動を率先して行います。
- ◎中沢小学校に地域の世代間交流の拠点としての役割を持たせます。
- ◎「学校・家庭・地域の子どもたちを軸とした支え合いの循環」を構築します。

駒ヶ根市立中沢小学校は、明治42年(1909年)に地域の人の寄付によって建てられた学校です。1960年代には900名の児童が在籍したことがありましたが、今では地域に若い人も減り、児童数は108名となりました。

地域の皆さんによって建てられた中沢小学校は、創立以来地域にとって大切な場所でした。そうは言っても、やはり学校は、児童の保護者でもない、ちょっと行きにくい場所でした。

地域の人々が気軽に訪れる学校

ところが、今の中沢小学校には、そんな学校の敷居の高さは感じられません。「リンゴが採れたから食べて」「マツタケが出てたから持ってきたわ」…職員室には、地域の人々がひっきりなしに訪れます。授業をのぞくと、先生の他に地域の方がいて、定規の構え方を教えていたり、音読を聞いていたり、一緒に歌を歌ったりしています。

2012年度から、ボランティアの「中沢小学校応援隊」が活動しています。環境美化や、放課後の宿題の指導を手伝ったり、炭焼き、田んぼ作り、ホタルの飼育、書道や墨絵の指導など、子どもたちに教えた得意技を持つ人たちが集まっています。

さらに今年度からは、4名の学校支援コーディネーターが地域とのパイプ役として日替わりで勤務しています。保護者を中心とした「チョコっと部隊」も発足。「ちょっとだけ助けてください!」というメールが、学校から保護者に届きます。メールを見たお母さんたちがやってきては、子どもたちと先生を助けてくれます。保護者のお友達、近所の人…学校に出入りする地域の人々の輪は、どんどん広がっていきました。「チョコっと部隊」で授業のお手伝いに来たお母さんたちが、思いがけず新しいことを学んだりする場面も見られます。

こうして集まった地域の人々が、また新しい提案をしてくれます。「中沢も昔

は賑やかだったけれど、すっかりさみしくなったなあ」と、子どもたちが集まって遊べる「駄菓子屋さん」を、月に1度開いてくれました。「ポン菓子」の実演や紙芝居など、楽しいものをみんなが持ち寄って大賑わい。駄菓子屋さんには、小学校に上がっていない小さな子ども、大人たちもやってきました。小さな後輩も、お父さん、お母さんたちも、おじいちゃん、おばあちゃんも、中沢のみんなが集まる学校。多世代交流と呼ぶにはあまりに自然な、地域そのものが、中沢小学校の中にあるのです。

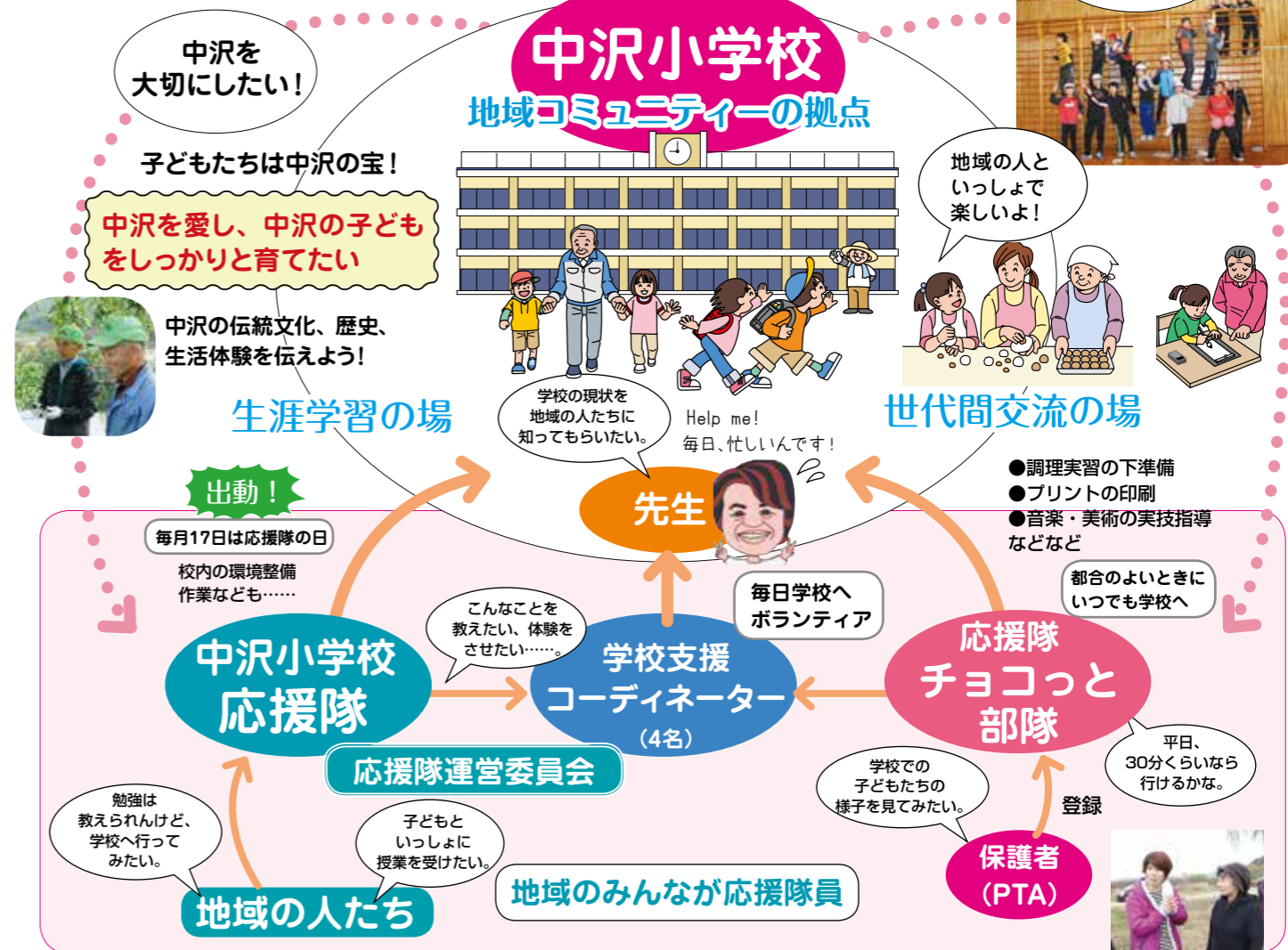
学校から中沢を元気に

子どもたちに中沢の良いものを伝えたい地域の人々と、猫の手も借りたいほど忙しい先生方。学校から中沢を元気にしたい、中沢を知り、中沢を愛する子どもを育てたい、という思いを共有しています。様々な世代の人が集い、学び合う。中沢小学校は、「子どもと共に地域も育つ」場となっています。

つながりマップ

学校から中沢を元気にしよう!

中沢が好き!



コミュニティスクール 取り組みのポイント

1. 学校の現状を共有する

先生方がどれだけの業務量を抱えているか、学校がどんな課題を抱えているか、どんな子どもたちが学んでいるか、いわゆる「学校の憂鬱」を地域の人々は知りません。学校はそれだけ、地域の人には敷居が高いのも事実です。学校の現状を共有し、地域の人は何ができるのかを、一緒に考えることが必要です。

2. 保護者も地域の住民

ゲスト講師を招いて昔の遊びを教わったり、畑や田んぼを作ったり。学校に関わるボランティアは、比較的高齢の方が多く傾向があります。しかし、もっと学校にとって身近な地域住民は、保護者です。保護者の持つ力やネットワークを活かすことで、活動者の幅が広がります。また、学校の中に三世代のつながり、学び合いが生まれてきます。

3. 学校を地域に開き、助けられ上手に

子どもたちに関わりたい、学校を助けられるという人は地域にたくさんいます。そんな人々と連携をしていくためにはまず自らを開くことが大切です。「助けて」と言えば、助けてくれる人がいます。「助けられ上手」が地域をつないでいきます。中沢小学校では、メール配信や学校ブログでこまめに「助けて」と言い続けています。

4. 地域の夢を共有する

地域で育つ子どもがどんな子どもになってほしいか。学校がある地域はどんな地域であってほしいのか。その「夢」を共有することで、地域と学校は仲間になります。「地域の教育力を活かす」というのは、地域の力を借りて子どもたちを育てていくことであると同時に、地域にとっては地域の担い手である子どもたちを育てていく目的も持っています。学校は、地域づくりの拠点でもあるのです。

* ふるさとってなんだろう？

常盤で生きる 「昭和58年洪水」にふるさとを学ぶ

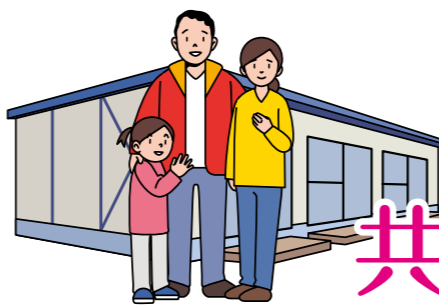
やまびこだより No.130 (2013年度)より



災害から立ち上がった私たちの地域



昭和58年の洪水 飯山市常盤地区の様子



共感

東北の人たちも、常盤の人たちとふるさとへの気持ちは、同じなんだ！



ほくらは常盤が大好き！だからふるさとを大切にしていきたい！



飯山市常盤地区は千曲川沿いにあり、昔から何度も水害に悩まされてきました。昭和58（1983）年にも千曲川があふれ、地区は泥の海となり、常盤小学校も被災しました。

昭和58年の被害
 浸水した家 702 戸、水死したブタ 646 頭、水死したニワトリ 2250 羽、被害総額 55 億 1000 万円

東日本大震災の被災地と私たちの地域

東日本大震災についてのニュース映像を見ていた常盤小学校の子どもたち。「かわいそう」「どうしてあんなにつらい思いをしたのに、帰りたいんだろう？」「また津波が来るかもしれないのに…」そんな疑問が、学びのはじまりでした。

子どもたちのふるさとである飯山市常盤地区も、度重なる水害に悩まされてきました。寛永2年(1742年)の「戌の満水」では、何千人もの人が亡くなったと伝えられています。

昭和58年(1983年)にも千曲川が決壊し、地区は泥の海になりました。常盤小学校も被災しました。身近な人たちが災害と復興を体験しています。その体験談を通してふるさとを考え、ふるさとへ帰りたいという東北の人々の気持ちに寄り添えたら…そんな5年生担任の藤田茂樹先生の思いから、「常盤に生きる」の授業が始まりました。

まず、家族などの身近な人に当時の話を聞くところから始めました。30年前の水害のことを、しっかりと聞いたのは初めてのことでした。当時の新聞も読みました。当時の学校の文集には、子どもたちのお父さん、お母さんの作文が載っていました。30年前だけでなく、昔からここでは多くの災害が起きていたことも知りました。

夏休みには、子どもたちはグループに分かれて、地区の人たちに聞き取り調査を行いました。「30年前の災害の時はどんな様子でしたか？」「どんなことを考えましたか？」「洪水を経験しても、常盤に住み続けているのはなぜですか？」「今度洪水の被害にあっても、ここに住み続けますか？」。夏休みに地域の家々を訪問して、話を聞きました。お会いした人の数は授業全体で200人にのぼります。「再び災害があってもここに暮らす。先祖代々のふるさとだもの」という人がほとんどでした。

昔からみんなが助け合ってふるさとを

生まれ育ったふるさとだから、住み続けたい。



グループごとに訪問。約160人に聞きました。

どうして住み続けているのですか？

今度洪水が起きたらどうしますか？

守ってきたし、自分の身近な人たちもそうやって立ち上がったことを子どもたちは知りました。調べたことを地域で発表し、これからは自分たちもそうしていくのだという思いを持ちました。なぜなら、ここが自分たちの「ふるさと」と知ったからです。「東北の人たちも、ふるさとに帰りたい気持ちは同じなんだ」。常盤を大切に思う人々の思いに触れた子どもたちの気持ちが、被災した人々の気持ちに重なりました。

1 東日本大震災の記録を見て

- 「NHK 放映映像」を見る
- 「信濃毎日新聞記事」を読む

そういえば、常盤地区も昔から何回も水害に悩まされていたんだよね。

生まれ故郷だから……、思い出がある所だから……じゃないかな。

大きな被害にあい、つらい思い出があるのに、どうして、もう一度そこに住もうとするのだろう？

10 まとめ

洪水学習で学んだことを冊子にまとめ、地域の人たちに配布

地域の記録、歴史づくり

また洪水が来ても、僕らも助け合っていきたい。

常盤の護岸工事の見学

- 復興する常盤
- 災害に負けない！

8 思いの共有

地区の皆さんに常盤への思いを聞く

地域の人たちのあたたかい心に触れる



暑いのに、がんばってるね。

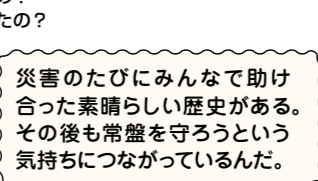
7 30年前に活躍した人の話を聞く

- 消防団の人は何をしたの？
- なぜ水害が起きやすいの？
- 学校の様子はどうだったの？



地域の誇りを知る

災害のたびにみんなで助け合った素晴らしい歴史がある。その後も常盤を守ろうという気持ちにつながっているんだ。



常盤の人たちは昔から優しいんだ。

6 「災害と常盤の人々」について講演を聞く

- 善光寺大地震の時も協力して、救助、復興したというお話を聞く



↑震災で亡くなった人はこれよりずっと多かった。

270年前の「戌の満水」で犠牲になった人を供養したお地蔵さんだったんだね。

4 親戚や知り合いに体験を聞く

- 聞いた話を証言集にする
- 29人の証言をまとめました

5 当時の新聞記事を読む

- 「北信濃新聞」「信濃毎日新聞」
- 客観的に災害の様子を知る

昭和58年の台風は常盤だけでなく各地で大きな被害を出したんだね。

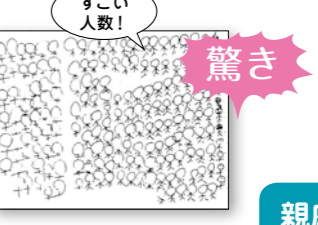
驚き
 こんなにも大変な体験だったのか……。

3 もっと昔の水害のことも調べてみる

- 学校近くのお地蔵さんの説明を読んでみる
- 推定被害者4000人……それってどんな人数？想像して描いてみる



驚き
 ●お父さんたちの小学生の頃の作文があった！こんなこと思ったんだ
 ●おじいさんに聞いてみたらいろいろ教えてくれた



↑震災で亡くなった人はこれよりずっと多かった。

2 家の人の思い出を聞く

驚き
 ●お父さんたちの小学生の頃の作文があった！こんなこと思ったんだ
 ●おじいさんに聞いてみたらいろいろ教えてくれた

驚き

2 地域で生きる

発見

5

6

7

8

10

「ふるさとサクラといえは…」

地域を足場にした体験学習

福祉教育実践ガイド 2012年度版より



「ふるさとづくり」の授業で、おずおずと地域に踏み出した中学生。顔をあげたら、そこには助けてくれる人がたくさんいました。地域の人力を借りて、活動はどんどん広がっていきました。

「私にとってのふるさとサクラを見つけよう!!」
3 学年 総合的な学習の実践から

知ろう、見つけよう、私たちの地域を!

長野市立櫻ヶ岡中学校では、総合的な学習の時間で「地域を足場にした学習」を行ってきました。校舎の改築のために切られてしまう桜の木を地域の人たちにも覚えてほしい、と最後の花を押し花にして葉を作り販売する「さくらプロジェクト」に取り組んだほか、地域の方々に協力していただき「働くって何?」ということを考える職場体験学習なども行ってきました。

「さくらプロジェクト」に取り組んだ2年生が3年生になる時、先生方は気づきました。地域の皆さんに学んできたけれど、生徒たちは、地域にそれほど愛着を持っていないのではないかと。中学校を卒業すると、ますます地域との関係が薄くなってしまいます。ここはかけがえのない「ふるさと」だということを意識し、自ら「地域を知りたい、地域のために何かしたい」と思っています。

そんな先生方の願いから、3年生の総合学習では、「知ろう 私たちの住む

地域 見つけよう 私たちのふるさと」というテーマで活動をしていくことになりました。

まちに出て、いろいろな人に会うことで見えてきたもの

「ふるさとサクラといえは、何?」……みんなで出し合ったものをもとにテーマ別のグループを作りました。こうして「創ろう・造ろう 私にとってのふるさとサクラ～地域に発信! サクラ○○プロジェクト」(○○には、p.28-29で紹介する6つのテーマが入ります)がスタートしました。

具体的にどんな活動をしたらいいかを話し合い、工夫して進めていきました。普段なかなか会えない人、行けない場所へも、勇気を出してアタックします。最初は誰に話を聞けばいいのかさえ分からないグループもありました。しかし、まちに出ていろいろなものを見て、人に会ううちに、課題や宝物、次の活動の糸口が見えてきました。中学生だからこそできる関わり方もあれば、大人の社会の現実に触れることもありました。

小さな子どもたちからお年寄りまで、いろいろな人に会い、たくさんのことを教えてもらったり、挨拶をしてもらえるようになったりしました。人と話すときに、勇気を出して声をかけること、どうしても伝わるのか工夫することも学びました。

この学習は、3年生の総合的な学習の時間の半分以上にあたる約40時間をかけて行う、大プロジェクトとなりました。

地域の結びつきを感じて

「私たちのふるさとサクラ」。そう意識して、地域に視線を向けると、たくさんの方が応え、助けてくれました。「それまでは、地域は自分に関係ないと思っていたけれど、この活動を通して地域との結びつきを強く感じた。これからは積極的に関わっていききたい」。一人の男子生徒が、卒業前にたくさんの大人たちの前でそう発表しました。活動を通して、大きく成長したのです。

「ふるさとサクラといえは…」 地域を足場にした総合学習

*2013年2月2日「福祉教育のつどい」事例発表より

総合的な学習の時間◎テーマ

地域を足場に自立していく生徒を育む総合的な学習

「地域を足場に」とは・・・

- ①地域に学習素材を見つけ、地域とのかかわりの中で学習を深めていく。
- ②地域から見いだした課題をもとに、視野を社会全体や世界に広げていく。
- ③社会にある問題等から課題を見だし、地域に戻って学習を深めていく。

地域を足場にすることで、より体験的であり、実感を伴った学習が展開できる。

→福祉教育とのつながりが生まれた

●櫻ヶ岡中学校 小松保裕先生より

活動を通して、地域の方の温かさ、支えを感じることができました。生徒たちが何かしようとする、それに応えてくださる方が地域にはありました。何でもやってみよう、やってみれば何とかなる、という経験をして、大きな自信になったと思います。ある生徒が言いました。「私が地域のことを気にするようになったら、地域の方が私に寄ってきてくれるようになった」。顔を上げれば相手と目が合う。目が合えば挨拶をして関係が始まる。私もそのことを、生徒たちから教わりました。

生徒たちもたくさんの人たちと出会ったし、地域の人たちを生徒たちがつなぐ場面もたくさんありました。私自身も、生徒たちのおかげでいろいろな人とつながることができました。地域に出会う、つながる、そして笑顔が生まれる、そういう福祉教育だったと感じています。



2学年前期

「働くってどういうこと?」

～ふるさとサクラに働く人々の生き方に学ぼう～

大まかな学習の流れ

*「働くうえで大切なこと」検討会

ビデオを見たり、自分で予想したりして意見を出し合う

*「ふるさとサクラに働く方のお話を聞こう」

まちの人たちから働くことや商店会などについて、話していただく

*ふるさとサクラ探検隊

学年で分担し、グループごとに職場訪問インタビュー

*職場体験学習

(職場決定・事前打ち合わせ・当日・お礼状書き等)

個人テーマを決定し、テーマに沿って体験・インタビュー

*「働くってどういうこと?」私の結論!!

振り返りマップをかき、学年討論会で互いの意見を交換

2学年 後期

「知ろう 私たちの住む地域 見つけよう 私たちのふるさと」

大まかな学習の流れ

*「ふるさとサクラといえは○○」

○○に入るものを考え、学年集会で紹介しあう。知っていること、もっと知りたいことを付箋に書き、ボードに貼る。

*「ふるさとサクラ調べ隊」

自分が調べたいことを決め、グループで検討しながら実際に地域に出て調べる。討論会で調べたことを紹介する。

*ふるさとサクラ調べ隊で学んだこと

調べる中で知ったことや生まれた思いをもとに、これから自分ができることやしたいことを考え、紹介し合う。



3学年

「創ろう・造ろう私にとってのふるさとサクラ ～地域に発信!! サクラ○○プロジェクト～」

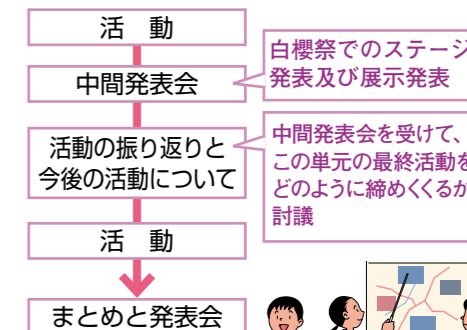
これまで(2学年)の実践を踏まえ……

生徒のふるさとサクラに対する思いの高まりを大切にしつつ、地域に対して自分ができることを探り、実行することで、地域への所属意識を高め、自立できる生徒になってほしい。

生徒が「わたしにとってのふるさととはここにある」という思いをもって中学校での学習を終えられるように願って。



大まかな学習の流れ



「創ろう・造ろう 私にとってのふるさと桜
～地域に発信! サクラ○○プロジェクト」

1.七瀬通り商店街

商店街を活性化させ、元気なまちに!

- 夏祭りの参加、手伝い
- 企画会議へ参加 ● 商店街の人と交流
- スタンプリヤーの企画実行
- 七瀬通り商店街のPR

昔ながらの商店街です。



まちのプロモーションビデオも作っちゃった!



夏祭りには金魚すくいだよね!

スタンプを集めたらお土産があるよ!

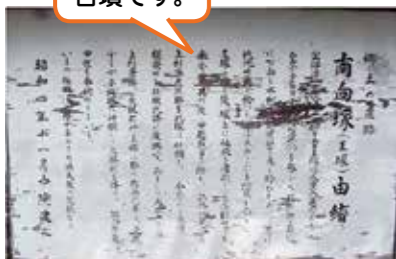


淋しくなってきた商店街を盛り上げたい! 楽しい企画をたくさん考えました。

信大生とコラボ!



謎の多い古墳です。



南向塚古墳のお掃除... 地元の住民自治協議会のホームページでも紹介しました。



○○にはこんなテーマが入ります

2.東口開発*

長野駅の東口開発を知り、より良いまちづくりを!

- 今後の開発について ● 区画整理、住民意識
- 開発前と開発後の変化 ● 東口の公園開発
- 開発の内容を知ってもらう

*1993年度から続く長野駅周辺の土地区画整理事業

開発? それとも区画整理?



立場が違くと、このまちの見え方も違うんだね。

私達のふるさと桜にはこんなにたくさんの人・もの・場所がありました。

4.レキシセツ(歴史・施設)

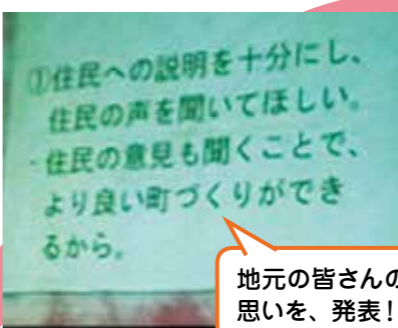
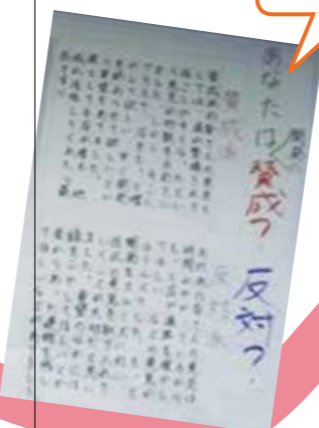
- 放送局で櫻ヶ岡中学校をPR
- 信州大学YOU遊フェスティバル企画・参加
- 善光寺を世界遺産に
- 長野駅周辺の見どころをテーマにタウン誌作成
- 新しい市民会館のPR 市民ワークショップに参加
- 南向塚古墳の調査、宣伝

地元テレビ局の情報番組に出演させてもらい、学校のPRをしました。



この桜の木も今はありません。

いろんな意見があるんだなあ。まちづくりも難しいんだ。



地元の皆さんの思いを、発表!

地域環境チームのみんな～! 花壇作るの手伝って!!



よーし、一緒にやろう! 立派な花壇にするぞー。

高齢者の方にいろいろなことを教えてもらいました。

お年寄り・子ども=福祉 ⇒ ボランティアセンター! ...と思ったら



ボランティア「される」だけじゃないんですよ! ここには元気なお年寄りがいっぱい来てます!



手をつないで一緒に遊ぼう!

歓迎してくれた! うれしいなー!



5.地域環境

みんなが住みやすい地域に!

- 地域ごみ拾い、ごみ調査
- 地域を花でいっぱい
- 桜の押し花作成
- 桜の木を使って記念品の制作
- 地域のバリアフリー調査



おうちゅう 櫻中のシンボルでもある桜で押し花の葉を作りました。

長野のお土産といえば七味唐辛子...「八幡屋磯五郎」の工場長さんに会いに行きました。

6.特産品

地域の特産品をPR!

- 七味を使った料理
- 七味缶のイラスト
- イメージキャラクター作成
- おやきの調理、開発、PR
- りんごを使った料理、開発、PR

会社のしくみや商品づくりのコストのことなど初めて知った!



オリジナルキャラクター「唐辛七味の助」。缶のパッケージデザインに提案させていただきました。

いろんな事情で製品化できなかったけど...





★ 町道の「桜トンネル」を守ろう！

50年続く自慢の伝統活動

やまびこだより No.13 ■(2014年度)より



ホテルの里として知られる上伊那郡辰野町。まちなかにある城前橋から JR 飯田線宮木駅までの町道は美しい桜並木の一本道です。辰野中学校では、50年間にわたって、この桜の美化活動に取り組んできました。桜並木の周りには、地域の人々のいろいろな思いがあります。みんなの思いが引き継がれ、つながりながら、まちは育っていきます。



辰野中学校と「城前の桜」

辰野町立辰野中学校に近い辰野町城前橋から、最寄りの JR 飯田線宮木駅までの一本道「辰野町道1号線(通称:城前線)」は、美しい桜のトンネルです。

この並木道の桜は、1960年に母国に帰国した北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の方々、辰野町に暮らした思い出に、と植樹していったといういわれのあるものです。

この沿線の清掃と緑化活動には、早くから辰野中学校の生徒たちが関わっていました。苗木を買って植樹し、草取りをし、季節になると花びらや落ち葉の掃除をしてきました。50年も続く、辰野中学校自慢の地域活動です。

一人の女子生徒の思いから

この活動が始められ、そして続けてきた背景には、この特別な桜に対する思いがありました。

活動を始めたのは昭和37年(1962年)、当時の辰野中学校3年生の女子生徒。生徒会活動の帰りに、偶然この桜のいわれを知りました。当時の桜は瀕死の状態。そこで、彼女は「自分にできることをしよう」と、友人と草取りを始めます。彼女の思いと行動は後輩たちに引き継がれ、緑化委員会、そして生徒会の活動へと広がって行きました。

今では老木になり、元気がなくなってきた、並木道の桜。沿線の住民の方からは「確かに花はきれいだけど、いい時ばかりではない。最近は大きな枝が落ちて危険。そろそろ伐採してはどうだ」という声も挙がってきました。

2010年に、沿線にある辰野町ボランティアセンターを中心に、桜の手入れを地域の人々で考える「城前のサクラ長寿化プロジェクト」が始まりました。

城前のサクラ長寿化プロジェクト

プロジェクトでは、桜についての勉強会、苔落としなどの作業をしています。また、2012年1月に開催された「協働のまちづくりを進めるボランティア懇談会」(辰野町ボランティアセンター主催)では、地域の人々が桜について話し合いました。辰野中学校もこのプロジェクトや会議に参加し、地域の方々と出会い、話し合う機会を持ちました。

中学生が育ててきた並木道は、今ではまちのシンボルとして人々に愛され、また、いろいろな思いの出会い場になりました。桜を通して、沿線の空き家の増加や高齢化の現実など、地域の抱える課題にも気づかれます。

活動を継続し、また地域に広がっていくためにどうしたらいいか、辰野中学校の皆さんは今も考え続けています。

辰野町「城前線」桜並木の物語

このまちを思う北朝鮮の方の気持ちがこもった大切な桜だったんです。



1960年 朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の人たちが母国に帰国の際、記念として城前線に桜の木を植える。



思い出の桜が枯れそう...

1962年 辰野中学校3年生の女子生徒が、友達と2人で桜の草取りを始める

1963年 辰中生みんなて桜を育てようと呼びかけ

1964年 辰中生徒会に緑化委員会が発足

1965年 桜並木の掃除は辰中の伝統的活動に!

その後...桜並木は大きく育て、見事な桜のトンネルになりました。

桜並木だって、いいことばかりじゃない。

桜はきれいに咲くけれど、沿線の人の気持ちは複雑...

害虫
落ち葉
花びらの掃除
枝が折れた!

キケン!

後輩にも桜並木のいわれを知ってもらい、これからもまちの人たちと一緒に守り育てていきたいです。

1970年 町の整備が行われ、桜並木は見慣れた風景となり、桜並木のいわれも次第に忘れられてしまいました。

やがて、桜並木も老木化が進み...

地域の人と一緒に考えました。

立場が違えば見方も違うんだ。



辰野中学校生徒会役員(2012年度)

2010~ 「城前のサクラ長寿化プロジェクト」始動

いろいろな立場の、いろいろな思いがある。だからみんなで、桜のことを話し合おう!



いろいろな人と「桜」について話をしました。

「協働のまちづくりをすすめるボランティア懇談会」開催

地域の人と一緒に取り組んでいます。



幹や枝の苔落とし

桜の木のカルテ作り

桜がもっと元気になるようにしたい。

桜並木はまちのみんなのもの みんなで協力したらみんなが喜ぶ、桜も喜ぶ!

●辰野中学校生徒会顧問 山本訓子先生より

「先輩から引き継いだ活動だから続けていく」というだけで取り組むのではなく、「なぜこの活動が大切なのか」ということを全校が理解した上で、新しいアイデアを加えながら生徒会として取り組んでいけるようなサポートが顧問としては大切だとあらためて感じました。

今年度、ボランティアセンターの方々に入ってもらい、様々な活動を地域の方と一緒にさせていただいたことで、生徒達は地域の方々の願いや先輩方の願いを受け継ぎ、これまで以上に桜並木を大切にしていきたいという気持ちを強く持って積極的に活動に取り組んできました。生徒達には卒業後も気持ちを大切に持ち続けてほしいと思います。

今後も地域の皆さんと一緒に大切な桜並木を育ててほしいと願っています。

植えた方の思いや育てたいと思ったはじめの思いも知って、つないで下さいね。

活動を始めた当時の女子生徒 野澤長子さん





＊ 柳中セミナー

共生の街づくり NAGANO

福祉教育実践ガイド 2011年度版より

ボランティアセンターを訪問



環境のことを考えている人たちはみんな熱いなあ〜。私たちがこんなふうに見えるよ。

さて、では自分たちの住んでいる地域はどんなところなんだろう。

あれえ〜？ 点字ブロックが壊れてるよ。これじゃ視覚障がいの人たちが困るよね！

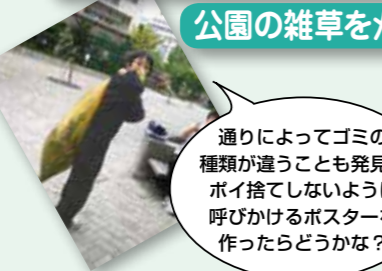
初めてボランティアセンターを訪れました。「ボランティアってなんだろう？」から学習しました。

ちょっとした段差でも車いすはたいへんなんだ。力も要るね。

車いすで街にでてみよう

ボラセンでは、まずボランティアの語源「Volvo」の意味から教わりました。意外と知らないボランティアの本当の意味。もっと自由でいいのなあ〜。自分から動いてくることがあ〜。発見がいっぱいありました。

ゴミ拾いをして街をきれいにしよう



通りによってゴミの種類が違うことも発見！ポイ捨てしないように呼びかけるポスターを作ったらどうかな？

公園の雑草を刈って、花を植えよう



公園で出会った娘さんとお母さんから、いろんな話を聞きました。街に出るとそこで暮らす人たちと出会えます。あたりまえだけど、授業で行くとは違って見えるね。

出会い、気づき、動き出す心

柳町中学校では、2年生全員が「柳中セミナー」という教科・クラスを超えてまなぶ授業があります。テーマはいろいろ。「近未来予測セミナー」「写真で語る長野」「〇〇な体になりたい！」「釣り」「共生の街づくり NAGANO」…並んだテーマを見るだけで、いったい何が起こるのかワクワク。自分で興味のあるテーマを選んで、地域の人との交流の中からまなびます。テーマを見つけ、出会い、体験し、工夫し、話し合いながらまなんでいくこの「柳中セミナー」は、実は様々な教科の学習もその中でできてしまうという、楽しい授業なのです。

●柳町中学校担当 油井桐子先生より
まず生徒たちには、「福祉＝自分の身近にあること」と気づいてもらい、体験を通して地域の課題に自ら気づき、自ら動ける人になってもらいたいと考えました。地域に出たことで、視野が広がり、発想を豊かにすることができました。

共生の街づくりNAGANO

福祉・ボランティアがテーマの「共生の街づくりNAGANO」はこんなふうに行われました。



＊ 地域とつながろう！

地域に暮らすさまざまな人とともに学ぶ

福祉教育実践ガイド 2011年度版より

あひるっこ(未就園児サークル)との交流



すぐに仲良くなれるよ。ほら、積み木だよ。

最初はドキドキ、でも小さい子はかわいいなあ〜。

おにいちゃんの背中は楽しいなあ〜。

うう……お、重い。

地域には小さい子もたくさん暮らしているよね。小さい子と一緒に遊んでいると優しい気持ちになるよ。お母さんたちも仲良しになるんだ。

高齢者、赤ちゃん、障がいのある人、外国から来た人など地域にはさまざまな人が暮らしています。綿内小学校3年礼組は、地域に暮らすさまざまな人と関わりながら、地域とともに子どもが育つ取り組みをしています。

結婚してロシアから長野に来たオレシャさんとの交流



オレシャさんようこそ！みんなで歓迎。

ロシアってどんな国？クイズやダンスをしたよ。その後もお母さんたちとオレシャさんはとても仲良しになって、何度も集まって楽しいことをしているよ。

ちょっぴり恥ずかしいな。ロシアってどんな国なんだろう？

事前にクラスの子どもの家でお母さんたちもオレシャさんと交流しました。すっかり仲良しに！

地域のお宝探し



カメラを持って、まちの人にインタビューして、お宝を探そう！みんなの知らなかったことやおもしろいところがいっぱい！地域の人はたくさんお話ししてくれたんだ。

●綿内小学校3年礼組担任 島田和政先生より
保護者・地域とともにまなぶ
綿内小学校に赴任したばかりの4月。ボランティア活動をとおして、子どもたちと保護者と一緒に、地域の方々との交流をしたいと思います。ボランティアセンターの協力を得て、高齢者施設、子育てサークル、外国から長野に来られた方との交流、地域探検など、子どもたちは地域に飛び出していきました。
子どもたちには、大人が計り知れない力があり、ふだんは出会えない人たちともいつの間にか仲良くなっていきます。遊びや交流の中から、体全体、心全開で地域をまなんでいきます。
そんな様子を見てみると、子どもたちにとって地域に出て行くことは、学校の中や授業だけでは得られない大切なまなびになっていることを実感します。
また、保護者の力も大切なポイントです。保護者の力を借りることで、学習は深まり、広がります。保護者自身も子どもたちのまなびを間近で感じることができ、地域を知り、多くの方と出会うことができます。

●長野市ボランティアセンターより
地域の人々のまなびとして
島田先生は、前任校でも子どもたちと地域に出てさまざまな人と関わりながら、小さな子どもや高齢者との交流、地域の課題を発見するまち歩きなどをしていました。やりたいことを思いつくと、すぐにボランティアセンターに連絡があります。「こんな人はいませんか？」「こんなことをやりたいんだけど、どんな風にしようか？」など。ボランティアセンターでは、先生が子どもたちに何をまなんで欲しいかを聞きながら、一緒に考えます。
3年生は「綿内の時間（総合的な学習の時間）」で「自分たちの地域を探検」します。平成22年度は、ボランティアセンターで進めている住民ディレクターの取り組みをその時間に合わせて実施しました。
子どもたちは大人よりずっと好奇心があり、大人にはないような視点を持っています。また、取材を受ける大人も、子どもたちが地域のことを知りたいと思う気持ちを受け止めて、たくさん話をしてくれます。
後日、出来上がった映像を見る会を開き、ふだん何気なく目にしていく地域にも、たくさんのお宝や人材があることを地域の方も子どもたちからまなぶことができたようです。

★ まちのお宝番組をつくろう！

子どもディレクターになって、番組をつくろう！

やまびこだより No.124 (2012年度)より



話を聞くのも真剣、カメラも真剣。



ビデオカメラを持って地域の人にインタビューして番組を作る「住民ディレクター」。前年は1つのクラスで取り組んだ子どもたちが、今年は学年全員で飛び出しました。カメラというツールを手に飛び出してみたら、たくさんの学びと出会いがありました。



長野市映像祭に出品しました。たくさんの人にまちのいいところをアピールしました。

●綿内小学校 4年礼組担任 島田和政先生より

地域ではさまざまな人が暮らし、長い時間その暮らしを紡いでいます。そのことを知り、たくさんの人と出会うことで、子どもたちは教科の学習では学べない地域の姿を学ぶことになります。それを支える教師と保護者、そして地域のみなさん。出会い、顔を覚えて関係が作られていきます。映像という媒体を使い、子どもたちの目を通して地域を見ることで、大人も同じ時間を共有します。そこから、クラス替えしたあとも保護者同士や地域と子どもたちのかかわりが深まっていく可能性が見えました。

地域のみなさん、大いに語る！

5年生にあがるときにクラス替えがあることを考えると、学年全部のお母さんたちが仲良くなってもらえたらいいなあ〜と考えた先生。そうだ！去年やった「住民ディレクター」(p.33)を学年でやろうと思立ち、さっそく「今年もやりたい！ぜひ、学年で」と社協に相談。学年全員？と不安もあったが、先生の気持ちを聞き、コーディネーターも協力することに。

クラスを超えて班を作り、そこに保護者やボランティアが2〜3人ついて地域へ取材に出かけました。取材先は保護者から募集、リンゴやレンコンの農家、寺をはじめ、学校がある若穂地区の歴史や文化、暮らしを語ってくれる人を訪ねる10のコースとなりました。

授業は社会科を中心に構成され、必ずしもボランティア・福祉学習の位置づけではありません。が、子どもたちが学んだことは、地域の「暮らし」「歴史」「文化」などさまざま。「暮らし」では廃線になる長野電鉄屋代線(平成24年3月31日廃線)の線路やりんご農家の苦勞、「歴史」では昔あった山火事や水害、地域に尽力した人の逸話など、「文化」では安来節や昔話の紙芝居。親や先生も知らなかったことを地域の人は教えてくれます。地域の人は、改めて子どもに語ることで自分や自分の地域を見つめなおします。

カメラのちから

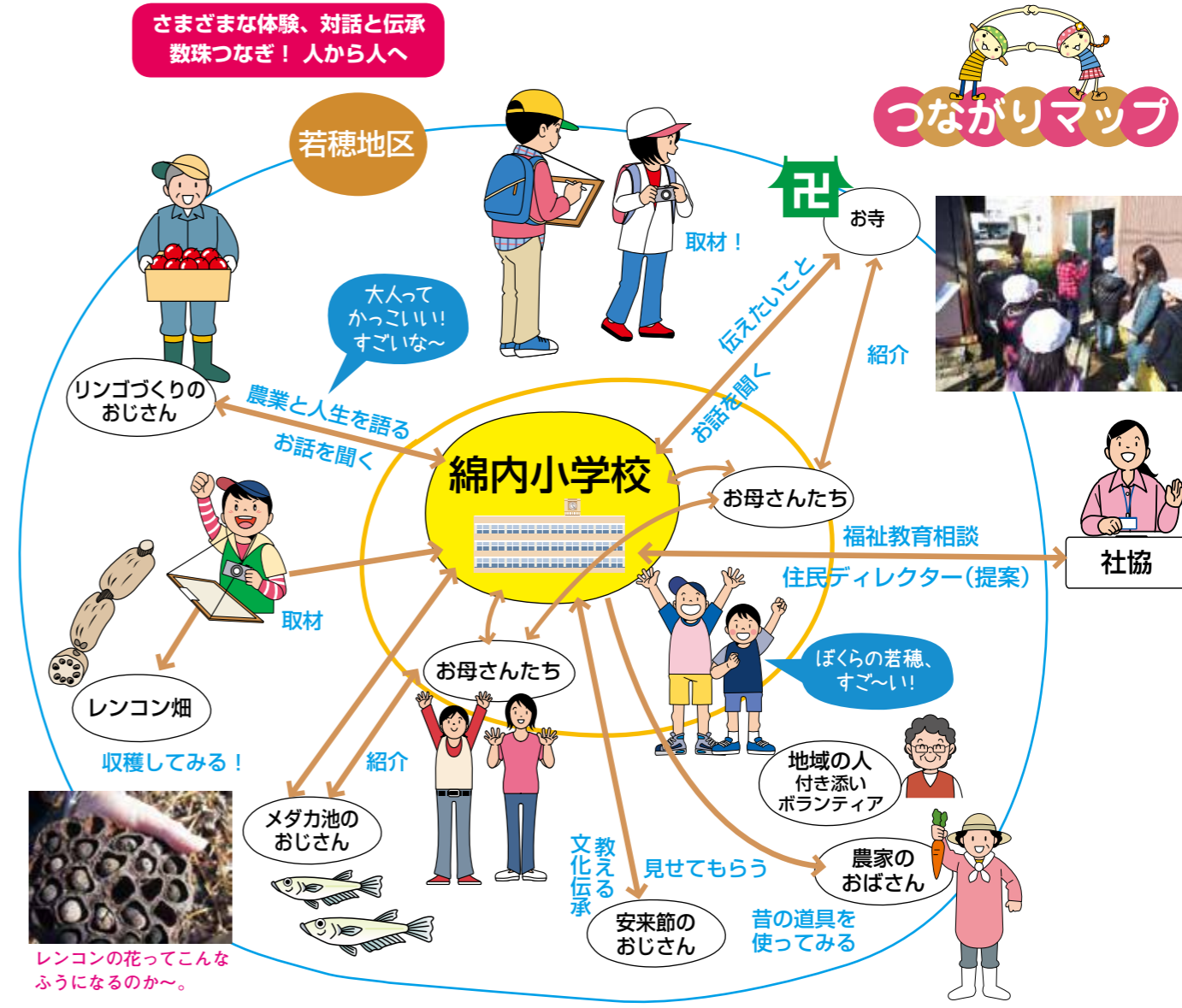
また、カメラを持って「取材」という行為を付加したことで、子どもたちはどう見せるのか、どう聞くのかなど考え、

話し合いながら、コミュニケーションをとり、能動的な姿勢をみせてくれます。

出来上がった動画は、参観日などで保護者にもみてもらい、学校がどんなことを目指し、どんな授業をしているのかを伝えることもでき、親も地域を知ることができました。さらに、2月には、市内の住民ディレクターが一堂に会する映像祭にも出演。子どもたちと地域の人々の出会いはさらに多くの人に伝わっていきました。

●長野市ボランティアセンターより

— ういった授業の展開は学校や社協だけでできないところにポイントがあります。保護者・地域内外の協力者がかかわることで学校が開かれ、その結果子どもたちを見守る大人が増えていきます。これは、地域にとっても福祉教育です。



レンコンの花ってこんなふうになるのか〜。

Let's Try

- 用意するもの
- まち歩き用
 - 地図 カメラ(動画付き)
 - 水筒 画板 ノート 筆記具
 - 笑顔 知りたい気持ち
 - あると便利
 - ビニール袋
 - 録音用レコーダー

●子どもディレクターの進め方

- 1 情報収集(下調べ)**
家族やご近所の方から地域の中で「こんなステキな所がある」「こんな面白い人がいる」といった情報を集めよう！
- 2 グループ(班・チーム)分け**
インタビュー(お話を聞く)係、カメラ係、メモ係など役割を決める
- 3 取材先の決定、準備**
・取材させていただく方に事前連絡
・どんなことを聞きたいか(知りたいこと)考えてメモしておく
- 4 お宝探しの取材に出発**
まちのいろいろな人にインタビュー！
- 5 みんなでお宝を見せ合おう！**
集めたお宝の映像や写真を見てみよう
- 6 みんなでお宝を分け合おう！**
番組や地図、新聞にして発信しよう
- 7 気づいたことを整理しよう**
まちのお宝を大切にするための方法や、もっとよくしたいことを考えて、できることを提案しよう。



打ち合わせは入念に。時間配分・役割分担……。

●綿内小学校 4年礼組 児童のお母さんより

学校へ行くのは、問題がある時とか注意される時、というマイナスイメージがあったのですが、子どもが幸せに思うことを一緒にやりませんかと誘っていただけで、学校に対する気持ちが変わりました。声をかけて頂いたことで、親も、地域の人も一歩踏み出すことができました。

「住民ディレクター」の活動の目的は、立派な番組を作ることではありません。カメラを通して見たもの、感じたことを伝える、提言する、ということに意味があるのです。

花いっぱいの元気な町に 学校同士で協力！ しもすわガーデンプロジェクト

下諏訪町内の小中高特別支援学校6校

やまびこだより No.133 (2014年度)より



プロジェクト始動

花が咲くのが
楽しみだね。



しもすわ未来議会で提案



町の方に育てた苗を配布

きれいに
咲いて
よかったあ！

みなさんに
喜んでもらえる
と嬉しいです！

下諏訪町では、子どもが主役となって地域や社会について考える「しもすわ未来議会」が行われています。ここでは町内の中高生が議員となり、町をより活性化させていくための計画を町長に提言しています。

2012年度には、「町を訪れる方々を『おもてなしの心』をもって迎えたい」と考えた中学生議員から「町中を花でいっぱいできないか」という提言があり

ました。

そこで、翌年度、町を挙げての「花いっぱい活動」として「しもすわガーデンプロジェクト」が始動しました。町内の小中高特別支援学校6校みんなで協力して、町のあちこちを各学校で育てた花で飾りました。

今年から、「さらに町を花いっぱいしよう」と、学校で育てた苗を町民の方に配布したところ、多くの方が笑顔で花を持ち帰ってくださりました。

現在は、町歩きイベント「三角八丁」を盛り上げるため、そこで飾る花を育てています。下諏訪中学校では、昨年と同じく諏訪大社下社秋宮前の「大社通り」に飾る予定です。地域の方や観光客の方が明るい気持ちになってくれたらと思い、大切に育てています。

今後もこのように地域や他の学校とつながりをもって活動の場を広げていけたらと思います。

中学生がイベントスタッフに 施設の納涼祭で活躍

大町市立 仁科台中学校

やまびこだより No.131 (2013年度)より



テントの設置

地域の方が
たくさん来て
くれるといいな!!



イベントの打ち合わせ

地域の皆さんにも
観ていただき
たいです。



利用者さんと一緒に

ありがとうね。



七夕の飾り付け

仁科台中学校生徒会では、役員と会員有志が、20年以上にわたって8月に行われている福祉施設(鹿島荘)の納涼祭にボランティアとして参加しています。

前日の会場作りでは、夏の日差しが照りつける中、テントの設置や七夕飾りをしました。当日の運営では、利用者の方とカラオケやゲームをして楽しみました。

利用者の方から「ありがとうね」とか、職員の方から「若い力のおかげでとても助

かりました」といった感謝の言葉をいただいたことを通して、「私たちも地域を支える一員になれたな」と実感することができました。

参加した有志の一人は「前からボランティア活動に関心があったので参加しました」と志願理由を言っていました。

地域の方々に感謝の気持ちを行動で表し、信頼してもらえる活動を今後も継続し

ていきたいと思っています。そして、地域のために中学生ができることを生徒会活動の一つの柱として継続していきたいと思っています。

地域に元気を！ 伝統芸能を引き継ぐ一員として

上松町立 上松中学校

やまびこだより No.123 (2012年度)より

上松中学校には、1990年に始まった郷土芸能部があります。2012年度は、3年生を中心に希望者を募り、夏休みから週1~2回の割合で活動しています。

郷土芸能の内容は、お祭りの前夜祭などに行う「獅子舞」や歌舞伎の「白浪五人男」などです。町に古くから伝わる芸能で、「上若連」という神社のお祭り組織の方々が中心となって行っています。練習には上若連の方々が来てくださり、獅子の動きや太鼓・笛のリズムなどを丁寧に指導していただきます。



二人で舞う

部員の中には、卒業後、上若連に入って活躍している人も多く、指導者も皆上松中学校の先輩です。

秋の文化祭と町の芸能祭が発表の場です。上若連の方に和服の衣装を着せてい

ただき、腕には白粉も塗っていただいたので本格的な発表になりました。「これからも郷土芸能に関わっていきたい」と語る生徒の多くは、いつか地域が誇る伝統芸能の担い手として活躍し、ふるさとをもっと元気づけたいと願っています。



上若連の方から指導をうける

地域の伝統芸能を受け継いで 長い歴史と伝統に支えられた古田人形芝居

箕輪町立 箕輪西小学校

やまびこだより No.124 (2012年度)より



定期公演

箕輪西小学校には、平成4年に始まった古田人形クラブがあります。今年度は4~6年生の22名が参加し、課外活動クラブとして21年目を迎えました。古田人形芝居保存会の先生方にご指導いた

だき、11月の校内発表会・12月の定期公演に向けて、練習をしています。

演目は、女の子が生き別れの両親を訪ねる話「傾城阿波鳴門・順礼歌の段」で、語り役や人形役・口上など多くの役割で構成されています。一つの人形を3人の遣い手で操作するのですが、人間の動きに少しでも近づけられるように細かい工夫が必要です。

また、全員が心を一つにして、集中して演じないといい発表にはなりません。これからもみんなでき

り練習して、見る人の心に残る発表になるようがんばりたいです。

300年近い歴史の中で何度も消えかけたことがあったそうですが、卒業した先輩の中には、箕輪中学校古田人形部や保存会に入り、この大切な文化を守ろうとがんばっている方もいます。私たちも、長い歴史と伝統に支えられ、地域や先輩の方々の努力で続いてきた古田人形芝居を大切にしていきたいです。そして、次の世代へと伝えていけたらいいなと思っています。



人形役練習

南木曾町のお宝発見！ 魅力ある「触れ合い」「体験」を通して

南木曾町立 南木曾小学校

やまびこだより No.126 (2013年度)より

南木曾小学校では、田立小、蘭小、読書小の三つの小学校が統合して6年目を迎えました。統合をきっかけに、遠足では6年間のうちにすべての地域を訪れています。

また、生活科や総合的な学習の時間では、「南木曾と木」「南木曾と水」「南木曾と道(中山道)」といったように、南木曾町の豊かな自然や文化・歴史を題材にして、学年ごとにテーマを決めて地域と関わりながら魅力ある学習をしています。



田立地区でのお茶摘み

このように、たくさんの地域の方々との「触れ合い」「体験」を通して、南木曾の誇れる宝を発見しています。



読書地区での林業体験

妻籠宿は
いいところ
ですよ

パンフレット配り

＊ 休日ボランティアで村内をきれいに！ 地域と連携して、『天竜川ゴミ拾い』

泰阜村立 泰阜中学校

やまびこだより No.127 (2011年度)より

泰阜中学校では、2004年度から生徒会主催で行っている土日のボランティア活動の一環として、ゴミ拾い活動を行っています。平成22年11月からは、村内に拠点を持つ『NPO 法人グリーンウ



天竜川の河川清掃

ッド』の方々にご協力いただき、不定期ですが天竜川の河川清掃も始めました。それまで行っていた道路沿いのゴミ拾い活動では、タバコの吸殻や包装用ビニールなど細かいゴミが多かったのですが、河川清掃では、種類や大きさの違うゴミがたくさんありました。不法投棄されたと思われるゴミも多く、「誰がこんなところに捨てたのだろう」という疑問の声もあがりました。

ゴミ拾いはよい活動ですが、拾ったゴミを処分するにはお金がかかります。その費用を村に負担していただい

ることを考えると、このような活動をする必要のない美しい村であることが一番良いことだと思います。

村にゴミがなくなるまで、これからも休日ボランティア活動を継続していきたいと考えています。



3時間で、タイヤ20本、原付バイク1台が回収されました！

＊ 学友林はわたしたちの教室 ササユリの保護活動を通して

飯田市立 川路小学校

やまびこだより No.128 (2013年度)より

川路小学校は、長野県の南部、飯田市の中でも南に位置し、名勝天龍峡がある地区にあります。全校児童が102名と小さな学校ですが、全員の顔と名前が分かり合えるとても温かい雰囲気の学校です。

学校から歩いて5分のところに学友林があり、そこで生活科の春探しや図工の材料集めなど様々な活動をしています。特にここ数年はササユリの保護活動に力を入れていて、高学年が地域の方に教えていただき



◀ササユリは、笹のように細長い葉っぱが特徴的な植物です。

ながら、日当たりをよくするための間伐や、生えている場所が踏み荒らされないようにマーキング（目印を付ける作業）を行っています。

学友林では、ただ保護するだけではなく、山となかよしになるために、間伐した木材を使って飯ごう炊きをしします。また、山菜採りや昆虫採集など、遊び場としても利用しています。そこに行かないと分からない、教科書には載っていない貴重な体

験ができる学友林を、これからも地域のみなさんと一緒に守り、受け継いでいきたいと思っています。



花が咲く6月初めに、小さな株にもしっかりマーキング。

のこぎりを使って間伐作業

＊ 地域に貢献!! エコ・クリ プロジェクト エコへの意識を高めよう

飯山市立 城北中学校

やまびこだより No.129 (2013年度)より

城北中学校は、開校4年目の学校です。新しい学校の新たな活動として、昨年度、生徒会執行部では“地域に貢献する活動を!”“全校生徒のエコへの意識を高める活動を!”という思いを込めて「エコ・クリ

プロジェクト(エコロジー・クリーンプロジェクト)」を企画・運営しました。

自然豊かな校区で、地域に貢献できる活動はなんだろう?—生徒会執行部で考えた結果、学校周辺のごみ拾い・落ち葉集めをすることにしました。また、「エ



ごみ拾い・落ち葉集め

11月の半ば、日頃お世話になっている地域への感謝の気持ちを込めて、ごみ拾い・落ち葉集めを行いました。学校周辺、通学路、普段利用している駅周辺を各クラスで分担して行いました。

活動の後、次のような感想が聞かれまし

た。「エコ・クリをやって、地域がきれいになったので良かった」「ほかにも地域のためにできる事があつたら積極的に活動できたら良いなあと思いました」。

「エコ・クリ プロジェクト」を今後も続け、城北中の伝統として、地域と城北中とをつなぐ活動になるようにしていきたいです。



腐葉土づくり

＊ 唱歌「ふるさと」の発祥地をきれいに 38年続く斑尾川清掃

中野市立 豊田中学校

やまびこだより No.133 (2014年度)より

豊田地区は唱歌「ふるさと」を作詞した高野辰之博士の生誕地です。「ふるさと」には、豊田の地の情景が歌われています。この「ふるさと」の地をきれいに保つために、豊田中学校では様々な活動を行っています。



斑尾川清掃

その一つが38年続く「斑尾川清掃」です。曲の中に「小鮎釣りし かの川」とありますが、それはこの豊田地区を流れる川のことです。上流では斑尾川、下流では斑尾川と名前を変えます。「水は清き ふるさと」と歌われるように、斑尾

川を美しい清流のまま残しておこうと38年前に生徒会「ふるさと」の豊田の地を守るよう、これからも清掃活動を続けていきたいと思っています。

川の中だけではなく、川沿いのゴミ拾いも行っています。持参したゴミ袋は、ペットボトルやビニールゴミでいっぱいになります。

昨年度は、豊田中学校の1年生と永田小学校の1、2年生とで高野辰之記念館の清掃を行いました。最後に「ふるさと」を

一緒に合唱し、交流会をしました。自分たちの力でいつまでもきれいな「ふるさと」の豊田の地を守るよう、これからも清掃活動を続けていきたいと思っています。



みんなで「ふるさと」を合唱

小学生たちと記念館を清掃

＊ 仁慈～情けは人の為ならず～ 地域のボランティア体験を通して

喬木村立 喬木中学校

やまびこだより No.135 (2014年度)より

喬木中学校は、「仁慈～情けは人の為ならず～」という学友会(生徒会)テーマのもと、各委員会が様々な活動を行っています。

福祉リサイクル委員会では、毎年、喬木村社会福祉協議会と喬木悠生寮(障がいがある方の施設)の主催による「サマーチャレンジボランティア」に参加しています。今年も、小学生との交流、障がい者スポーツ体験、飯田人形劇フェスタのスタッフ、村のボランティアセンターを考えるワークショップなどの活動をしました。

10月には村の文化祭で開催された「ボラ



障がい者スポーツ体験

ボランティア横丁での活動

ボランティア横丁での活動

ンティア横丁」に、ボランティアグループの方々のお手伝いとして有志40名が参加しました。地域の方々には、「中学生の元気でその場が明るくなる」「これからも期待しているよ」という、嬉しい声をかけていただき

ました。はじめは「委員だから」「友だちが行くから」という何気ないきっかけで参加しましたが、終えてみると、「自分がしたことで誰かが喜んでくれるのは嬉しい」と思いました。地域の方々に関わることを通して、「情けは人の為ならず」ということを実感しました。

＊ 地域に学ぶ「くぬぎの時間」 地域の先輩方とのふれあいを通して

須坂市立 須坂小学校

やまびこだより No.126 (2013年度)より

平安時代の須坂は「櫛原荘」と呼ばれていたことから、須坂小学校の校章にはくぬぎの葉が3枚使われ、総合的な学習の時間は「くぬぎの時間」と呼ばれています。3～6年生が交流する縦割り活動では、地域の方を講師に招き、5つの講座が開かれています。

「福祉体験講座」では、社会福祉協議会の方々を講師にいただきました。学校の近くにある施設のお年寄りや交流したり、お年寄りのことを知るために「高齢者疑似体験」や「車いす体験」をしました。

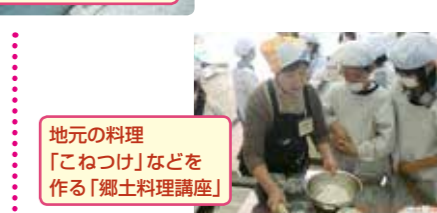
このほかに竹とんぼや水鉄砲を作って遊ぶ「昔の遊びに挑戦講座」、地元の料理「こねつけ」などを作る「郷土料理講座」、昆虫や植物、岩石を調べる「鎌田山講座」、お雑子を教える「ただく「神楽・笠鉦講座」があります。

地域の先輩である講師の方々からは、「子どもに教えるのはとても楽しい」「目を輝かせて話を聞き、真剣にやっている姿を見ることは元気の源だ」とお聞きし



250年前から続く笠鉦行列に参加

ました。地域の方々との関わりを通して地域の良さに気づき、須坂の伝統を受け継いでいくことの大切さを教えていただいています。



地元の料理「こねつけ」などを作る「郷土料理講座」

* つなごう！ 私たちの「憲法」

「いじめのない学校」、幸せな学校生活を目指して

やまびこだより No.133 (2014年度)より



こぼらが おか 小原ヶ丘憲法 高森中学校生徒会 平成20年度制定

前文
この憲法は、皆さんの悲しみの涙を喜びの涙に変えるために、また、高森中学校に笑顔が広がるために制定されたものである。
この憲法を守り、一人で苦しんでいる人、悩みを抱えている人が登校すれば癒される学校を作らねばならない。

序文
この憲法に反した場合は、相手に謝り握手を交わそう。

第一条
高森中生ならば、この憲法を守らなければならない。

第二条
「うざい」「キモい」「死ぬ」などの悪口は言うてはならない。

第三条
無視は無言の暴力。

第四条
いかなる暴力も振るってはならない。見ているあなたも加害者である。いじめられている人に手をさしのべよう。



高森中学校「小原ヶ丘憲法」の条文と2014年度生徒会の皆さん

高森町立高森中学校には「小原ヶ丘憲法」という、全校で大切にしている約束があります。これは6年前に、当時の生徒会役員が中心になって制定したもので、「いじめを防止し、なくす」ことをめざしています。中学生にとって、とても身近な問題である「いじめ」をなくそうと真剣に考え、その思いを大切に守っていこうという精神が、「憲法」には生きています。

「憲法」に込めた願い

「小原ヶ丘憲法」を作った当時、高森中学校では目立った深刻ないじめは起きていませんでした。けれども、いじめを苦にして命を絶つ中学生のニュースが時折流れ、他人事ではないのではないかという思いもありました。こんな悲しいことが起きないように、自分たちがいじめに加わることがないように…そのために作られたのが「小原ヶ丘憲法」です。

当時は生徒たちの間にも「いじめられる方にも問題がある」という声があったそうです。また、自分では積極的に手を出さないけれど、実際に起きているいじめにさえ気づかないだけかもしれない。それでいいのでしょうか。表に出ていないけれど問題の根は深いかもしれないという思いから、本気

でいじめをなくすために、一番大切なことは何かを盛り込んだ条文を作りました。

「憲法」を大切に守る

高森中学校では、この「小原ヶ丘憲法」を今でも大切に守っています。全校生徒が毎日通る大階段や教室に条文が掲げてあります。ただの標語として終わらせるのではなく、いつも意識してられるように、人権集会で条文を学びます。毎年行われる「憲法の学び」によって、小原ヶ丘憲法の精神は高森中学校の生徒たちに代々引き継がれていきました。

昨年度から、生徒会には「いじめ対策委員会」がおかれ、いじめに関する調査を定期的に行い、全校でいじめについて考える時間を持っています。「憲法」はいじめを糾弾するのではなく、常に

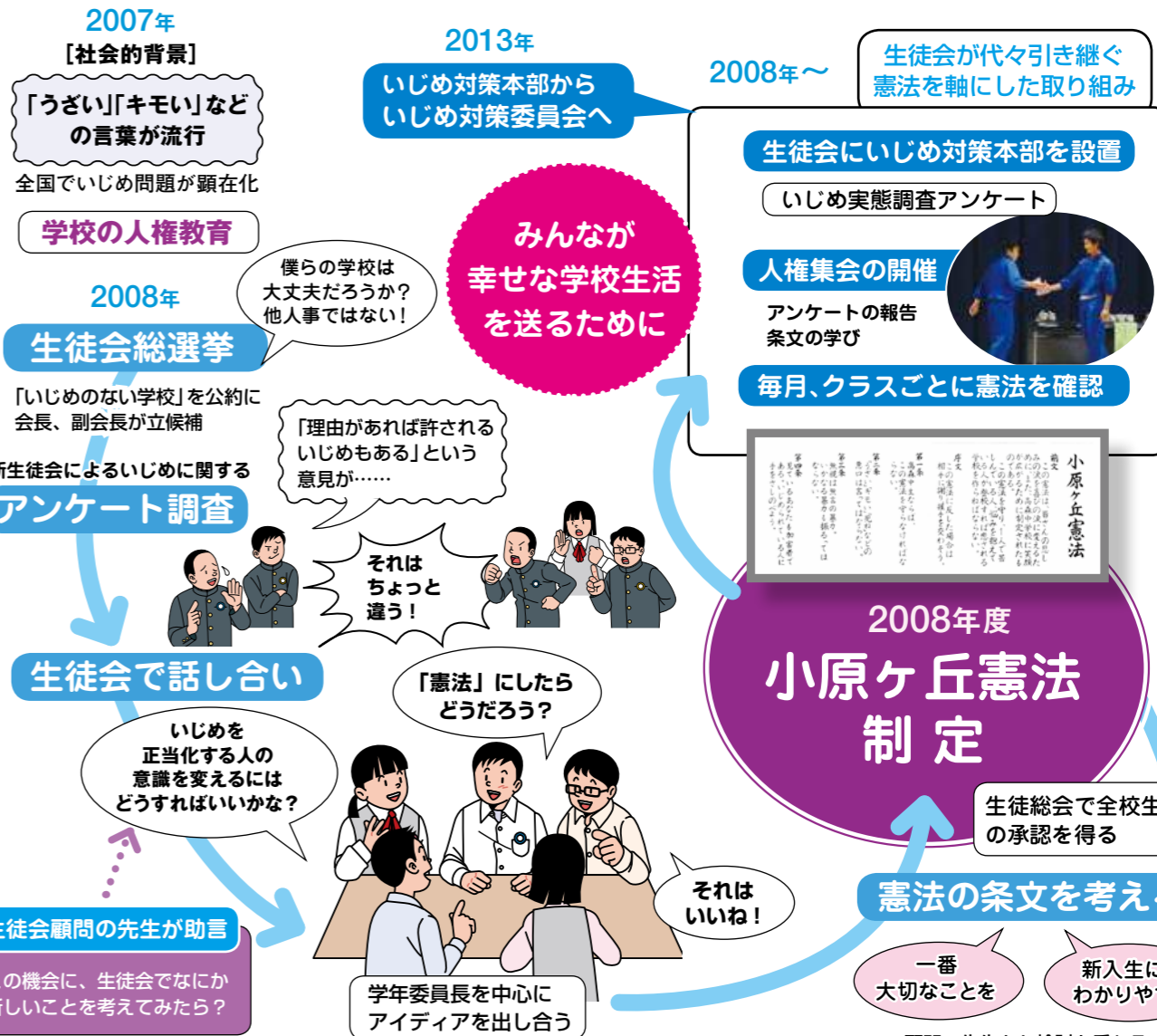
自分の振る舞いを振り返る基準、心のよりどころとなっているということです。

「憲法」が町の条例に

「憲法」を大切に守っていく取り組みは、町の大人たちを動かしました。中学生が制定した「小原ヶ丘憲法」の精神を町全体で共有し、いじめのない町にしようと、2013年「高森町いじめ防止条例」が制定されました。

生徒会いじめ対策委員会の取り組みは、先生方や教育委員会とも共有されています。それにより、いじめを防ごうという意識が中学校だけでなく町内全体で高まっています。

「小原ヶ丘憲法」の掲げた願いは、こうしてつながれているのです。



高森中学校 いじめ対策委員会によるアンケートより (2014年7月2日実施)

アンケートは年に数回行い、いじめの有無やいじめのない明るい学校にするためにはどうすればいいかなど調査をしています。アンケートの結果は、人権集会で全校の皆さんに報告しています。

「いじめについてのアンケート」

いじめのない学校を目指すために

次の質問にあてはまる番号に○を付けてください。

問1. 5月のアンケートでいじめを受けていると答えた人が2%いました。5月のアンケートでいじめが「ある」と答えた人に質問です。そのいじめは、今も続いていますか？

1. 続いている 2. 続いていない

問2. あなたは、5月のアンケート以降に新たないじめをみたことがありますか？ (加害・被害をふくむ)

1. ある 2. ない

問3. 問1・問2で続いている・あると答えた人に質問です。そのいじめは、どういった内容ですか？

1. ひやかされる、からかわれる 5. 悪口などをいわれる
2. 無視・仲間はずれ 6. 持ち物を隠される、壊される
3. 暴力をふるわれる 7. 悪口等をネットに書き込まれる
4. 金品をたかられる 8. いやなこと、恥ずかしいこと、危険なことをさせられる

問4. いじめであるとは思っていないが、しつこいいたづらなどで、不快に思うことはありますか？

1. ある 2. ない

問5. いじめ対策委員会に要望があれば自由に書いてください。ご協力ありがとうございました。アンケートの内容は、今後の活動及び対策に役立てていきます。

高森町子どもいじめ防止条例

町が条例を制定 2013年度

「小原ヶ丘憲法」の精神は地域の人にも

2011年 [社会的背景] 滋賀県大津市の中学生がいじめを苦に自殺
教育現場の対応が課題に

● 「小原ヶ丘憲法」制定当時の生徒会役員 熊谷翔さんより

いじめは、自分たちの問題。だから自分たちで考えて解決していかなくてはなりません。自分たちだけではできないことも、発信すれば大きな動きになります。大人の協力を得ながら、社会を変えていくことは可能だと思います。

3 社会を変える

3 社会を変える



シカの食害問題から学ぶ

ふるさとの自然のこと

福祉教育実践ガイド 2013年度版より



ニッコウキスゲのお花畑をよみがえらせよう(霧ヶ峰高原で)



シカを取り巻く環境を知って、いろいろな意見が次々と……

豊かなふるさとの自然について、環境問題について、低学年の子どもたちと考えてみたい…。先生の願いからはじまった「シカの授業」。シカの食害を切り口にしたのは、先生自身のテーマでもあったから。子どもたちは柔軟な発想と体験を通して、この難しい課題に楽しく取り組んでいます。

新聞記事やニュース映像でシカの食害の実態を知る

2011年度に開校したばかりの長野日本大学学園長野小学校では、第1期生が1年生の時から、シカの食害を切り口に環境問題を学んでいます。

市街地の学校で、なぜ「シカの食害」を？担当の清水先生は、以前は放送局の記者としてシカの問題を追いかけていました。自然環境をめぐるいろいろな課題が、シカから見てくることを実感しました。その広がりや、子どもたちとともに味わいたいという思いで、この授業を始めました。

授業では、子ども用に書き直した新聞記事や、ニュース映像などを通して、市街地では直接見えない食害の様子に触れます。

シカに食べ尽くされてしまった森の様子、そのために起きた土砂崩れや、その土砂に埋まってしまった水源地を見て、子どもたちは驚きました。「シカも悪くないけど、森がかわいそう…」「森が、シカに殺されちゃうよ」「山とぼくらが住ん

でいるところは全然違うけど、シカが木を食べてしまうというんな危険なことが、ぼくらの周りでも起きちゃうかもしれないんだ!」。

「なぜこんなにシカが増えたの?」天敵のニホンオオカミがいなくなってしまったこと、ハンターが高齢化していること、森に手が入らなくなったこと、環境破壊など、人間の暮らしが変わってきたことが、その背景にあると知りました。人間にも責任がある、ということが、子どもたちには衝撃です。

解決のためにできることは? 自由な発想が気づきを深める

シカの駆除という難しい問題についても話し合いました。本物の罾にも触れました。「人間のせいなのに、かわいそう」「せめて子ジカは撃たないであげて」「落とし穴で捕まえて、動物園に連れて行こうよ」など、様々な意見が出てきます。話し合いはいつも白熱します。

シカの数を増やさないと、シカに荒らされた森を復活させることの両方が必

要なんだ、と気づいた子どもたち。話し合いの中で、シカに食い荒らされた霧ヶ峰高原(諏訪市)のニッコウキスゲのお花畑をよみがえらせたい、という意見が出てきました。地元の小和田牧野農業協同組合の皆さんに種を分けてもらい、学校で育てて、みんなで霧ヶ峰に植えました。地元の皆さんと一緒に勉強会もしました。

長野県の自然の豊かさ、様々な生きものの存在、自然と人の暮らしとのつながりなど、低学年の子どもたちはたくさんを学びました。

どんなに複雑な課題でも、解決のためにできることは必ずある。まずできることから始めるということも、この授業を通して先生が子どもたちに学んでほしいことでした。シカの食害は、中山間地の過疎・高齢化や、森林の荒廃、土砂災害や水資源の問題、地球温暖化とも深くつながっています。シカをきっかけに気づいた環境問題へのまなざしをさらに深め、学び続けていきたいと、先生は考えています。



シカも森も人間も仲良く生きられるように!

学校で種から育てた苗を、みんなで霧ヶ峰高原に植えました。

ニッコウキスゲの苗を植えよう!

シカの食害が深刻化している霧ヶ峰高原へ

ニッコウキスゲのお花畑をよみがえらせたい

ニッコウキスゲの種をもらって学校で苗を育てました。

シカに荒らされた森を復活させよう

小和田牧野農業協同組合の皆さんと

被害を減らそうと取り組む人たちを紹介。

銃以外で捕獲する方法は?

すごい!こんなわながあるんだ!

くくりわな



シカをこれ以上、増やさないために

シカから自然を守るためには?

嫌いな物を置く
電気柵を設置する
駆除する

シカは悪くない、かわいそう

どうしてシカによる被害が増えたんだろう?

猟友会員の減少(高齢化)

中山間地の過疎化

地球温暖化?

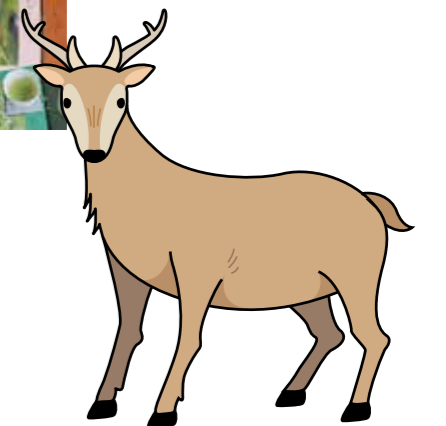
ニュース番組

新聞

生活科の時間に、シカによる農林業被害について、新聞記事やテレビの特集番組を教材に授業を開始。

●長野小学校担任 清水きく江先生より

シカの授業は、本当は高学年で取り組む予定でした。しかし、一度やってみると、1年生でも環境問題や山間地が抱える問題に対して真剣に向き合い、熱心に話し合っていて、その姿には正直驚きました。子どもなりの柔軟なアイデアから、課題解決に向けた対策が生まれるかもしれません。未来を担う子どもたちが、故郷=信州の自然をどう守っていったらよいか、シカの食害をきっかけに自ら考え、実践していけるまでに成長してくれたらと願っています。





STOP! 奈川の人口減!!

私たちの地域 いま・未来

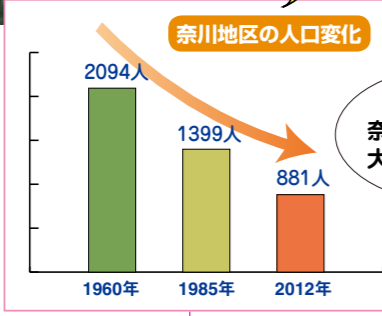
やまびこだより No.131 (2013年度)より

どうしてこんなに人が減ったのだろう?



ショック!
このままでは
ムラが消える!?

社会科の授業で
日本と世界の人口を
学ぶうち、自分たちの
地域の人口変化を
知ってびっくり!



生まれ育った
奈川を誇りに思い、
大切にしてほしい。



心に残ったお年寄りの言葉

一人でも多く
奈川を
守っておくれ。

地域の方々への 聞き取り調査をしました

奈川を離れた人の話 まちへ出た理由

- 生活が不便
- 仕事がない
- 高校がない

- 欲しいものが
すぐ手に
入らない。
- お店が
少ない。
- 生活費が
稼げない。
- 家族と一緒に
暮らせない。

住み続けている人の話 奈川を離れないのはなぜ?

- 先祖代々の
土地を守って
いくから。
- 奈川は
いいところ
だから。
- 移転する
お金がない。
- 引っ越しが
面倒だ。
- 生まれ育った
ここが
好きだから。

地域社会の一員として 奈川の将来像を考える

コンビニもない。お店には欲しいものがない。学校の生徒も少なく、高齢の人がとても多い。街までは、カーブの多い道を車で1時間かけて下りていかななくてはならない…。松本市奈川地区はそんな地域です。子どもたちは、中学校を卒業したら高校に通うために地域を出て暮らすことがほぼ確実です。

「何もないから、奈川は好きじゃない」そう思っている生徒たちに、故郷への誇りをもってほしい。2学年担任で社会科を教えている若林史也先生は、世界と日本の人口についての授業に、そんな思いをこめました。人口という切り口で日本全体、世界と比較すると、奈川がどんな地域なのかを感じられるのではないかと。そこから地域を見る視点を育てられないか。そんな願いで「STOP! 奈川の人口減!!」の授業が始まりました。

奈川の人口構成はどう動いてきて、

この先はどんなふうになっていくのか、自分たちで予測データを作りながら考えます。出ていく人、残っている人のそれぞれに、数字だけではわからない地域と未来への思いを聞く訪問調査を行いました。

コンビニがなくても いいなんて!?

訪問調査では、中学生は温かく迎えられるました。「この奈川に帰ってきてくれよ」と言ってくださった人もいます。都会の人を呼び込もうと取り組んでいる人も、伝統の祭りを絶やさないように頑張っている人もいました。また、中学生にとっては大問題の「コンビニがない」ということも、村の人には大きな問題でないこと、むしろ支えあって暮らしている関係こそが大きな財産だという話も聞かせてくれました。一人ひとりが、地域に対して様々な思いを持っていることを知りました。

豊かな自然と伝統があり、支え合う優

しい人々がいる地域。そんな地域の良いところを失いたくない…そのために、地域の人々を支えなくては行けないし、支えてくれる人がもっとほしいと痛感しました。

答えは出ない… でも考えた経験は生きる

人口減少、過疎化は経済・産業構造や行政の仕組みなどの様々な要因が関係する、難しい問題です。すぐに答えが出せるものではありません。けれども、彼らが将来自分の生き方を形にしていくなぎ、ふるさとの存続を真剣に考えた学びが生かされることを先生方は願っています。

そして、「みんなの帰りを奈川で待っているよ」「みんなが地域の宝物なんだ」という地域の方々のメッセージ、思いは生徒たちに伝わったのではないのでしょうか。

本当の気持ちは…

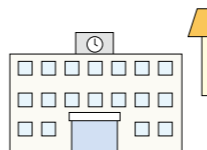
松本市奈川地区(旧奈川村)は、2005年の市町村合併で松本市となった山間地区です。奈川中学校の生徒は、中学校を卒業すると、家を出て、下宿や寮、または街中に暮らす親戚の家に住むということになります。奈川の家からは高校に通えないからです。先生方は、卒業後家を離れる子どもたちのために、「自立して生活できるように」ということを大切に考えています。「STOP! 奈川の人口減!!」は、中学2年生の8人の生徒たちが取り組んだ社会科の授業です。

奈川の人口減の問題 やっぱり……



人が少なくなって
このまま奈川の地域を
なくしたくないな。

課題に気づく



だけど今は、

高校生になれば
奈川を離れて、
そのまま
まちに住みたい……。
でも、奈川はなくなって
ほしくないし……。

対立する現実の中でより良い道を探す

答えの出ない難問に、もう一つの視点を!

聞き取り調査で出会った、実際に奈川を愛して暮らし続ける人の言葉は、生徒たちには大きな衝撃だったそうです。自分たちの「不便」は、見方を変えればまったく問題にならないという答えは、物事には様々な見方があり、地域にはいろいろな思いがあるということのあらわれでした。

過疎・高齢化に限らず地域の問題は、簡単に解決できるものではありません。そこには様々な人の思いや、矛盾する現実があります。対立するものの見方や考え方も一つひとつ丁寧に検証し、関係する人の声を聴き、真剣に考えることが必要です。この授業の実践の中で、若林先生は繰り返し「もう一つの考え方」を生徒たちに投げかけていました。確かにここは不便だけど、それは本当だろうか? 実際に見てみよう。確かに店はないけれど、それは暮らせ

ない理由になるだろうか? 実際に話を聞いてみよう。人口減少は深刻な問題だけれど、じゃあ君たちはどうする?

この授業で地域の未来を考えながら、彼らは地域の葛藤に向き合うプロセスを体験しました。答えを出すのは一人ひとり。時間をかけて考える必要のある課題が、彼らに残されています。



いつかその課題と
向き合ったときに、
考える材料の
一つにしてほしい……。
(奈川中学校2学年担任
若林史也先生より)



様々な意見を受け止める

地域の人たちの話を聞いて 気づいたこと

美しい自然、伝統文化、
人とのつながり……
奈川の良さを再発見!

お年寄りの
ふるさと奈川に対する
誇り、愛情、
僕ら若者への期待……



都会の人が
羨ましがらうような
奈川ならではの
良いところもあるし、
不便でも暮らせない
わけじゃないんだな。

奈川の人口減をSTOPさせるために… 理想は

若者を増やして、
お年寄りを支えていく
地域にするべきだ!



葛藤…

★ 電車廃線から地域を考えた

ありがとう屋代線活動実行委員会の活動

やまびこだより No.125 (2012年度)より



松代中の生徒たちの通学にも数多く利用された屋代線。



文化祭での発表



「ありがとう屋代線新聞」

●松代中学校教頭 宮下昌史先生より
 今でも学校のホームページを見た人が、「ありがとう屋代線新聞」のバックナンバーを求めて学校に来られます。松代駅は代替バスの待合になるので、清掃活動などは受け継がれて続くといいなと期待しています。



ありがとう屋代線活動実行委員会17人のメンバー

屋代線に感謝の思いを伝えたい

2011月。長野電鉄屋代線の廃線が発表されたことで、松代地区の大人は反対運動を始めていました。それを聞いて鉄道が大好きな青木卓也くんは、存続を目的に松代中学校として何かできないかと先生に相談しました。しかし、学校という公共の場で、一企業を支援する方向での活動は難しいというのが先生方の見解でした。

でも、青木くんの思いを受け止めた先生方は、まずは感謝の気持を表すことが大切、ゆっくりやっっていこうと提案。



MAP

有志を募り、集まった17人の生徒で実行委員会を立ち上げることになりました。

生徒会の予算をもらうことができ、松代駅の清掃活動と、「ありがとう屋代線新聞」の発行活動が始まりました。

新聞の編集や取材、すべて生徒主体で活動を展開、担当の先生は見守るだけ、新聞の内容にも口出しはしませんでした。

地域の未来まで考えた

新聞作り、清掃を通して地域の人たちと出会い、語り、教えてもらうことがたくさんありました。松代というまちに育てられた生徒たちはまちを愛する心を持ち、廃線問題だけでなく、地域の未来を考える視野をもつこととなりました。

最後の新聞では廃線の原因をメンバーで考える「屋代線サミット」を開き記事にしています。そこで語られたのは

大人顔負けの議論。「過疎化」「地域衰退」といった言葉が出され、その解決策まで提案されています。

中には、「大学で都会に行っても松代に帰ってきて地元で働いて大事」「僕たちはたくさんの地域の人に支えられてきた」という言葉も……。

自分たちより下の年代(小学生)にも屋代線のことを覚えてほしいとキッズ新聞も発行。ふりがなをつけたり、キャラクターを自分たちでつくるなど工夫をこらしました。まさにユニバーサルデザインです。

僕たちのまちを走る電車が、廃線になってしまう。ふるさとの駅が、時刻表から消えてしまう…鉄道好きの生徒の思いが、まちの歴史と今抱えている課題、地域と自分たちの未来を考える活動につながっていきました。



つながりマップ



キーワードは「テツ」(好きなこと)と地域への思い!

●ありがとう屋代線活動実行委員会 委員長 青木卓也くんより

活動を通して多くの地域の人と出会い、あたりまえのことが実はあたりまえではないことに気づきました。これからも自分なりの活動を続けたい。廃線を無駄にしないことが大切。特にLRT(跡地での運行が計画されている新型路面電車)の計画がどうなるのかはとても気になります。

●青木卓也くんのお母さんより

この活動を始めてから、住民自治協議会の人ともたくさん関わってきて、「お茶していけやー」などと声をかけてもらうこともあります。大きくなって松代の役に立つ人に育ててもらえたらいいなと思います。

*「ありがとう屋代線新聞」は松代中学校のホームページで読むことができます。→ <http://www.nagano-ngn.ed.jp/matsujh/>

未来をつくる中学生議会 故郷を担う私たちの取り組み

高山村立 高山中学校

やまびこだより No.135 (2014年度)より



中学生議会で村に提案

▲高山中学校の体育館が議場です。

高山中学校の「中学生議会」は、全校生徒が議員となり、高山村の未来に向けて直接意見や要望ができる場です。1998年からほぼ毎年開かれています。議長は生徒が務め、実際の村議会と同じ形式で村長さんや村議員さんたちが出席し、生徒の発言に答えて下さいます。

議会で提案することは、総合的な学習の時間に「故郷高山村」をテーマとした

ワインを軸とした村おこしをしたら、高山村にたくさん人が集まり、もっと活気のある村になると思います。

私たちの提案を実現してほしい...

フィールドワーク



フィールドワークで感じたことを出し合い、学年ごとに話し合って決めます。ワイン用ぶどう農家を訪ねたグループは、村おこしのためにワインを特産とした観光振興策などを提案しました。

これまでもさくら街道の整備など、「中学生議会」の提案に応じて実現された例は数多くあります。自分たちで高山村のた



「チャオルの森」のさくら街道も中学生の提案でした。

高山村はワインぶどう栽培に最も適した地域です。しかし、生産者が少なく、村にはワイナリーがありません。

めに考え、提案したことが実現するのは、とても嬉しいです。

これからも「中学生議会」をさらに盛り上げ、故郷の未来の担い手として、大好きな高山村のことを考え続けていきたいです。

リヤカー商店開店！ 買い物弱者問題を考える～

長野県 飯田長姫高等学校

高校生ボランティア新聞 Vol.6 (2012年度)より



リヤカーで食料品や日用品などの移動販売

買い物弱者になる可能性が高い人は？

- 車を運転できない高齢者
- 体が不自由な人

「買い物弱者」「買い物難民」という言葉をご存じですか？ここ数年、スーパーの撤退や商店街の衰退などで、歩いて行けるお店が少なくなり、買い物に不便を感じている人々が増えています。

私たちはそうした「買い物弱者」への支援として、リヤカーによる食料品や日用品などの移動販売を飯田市内で行い、誰もが安心して暮らせる地域とは何かを

考えました。少子高齢化や都市化によって近所づきあいが希薄になり、買い物を頼める人が身近にいないことも問題の要因と考えられます。

「ユニバーサルデザイン大学生高校生会議」でリヤカー行商を実践した松本大学の先輩たちと話し合ったり、タレントのさんしろうと長野県の将来について語り合うフォーラムにも参加したりしました。



「ユニバーサルデザイン大学生高校生会議」にも参加

私たちにできること、できないこと

- 近所の買い物弱者の方々に声を掛ける。
- 代わりに買い物に行く。(届ける)
- △近くに店を出店する。継続的な販売。
- ×公共交通網を改善する。

地域のスーパーなどは、行商や宅配サービスを行うといい。

買い物弱者の問題を他人ごとにしなさい！

私たち自身が社会の問題に関心を持ち、解決のために積極的に行動していくことが必要。

夏休みのトマト収穫作業 伝統行事を受け継いで

安曇野市立 堀金中学校

やまびこだより No.127 (2013年度)より

堀金中学校では、様々な福祉活動を行っています。その中でも大きな活動は「トマト収穫作業」です。20年以上前から伝統的に行われている行事で、生徒会役員が中心となって計画し、夏休みに全校生徒が集まってトマトの収穫作業をします。

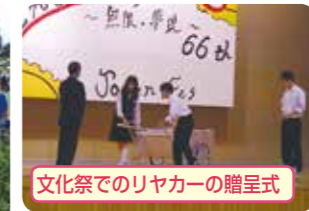
今年は暑い日が続いたので、トマトがかなり傷んでしまっており、ちゃんと採れるのか不安でした。しかも収穫日当日は太陽がこれでもかと照りつける炎天下。とても暑い中の大変な作業でしたが、みんなで汗を流しながら、お互いを励まし



炎天下の中での収穫作業

合い、一生懸命トマトを収穫しました。みんなの心配をよそに、トマトが入ったケースは増えていき、ピカピカに光る真っ赤なトマトが大量に採れました。

採ったトマトは加工工場に出荷します。その収益金の一部と、毎週行われている



文化祭でのリヤカーの贈呈式

アルミ缶回収の収益金を合わせて、物品を購入し、安曇野市社会福祉協議会堀金支所に寄贈しています。今までに車イス

や災害時用の発電機等を贈ってきました。今年は支所の希望により、リヤカーを購入し、文化祭で贈呈式を行いました。リヤカーは、農作業などで活躍しているようです。

これからも、伝統行事として後輩に受け継いでいってほしいと思います。

地域の方々とともにアルミ缶回収 換金して購入した車いすを地域の施設に贈呈

佐久市立 野沢中学校

やまびこだより No.131 (2013年度)より

野沢中学校では、地域の方々の協力を得てアルミ缶回収を行っています。回収したアルミ缶を換金し、車いすを購入して、近隣の福祉施設や老人ホーム、デイサービスセンター等に寄贈しています。

この活動は10年程前からずっと生徒会活動のひとつとして位置付けています。アルミ缶を処理するのは施設委員会の活動です。清掃時間に処理をします。時には袋の中にアルミ缶以外の物が入っていたり、ア

ルミ缶が十分に洗ってなくて臭ったりすることもあります。車いす購入のために根気強く作業を行っています。駐車スペースが十分あるので、学校付近の方はもちろん、学区外の方々の協力もいただいています。

施設の方々や学校に来ていただき、贈呈するときはとても感慨深いものがあります。また、自分たちが寄贈した車いすが各施設で役立っていることを知ると嬉しくなります。地域の方々との協力を得な



正門付近にアルミ缶の回収箱を設置



贈呈式で施設の方々と一緒に

がら、人のために役に立つことができ、喜んでいただけるからです。

今後は車いすだけではなく、施設の方々や各施設で役立っていることを知ると嬉しくなります。地域の方々との協力を得た還元する役割を果たしていきたいです。

アルミ缶でつながるふれあいの輪 地域の福祉施設との交流

上田市立 長小学校

やまびこだより No.132 (2014年度)より

長小学校では、児童会活動で11年前からアルミ缶回収を行っています。代表委員会が全校に呼びかけ、各家庭から回収します。

全校児童115名の小さな学校ですが、昨年度は1年間で約679kgのアルミ缶を集め、49,245円の収益を得ることができました。そのお金で、地域の福祉施設、ライフステージかりがねと真田グループホームに、キーボードとポータブルトイレを贈りました。

7月に6年生14名は、ライフステージかりがねの皆さんとの交流会に参加しまし



アルミ缶回収当番

た。はじめはどのように声をかけ、ふれあいたらいいかわからず、緊張していました。でも、以前に贈った車いすやボールなどのレクリエーション用品を使ったゲームをし、お互いにふれあうことで、楽しみながら自然とコミュニケーションがとれるようになりました。



ライフステージかりがねの皆さんとの交流会

交流を終えて、「アルミ缶回収をもっとがんばりたい」「施設の方々のほしいものが贈れるようにアルミ缶集めを呼びかけた」という思いを持ちました。

今後もふれあいの輪を大事にしながら、全校でアルミ缶回収をがんばっていきます。



* 私たちだからこそできること

僕たちの「元気」が復興の力になる！

やまびこだより No.122 (2012年度)より



長野県北部地震で被災した栄村(2011年3月)

2011年3月12日、長野県北部地震を体験した栄小学校の児童たち。被災地支援にも感謝しながら、自分たちもなにかできることをしていこうと、総合的な学習の時間で「震災・復興」をテーマに学んでいます。その中で、自分たちの元気が村の人たちを勇気づけることを知り、活動を始めました。



今はみんなで力を合わせ、復興への道を歩んでいます！



知り合いも少なくてもさびしいかも…

1 たくさんの支援に感謝して

被災をして大変だけれど、ご支援にも感謝しながら、自分たちもなにかできることはないか、話し合いました。



「結い」を訪問



仮設住宅へぞうきんをお届け

2 ボランティアのみなさんと

「栄村復興支援機構[結い]」を訪ね、学生のボランティアさんと仮設住宅に支援物資の手作りぞうきんを届けるお手伝いも始めました。

3 仮設住宅を訪問

ぞうきんを配りながら、困っていることや小学生にも何か手伝えることはないか、みなさんにお聞きしました。

4 お話を聞く

どんなことに困っているのかな？

「買い物に不便なので、近くにお店があるといい」「子どもたちの声が聞こえるだけで元気が出る」といった声も寄せられました。

5 みんなで考える

どうしたら喜んでもらえるかな？

お聞きした様子などをもとに、仮設住宅の人たちのために自分たちにできそうなことを考えました。

- 畑の水やり ● 冬場の雪かき
- 話し相手 ● 募金
- お守りづくり

6 楽しい交流イベントを開催しよう

仮設住宅や地域のみなさんがお互いに交流し合えるイベントを開くことに決定。高齢者の方にも楽しんでもらえるプログラムをみんなで考え、計画を立てました。

来てくださいね。



開催のご案内

7 絆を深めるために……

交流イベントで仲良くなったみなさんに、今度は私たち手作りのお守りを届けました。栄村の復興に向けて、これからもお互いがんばりましょう！

交流イベント開催！

楽しみにしてたよ。

当日プログラム

- お茶会
- ゲートボール
- 歌
- ダンス など

● 栄小学校では、支援していただいた方々への御礼の手紙書きや、福島県南相馬市の小学校に「お互いがんばりましょう」といった応援メッセージを送るなどの活動もしています。

* ネパールでみた“Yodakubo”

N(南部)マークのカバンで通うネパールの学生

上田市・長和町 依田窪南部中学校

やまびこだより No.127 (2013年度)より



ネパールの小学校

南部中のカバンを背負って登校しています。

● ネパールと日本の違い ●

国名	ネパール	日本
総人口	2,460万人	1億2,750万人
1人当りの国民総所得	230ドル	33,550ドル
乳幼児死亡率(対1,000人)	66人	3人
妊産婦死亡率(対10,000人)	740人	10人
15歳以上人口の識字率	42%	-

出典：ユニセフ「世界子ども白書 2004」

依田窪南部中学校ではボランティア委員会の活動として、2001年からネパールの学校へ通学カバンを送っています。現地へはJAITI(公益財団法人日本農業研修場協同会)を通して送っていただいています。箱に詰めて送ると輸送費がかかるため、現地に行く際に手荷物として持って行っていただいています。私たちのカバンはレカリ・バシファント学校に届きます。ネパールの首都カトマ

ンズの南西、車で3時間半ほどのところで、標高は2,350m。学校が集落から離れたところにあり、通学には遠いところで片道2時間半もかけて歩いて通っている生徒もいるそうです。筆記用具などの学用品も十分でなく、カバンの代わりに布を使っています。現地の様子を撮影した写真には「N」のマークのカバンが映っていました。私たちにとっては不要になったカバンですが、現

地の皆さんが長距離の通学で大切にしてくれている様子を見ると、とても嬉しいです。同時に私たちは、まだまだ使えるものを捨てていたり、まだ十分使えるのに新しいものを買ったりしていることに気がされました。今後もこの活動を通して、ネパールの現状を知り、活動の意義を学んでいきたいです。

* 被災地でのボランティア活動に参加

「行ってみなけりゃわからない！」気仙沼向洋高校との交流

長野県 長野工業高等学校

高校生ボランティア新聞 Vol.6 (2012年度)より



現地に行けば、誰でもできることは山ほどあります。



悲惨だと思っていたけれど、みなさんが親切で、とてもあたたかな空間でした。

*「長工祭」でのチャリティーバザーやPTAによる東北物産展の収益金なども支援金に充てました。「長工祭」ではボランティア活動の報告、「はまセン」代表の川上哲也さんの講演会を開催し、地域の方々への情報発信もできました。

被災者の方々、ボランティアの仲間、人との出会いが素晴らしいかったです！

つらい状況だからこそ笑顔が大事なんだね！

東日本大震災に際して、生徒会では4月から校内で募金活動を継続してきました。そして、栄村や東北の被災地でボランティア活動をした近藤正先生の話を知り、生徒たちからは「自分も行きたい」という声が多くなりました。そこで5月に生徒会の代表6名が近藤先生と共に、宮城県気仙沼市小泉浜地区へ足を運び、ボランティア活動に参加しました。避難所となっている体育館やテントに

宿泊し、がれきの除去に取り組んだり、地元の子ともたちと遊んだりしました。活動を通じて、津波で校舎が全壊する大きな被害を受けた気仙沼向洋高校の存在を知り、同じ高校生として支援することを決めました。そして、生徒会の備品が流されて困っていることを知り、13万円あまり集まった募金で、ノートパソコン1台、プリンター1台を贈ることになりました。

8月にそれらを現地に届けて、生徒会活動などの交流も行い、今後も交流を継続することを約束しました。また、夏休みには野球部の3年生が長野吉田高校の生徒と共に気仙沼市大島での復興ボランティア活動に参加。その際、向洋高校野球部を訪ね、激励の練習球2ダースを贈りました。

4 協力して大きな力に

5 思いを寄せる



絆音楽祭で村の人を元気に！

長野県北部地震で被災した栄村で

やまびこだより No.123 (2012年度)より

長野県北部地震で被災。
みんなが支え合っていることを知りました。



震災直後の栄中学校。ランチルームは避難所にもなりました。



絆の大切さを学校祭で表現しようと、地域の方々と一緒に作った「絆RIBBON」の壁画。メッセージを書いた1枚の紙を集めてひとつの絵にしました。



たくさんの方が支えてくれた

2011年3月12日未明、栄村は震度6強の揺れに襲われました。栄中学校も含め、あちこちで大きな被害が出て、村の人たちはしばらく家に帰れなくなってしまいました。中学校のランチルームは地域の避難所になりました。

地震以来、村の大人たちは、炊き出しをしたり、トイレをきれいに保つてくれたり、助け合ってみながなるべく安心できるようにしていました。消防団の人たちは夜も村を回って、警備をしていました。村外からは、ボランティアの方が訪れて、気持ちいい足湯なども用意してくれました。県内各地の中学校からは、あたたかいメッセージや心のこもった義援金もいただきました。

つらい経験の中で、そうした人と人と

のつながりが心から嬉しく感じられました。そして、支えてもらうばかりでなく、村の人たちのために自分たちにもできることはないだろうかと思うようになりました。

中学生が村の人のためにできること

でも、中学生にもできることって、なんだろう？まず、栄村の復興ボランティアの拠点となっていた「栄村復興支援機構『結い』」を訪ねました。そこで聞いたのは、もう村には住めないと思っていたお年寄りが、ボランティアの人に元気づけられて、やはりここで暮らしていることと決めた、というお話。自分たち中学生にも、村の人を元気にすることなら

そこで、栄中学校が得意な「合唱」

で村の人を元気にしよう！と思いつきました。「栄村の力になりたい」とメッセージを送ってくれている他の学校にも声をかければ、もっとみんなが元気になる。力になりたいという各地の中学校のみんなの思いにも応えられる。そこで、県内5つの中学校合同で「絆音楽祭」を開催しました。

村の人が感動してくれたことが何より嬉しかったこの「絆音楽祭」を、これからも続けていきたいと思っています。

私たちの村は、みんなが助け合って生きていく村。「絆」が生きている村だということ、そして、どんな時でも、自分たちにできることはあるんだということ、強く実感しています。

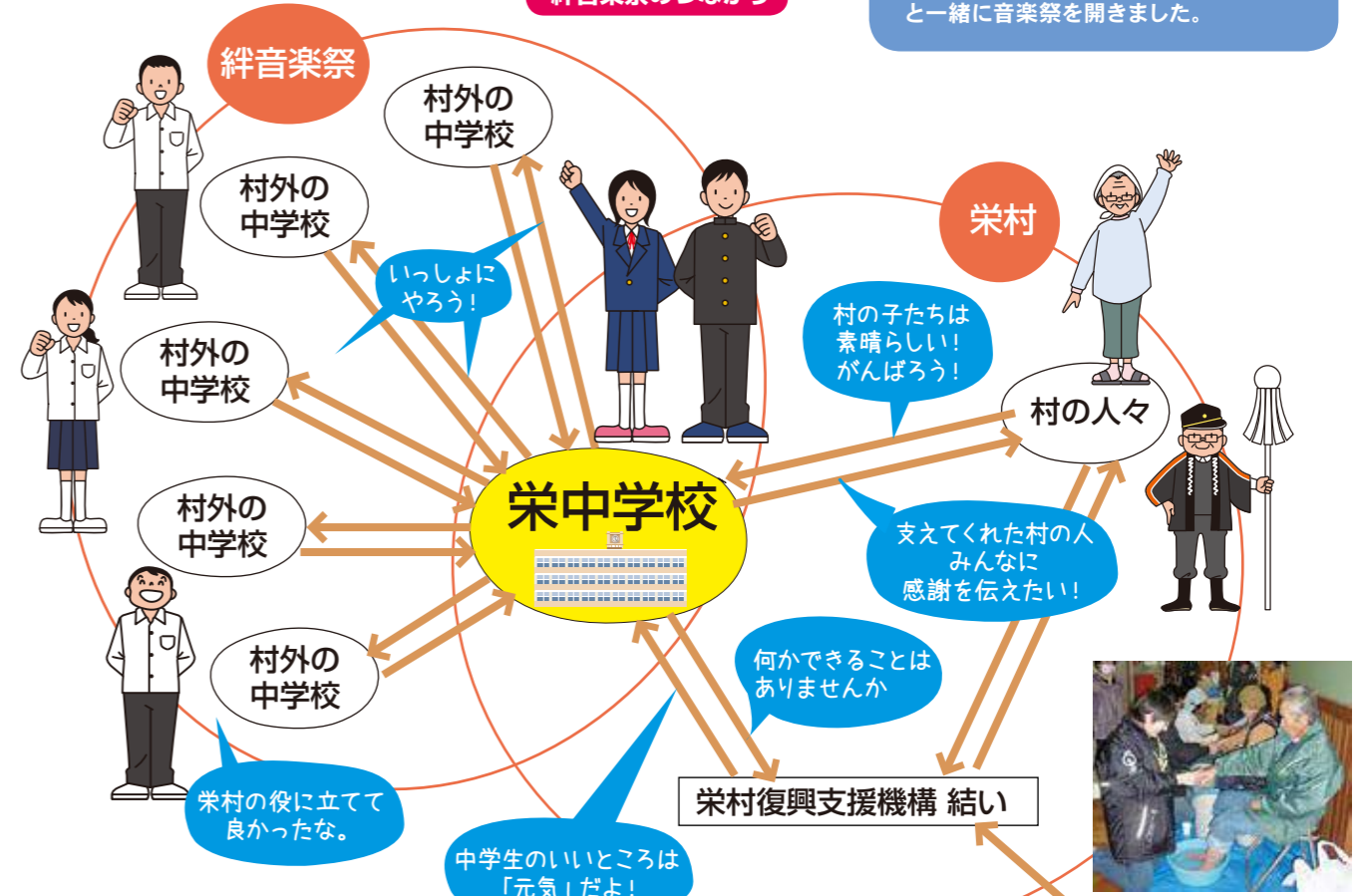
音楽祭の様子は、NHK「中学生日記」でも取り上げられました(2011年11月25日に放送)。



絆音楽祭には県内5つの中学校が参加。



励ましのメッセージがたくさん届きました。



足湯は大好評でした。

復興支援ボランティア



絆音楽祭での交流会

●栄中学校 田中新一先生より

絆 音楽祭が終わるときに、生徒が「地域の方々に喜んでもらって本当によかった」と言いました。村の人々からは、「感動で涙が出そう。栄中の演奏が一番だったよ」と言っていました。大人たちが村のために働く姿を見て、中学生にもできることはないかと真剣に考えて実行した音楽祭。様々な人の温かさ、つながりあう喜び、そして、自分たちにもできることがあるんだということ、生徒たちは身を持って実感しています。地震はつらい経験でしたが、生徒たちは一回り大きく成長しました。たくさんのご支援をいただいたことに、心から感謝します。

*2012年1月26日「福祉教育のつどい」事例発表より



* 豊間中学校との笑顔の交流

いわき市の中学生と、手をつなごう

やまびこだより No.123 (2012年度)より



豊間中から記念の旗、相森中からは双子のモザイクアートを交換。

被災地を訪ねた先生の報告で、校舎が無くても仲間とともにがんばっている豊間中学校の生徒たちを知り、「自分たちができる支援を」と、様々な活動を行う相森中学校。2012年夏、親善交流使節団を結成し、生徒たちの訪問が叶いました。



グループに分かれ、ゲームやトークで楽しい交流時間を過ごしました。

る団結の強さ、心の優しさが伝わってきて、私たちが元気をもらった気がします。

震災を忘れないためにも、この交流を通して学んだことをみんなにも伝え、今後どのようなことができるか考えていきたいと思います。

●引率した相森中学校 月岡英明先生より

被災地支援のあり方は多様ですが、笑顔や友情を届け、絆を深める交流の有効性を今回強く感じました。「支援する」と言うより、「手をつなぎ、被災地から学ぶ」というスタンスが大事です。お互いの生徒たちがこれからの復興の力となる日が来ることを願ってやみません。

あの震災を忘れずに…… 私たちの方が元気をもらいました

須坂市立相森中学校では、2011年の東日本大震災で被害を受けた福島県いわき市立豊間中学校に応援ビデオレターを送るなどの交流活動を続けてきました。私たちは「今年も何かできないか」と考え、先生やPTAの方々の協力で、8月に親善交流使節団を結成して被災地を訪問し、豊間の方々に会いしてきました。

緊張する私たちが笑顔で温かく迎えてくださった豊間中学校の皆さんとは楽しく交流ができ、みんなで困難を乗り越えようとしてい

フレ〜、フレ〜、ト〜ヨ〜マ〜!



応援ビデオレターの一コマ



被災現場を視察……ショックでした



親善交流使節団に参加した生徒の感想より

- 現地に行ってみなければ、被害の実態や被災者の思いを本当に肌で感じ、理解することは難しいんだと学びました。
- みなさん笑顔で迎えてくれたけれど、自分が思っていた以上に悲しい思いを抱えていることが分かりました。
- 被災現場は残酷の一言。被害の規模が想像以上に大きすぎて言葉が出なかった。



いまだ放置されたままの震災がれき

- 豊間の人たちが辛い経験を乗り越えてくることができたのは、仲間との絆があったからだと思いました。
- 被災地の人々が今最も怖いのは「忘れられること」だそうです。このつながりを大切に、自分が見て聴いて感じたことを多くの人に伝えていきたい。大震災はまだ終わっていないのです。



* きささげ夢プロジェクト

南三陸町訪問から私の生き方も考えた

やまびこだより No.135 (2014年度)より



●仮設住宅で吹奏楽部の演奏



●ボランティアチームによるハンドマッサージ「手のぬくもりが嬉しいんだよ」



●バスケットボール部の交流試合ではエールを交換



きささげ夢プロジェクト

全校生徒73名の聖南中学校では、2012年度から「きささげ夢プロジェクト被災地訪問」という、宮城県南三陸町の皆さんとの交流を行っています。

「きささげ夢プロジェクト」は、小さい学校だから、みんなで大きな夢を持つ、というプロジェクトで、被災地訪問や全校合唱など、全校で様々なことに取り組んでいます。

被災地訪問は2014年で3年目です。在学中に、全員南三陸へ行こうという目標を持っています。今年は10月11日

～12日に、吹奏楽部、男子バスケットボール部と、有志ボランティアチームの合計43名が訪問しました。

仮設住宅や商店街での演奏会、志津川、歌津中学校とのバスケットボール交流試合、町の人々へのハンドマッサージなどのボランティア活動を通し、南三陸の皆さんの思いに触れ、自分たちの毎日を振り返ることもできました。

復興には、まだ長い時間がかかります。南三陸で出会った人々のこと、皆さんの温かい心を忘れずに、一生懸命生きていくことが、復興支援だと強く感じました。



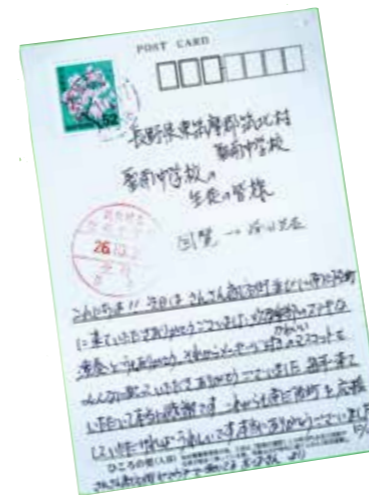
●南三陸町の高野会館

★ 参加した生徒の感想より ★

- 「私は今まで、自分は人のために役に立ったことがあまりないような気がしました。ハンドマッサージをしている時、あるおばあさんから、『私はあなたたちのおかげで元気になれるし、長生きしてるんだよ』と言われました。こんな私にも人の役に立てるのかなと思え、とてもうれしくて仕方がありませんでした」

- 「南三陸町の皆さんは、つらい状況の中でありながら、一生懸命に生きていました。南三陸では、結ぶという字を使って『結いっこ』と呼ぶそうです。人と人とを結び結いっこは、この筑北村でもたくさんあるような気がしました」

- 「南三陸のすべての方から、あたたかいぬくもりを感じました。今回一番考えたことは、自分はなぜこのぬくもりを大切にできなかったか、ということです。人としてのぬくもりを忘れない人々を見ると、自分自身が人としてまったくかなわないと思いました」



さんさん商店街の方から頂いたお礼の葉書



●南三陸町の朝焼け 多くの命も奪ったけれど、豊かな恵みも与えてくれる、美しい海です。

5 思いを寄せる

5 思いを寄せる



私たちは未来の設計者

被災地 岩手県大槌町での交流をとおして

やまびこだより No.128,131 (2013年度)より

軽井沢町の小中学生を代表して 大槌町を訪ねました



東日本大震災で大きな被害を受けた大槌町

復興支援バスツアーに参加して

軽井沢町の小中学生を代表して、町内3つの小学校の正副児童会長たちが、町社会福祉協議会主催の「復興支援バスツアー」に参加しました。

夏に学校で講演して下さった大槌中学校の鈴木校長先生のお話を聞いた小中学生が集まり、「私たちにできることは何だろう?」と話し合いました。

今回参加した7名は軽井沢町にいる小中学生の「現地の様子や、そこに



大槌小学校の皆さんと津波の避難訓練

る人を知りたい、つながりたい!」という気持ちを届けながら、大槌小学校の皆さんと一緒に津波の避難訓練にも参加しました。参加した友達の報告をもとに、これから小中学生がみんなで協力して支援をしていきます。



★ 参加した児童の感想より ★

● 私たちに「何ができるか」と聞きました。それは「大槌の事を忘れないでほしい」との事でした。なので私は、大槌だけでなく、震災で被害を受けた地域を忘れずに日々を過ごして行きたいです。

● 皆さんが元気に過ごしている姿を見ることができて、とてもホッとしました。津波や地震に負けずに、いろいろな場面に真正面から向き合ったからこそ、今の白沢さんや小学生がいると思います。



笑顔をやさず元気な大槌中生

大きな被害を受けた大槌町ですが、そこで生活する大槌中学校の生徒は、とにかく元気です。朝から下校するまで、廊下ですれ違う度に、1日に何度も笑顔で挨拶が飛び交います。部活動でも団体優勝8種目という大きな成果を残しています。

仮設校舎に感謝を込めて掃除しています。



負の体験は消えない... それならみんなで楽しい思い出を!

毎日笑顔で登校

数々の支援が生徒たちの笑顔を支えています

生徒たちの元気の源は、くつやカバン、義援金など全国から寄せられた温かい支援、そして、みんなで楽しいことをしていこうという前向きな考え方だと思います。支援者とのふれあいはじめ、震災を機に体験した多くのことが、彼らの発想を変え、心を培い、そして未来を変える。子どもたちは未来の設計者なのです。



鈴木利典 先生

軽井沢町・長野市・松川村で開かれた大槌中学校校長 鈴木利典先生の講演会より

私たちにできること

大槌町復興支援のための三つの取り組み

やまびこだより No.134 (2014年度)より



ありがとう。町のみんなも喜びます。

僕たちも支援活動を続けます。

大槌町訪問

お届けした応援メッセージは町の中に飾っていただきました。



津波跡地での黙とう



大槌町支援のための資源回収

大槌町を知ろう月間

大槌町について調べ、まとめた新聞の掲示

昨年度、軽井沢町では、東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大槌町への復興支援を10年間行うことに決めました。そこで、私たち中部小学校でも「何かできないだろうか」と考え、児童会を中心に三つの大槌町支援活動に取り組んでいます。

一つ目は、「大槌町を知ろう月間」です。福祉委員会を中心に大槌町について調べ、新聞にして掲示しました。大槌町の場所や特産物、地震や津波による被害

の様子も全校に伝えることができました。

二つ目は、「大槌町訪問」です。夏休みに、児童会役員が代表として訪問し、全校で書いた応援のメッセージを届けました。町の人たちは笑顔で迎えてくださりうれしかったです。けれども、まだ仮設住宅があって皆さんの生活は安定しておらず、ショックでした。これからも支援が必要だと強く感じました。2学期には報告会を開

き、現地の様子や訪問しての感想を全校に伝えました。

三つ目は、「大槌町支援のための資源回収」です。軽井沢中学校と協力をしながら、資源回収を行っています。集まったものは、大槌町の小中学校の学用品を購入するための費用になります。これからも資源回収で、大槌町復興に向けてたくさん支援していきたいです。

福島の人たちに思いを寄せて

エネルギーについて、福島の小学生と話し合い

やまびこだより No.132 (2014年度)より



ほかの県の人とエネルギーの話ができてうれしいです。

テレビ電話で話し合い



原子力発電所の近くにいる怖くはないですか?

駒ヶ嶺小 福島の子どもの話

● 事故の後、地元の食べ物は、家の畑のものでもチェックしてから食べるようになってきました。

● 運動会も外ではできなかったし、遠足も中止になりました。

駒ヶ嶺小 原子力発電については、どう思う?

● どんなに気をつけても、事故が起きる危険性はなくなることはない。

● いつかはなくなってほしい。でもすぐには難しいかもしれない。

福島の人たちも、悩んでいるんだな。

近くに住む人の気持ちを聞いて、ないほうがいいと思いました。

森上小



福島の様子

原子力発電所で、事故が起きると、どんな影響があるのでしょうか。

福島県の人たちが事故によってどのような気持ちで過ごしたり、経験をしたのかを直接聞いてみました。

福島県新地町立駒ヶ嶺小学校の6年生と「未来のエネルギー資源」についてテ

レビ電話で話し合いました。

みんなが使っている電気のことを、発電所のある地域の人たちだけに任せきりにせず、これからも福島の人たちの気持ちに寄り添って考えていきたいと思っています。

* みんなで育てた りんごで被災地支援 支援活動をしている保護者も協力！

飯田市立 飯田東中学校

やまびこだより No.133 (2014年度)より



シニア大学の方と仮設住宅を訪問

飯田東中学校の環境ボランティア委員会では、長野県シニア大学 31 期生の方々と一緒に、東日本大震災で被害を受けた岩手県陸前高田市の西大隅仮設住宅へ支援を続けています。

昨年(2013年)は私たちが育てているりんご並木のりんごやジュース、ジャムと色紙を送りました。今年の5月に仮設住宅に訪問させてもらったとき、「おいしかった」「ありがとう」と言ってくださったのが、とても嬉しかったです。

仮設住宅に住む方々が、少しでも勇気が湧いてくるような支援ができるよう、これからもりんごにメッセージを添えて送っていききたいと思います。



こんな支援活動もしています

●市長さんを通して、東日本大震災後に福島南相馬市から飯田市に避難された方々へりんごを送っています。



●被災地支援のために、毎週アルミ缶回収をしています。昨年は 86,080 個集まりました。

* たねぷろじえくと 津波の被害を受けた里山をよみがえらせよう！

上田市立 塩田西小学校

やまびこだより No.134 (2014年度)より

津波の被害を受けた宮城県山元町の里山をよみがえらせるために、被災地のドングリから苗木を育てる「たねぷろじえくと」に取り組んでいます。長野大学の皆さんと一緒に、2年生がドングリの苗木を育てています。



育てているドングリの苗木



宮城県の皆さんが育てている苗木を見せてもらったり、一緒に苗木にするドングリを拾ったりしました。



植樹の予定地



山元町の小学生と交流会

10月に宮城県山元町を訪ねて、同じ活動をしている山元町立坂元小学校、白石市立第二小学校の皆さんと交流会をしました。

私たちが育てた苗木を2016年春に植える予定の場所を見学しました。津波で木

がなくなってしまう、今はまだ砂だらけです。

「早く植えたいな」「たくさん植えよう」とあらためて思いました。

* 有志で被災地支援ボランティア活動 現地に行って感じたこと

長野県 白馬高等学校

高校生ボランティア新聞 Vol.7 (2013年度版より)

東日本大震災の悲惨な状況を知って、前年度の生徒会の生徒が自分たちにも何かできることはないだろうかという有志を募り、東北ボランティア活動を開始。今回はそれを引き継ぐ形で、宮城県仙台市若林区での活動に、7名の有志生徒(先生と保護者が一人ずつ同行)が参加しました。

現地では『ReRoots』というボランティア団体の活動に参加して、その方々から指示をいただき、田んぼ・畑を掘り返し、がれき、プラスチックやガラス片等のゴミを取り除く作業を行いました。

田んぼのゴミの除去作業



田んぼ・畑を掘り返し、がれき、プラスチックやガラス片等のゴミを取り除く作業を行いました。



東日本大震災慰霊之塔

参加者の感想

- 現地に行って、被災地に対する見方が変わった、人ごとではないと思うようになった。
- まだまだ復興が進んでいない印象を受けた。
- このボランティアは、保護者、先生方など様々な人の助けがあってできたことだと思う。

当時のこと、また相手の立場だったらどんな気持ちだったのか想像しました。被災地の方々とふれあいの中で、相手の「力になりたい」、他人事ではないと感じ、相手の立場になって考えるようになりました。

今まで、ボランティアというと、募金活動程度でしたが、今回のように現地に行くことが大切だと思いました。行きたい方がいればぜひ行ってもらいたいです。

* 被災地とのメッセージ交換 支援活動をしている保護者も協力！

佐久市立 田口小学校

やまびこだより No.120 (2011年度)より

4月のはじめ、田口小学校では5年生のみんなが、東日本震災で被害を受けた宮城県石巻市の小学校に応援のメッセージをまとめ、石巻市の支援活動をしている保護者の方に届けていただきました。そして7月、石巻市立釜小学校6年1組の人たちから、「心のコもったメッセージをありがとう」「元気ができました」という感謝の言葉が書かれた壁新聞が届きました。壁新聞にはそのほか、震災前と震災後の学校の様子や、困ったこと、不足しているものなどをくわしく調べた表やグラフも描かれていました。

田口小のみんなは壁新聞を見て、思いが伝わったことをうれしく思いながら、被害の大きさを身近に感じました。今度は、ビデオレターで田口小の様子を伝えたり、歌を送ったりすることも考えています。そして、釜小のみんなと元気に交流を続けていけるといいなと思っています。



田口小学校から送った応援メッセージ。児童のお母さんが被災地へ行ったときに届けてもらいました。

石巻市立釜小学校から届いた壁新聞



5 思いを寄せる

* 栄村出身の同級生のために 力になってあげたい！被災地支援

長野県 飯山北高等学校

高校生ボランティア新聞 2012年度版より

長野県北部地震で被災した栄村。飯山北高には栄村から通う仲間も多く、彼らのために何かしてあげたいという思いがみんなにありました。

そこで生徒会を中心に義援金を募るほか、4月初めに有志がボランティア活動に参加。支援物資の仕分け、震災ゴミの片付けなどを行いました。

避難所には何もなかったことから、本や雑誌などを集めて寄付もしました。一人ひとりがみんなでやれば、大きな力になれることを実感しました。



仮設住宅の除雪作業が大変です。(2011年12月)



震災ゴミの片付け



生徒会執行部の皆さん

生徒と一緒にボランティアをした方からのメールより

自分が皆さんと同じ年齢だったころに今回のような行動力があつたらうか。被災者の方々や他のボランティアに対しての気遣い、言葉遣いができただろうか。私は当時、今回のような災害があつたとしてもできなかったと思う。本当に大切な時に大切なものを学んでいて、それを発揮できるあなた達がいることに感謝します。

栄村の方々には明るい笑顔で気を遣ってくださり、私たちが励まされるようで胸が熱くなりました。

*北高生徒会では、フラワロードの花植えやまちなかの清掃、イベントなどのお手伝いなど、日頃から地域の人たちと一緒に活動しています。

5 思いを寄せる

楽しくなくっちゃウソ！の福祉教育は、 たとえばこんな授業です。

学校や地域で活躍している講師の皆さんが、福祉教育の体験授業をしてくれました。
こんな授業で、みんながわくわく・ドキドキ！

(2013年2月2日「福祉教育のつどい」 共催：長野市社会福祉協議会)

車いすで遊ぼう！

先生：NPO 法人ヒューマンネットながの
川崎昭仁さん

自身も電動車いすを使用している講師をお迎えして、車いす体験を実施。学校の先生や中学生、ボランティアセンターの運営委員などが参加しました。

まずは車いすで鬼ごっこ。これは車いすの操作に慣れるために車いすバスケの準備運動でよくやるものだそうです。片側の壁に並んだ“子”たちが会場の真ん中で待ち構える“鬼”に捕まらずに反対側の壁に逃げ切れたらOK。

捕まった子は次回から鬼になり、回を重ねるごとに鬼が増えていきます。もちろん、鬼も子ども車いすに乗っています。

1回目はベテラン男性教師が鬼。10人を超える子を相手に一人も捕まえることができません。鬼も逃げる子も慣れない車いすの操作に悪戦苦闘。しかし回を重ねるごとに一人二人と捕まえることができ、次第に鬼と子の人数は逆転。鬼同士で作戦会議を開き、子を囲い込み捕まえます。終わる頃には鬼も子どもすっかり車いすの操作に慣れ、参加者一同もっとやりたいと声を揃えました。

体験した先生からは「学校の車いす体験では、車いすで



遊ぶなと教えていた。逆転の発想で楽しく体験できた。学校でもやってみたい」との感想がありました。川崎さん「車いすに乗っているから遊べないのではなく、車いすに乗っている子も一緒に遊べる。楽しみながら体験すれば、それがわかります」と話していました。

後半は、車いすに乗る人とアイマスクをして押す人がペアになり、車いすに乗っている人の指示を受けながら車いすを押し、並べたペットボトルを倒していくゲームも行いました。時間が足りず、もっと遊びたい、そんな車いす体験でした。

視覚障がいがある方と、すいとんを作ろう！

先生：上村美佐登さん(木曾町)
笹川文子さん(木曾町)



食事は毎日の生活の基本です。目が見えない人は、食事をどうしているんだろう？じゃあ、一緒に作ってみよう。今日の先生は、視覚障がいがあるけれど、料理の名人です。

先生が野菜を刻む手つきは、本当は見えているのではと思うくらい軽やか。むしろ参加した先生方や学生さんのほ

うが危なっかしい手つきです。「今日のにんじんは大きいね。縦4つに割って、薄く切って」。見えていないのにわかるんだ！おっかなびっくり切り始めた中学生が、まな板の上を指さし「こんな感じで…」と言いかけたあと、「5ミリ位のちょう切りでいいですか？」。言葉で具体的に伝えることが大事だと気づきます。「いい香りがしてきたね。すいとんは4本の指でつまんでお鍋に入れてね」。音や香り、指の感触が目の代わり。ぽんぽんと鍋に投げ込むお団子は、大きさもそろっていて、おいしそう！

できあがったすいとん汁と、自家製の木曾^{あかかぶつ}赤無漬けをいただきながらお話をしました。ご家族の食事をいつもこんなふう^{あかかぶつ}に作っていて、三味線や遠出が大好きなお二人。「料理は手が覚えているの。できることは自分でやりながら暮らして、毎日幸せよ」。その言葉を味わう授業でした。

生まれてくるってどんな感じ？

先生：NPO 法人 ながのこどもの城いきいきプロジェクト
田中春海さん



出産直後、お母さんのお腹の上を誕生したばかりの赤ちゃんがおっぱいを探してにじりあがっていく。首のすわらない赤ちゃんが

コップからミルクを飲む…驚きの映像に初っ端から命のたくましさを感じます。早速2人一組になってコップに入れた水を飲ませ合いつこ。赤ちゃん役は首がすわっていないので、首を支えてコップを傾けると、ちゃんと飲めた！災害時でもコップさえあればミルクを飲まされて衛生的にもいいとのこと。赤ちゃんが苦しい思いをしないように、様子をしっかりと見ながらでな

いと上手くできません。

子宮に入る体験では、大きくて真っ暗な袋に赤ちゃん役の人が入ります。回りの人は袋の上からさすったり、声をかけたり…。中に入った人に聞くと真っ暗なのに全然怖くなかったそう。それどころか「親に対して感謝の気持ちが生まれました」という感想でした。また、紙に自分でエコマップ(家系図)を書くワークでは○と線で先祖へとつないでいくと、自分が存在するためにたくさんの人がいたことが実感できます。

どれも命の大切さ、重さを感じる感動的な体験で、幸せな時間を過ごしました。



遊びから考えるコミュニケーション

先生：ブラインドサッカー「FCレインボー」
中沢 匠さん



「ブラインドサッカー」は、視覚に障がいのある人もそうでない人も同じフィールドでプレーするユニバーサルスポーツ。視覚に障がいがある当事者でもある中沢さんは、チームプレーに欠かせないコミュニケーションを通し、様々なかたち「伝え方」を編み出しています。

まずは簡単な遊びからスタート。約20人の参加者が全員アイマスクを着け、手をつないで輪になります。中沢さんが1回笛を吹いたら「右」、2回吹いたら「左」に回るという、シンプルなゲーム。ところが、これがなかなかうまくいきません。他の人の動きが見えない中で、どちらに回るかまどい、お

隣とぶつかることもしばしば。そこで中沢さんからヒントです。「声に出して共有しましょう」と。言われてみれば簡単なこと。「右！」「左！」と声をかけ合うだけで、たちまち動きがピタリと揃って、くるくると輪が回ります。みんなが笑顔になってきました。

続いて、中沢さん得意のブラインドサッカーを少し体験。10mくらい離れたコーンをゴールに見立て、アイマスクを着けたプレーヤーがシュートします。ゴールではサポーター役が「ハイ！」「ハイ！」と声をかけ、ゴール位置へ誘導。周りの人も「もっと右」「そこでシュート！」など、自然と助けを出し始めます。シュートが決まると大歓声！

「見えない」なら、別の「伝える」方法を考えてみる。そのコミュニケーションを通し、みんなで助け合うことで、ひとりでは得られない大きな喜びを実感しました。

ゲームで楽しくコミュニケーション

先生：NPO法人信州アウトドアプロジェクト
吉田理史さん



吉田さんは、子どもたちが仲良くなる楽しいゲームを実践している方ですが、この日は「大人」の皆さんが挑戦しました。その一つを紹介しましょう。

参加者全員がひとつの円になります。最初にテニスボールぐらいの大きさのカラーボールを1個ずつ5人が持ち、吉田さんの「せーの」の言葉とともに、ボールを誰かに投げます。このときに必要なのが、コミュニケーションの力。「あなたに投げるよ」と言うサインをどのように伝えるかです。ボールを持つ人がうまくサインを送ることで相手の人もキャッチが

できるのです。ボールの数を増やしながらかみゲームは進み、最終的には、メンバーの半分の人がボールを持って、投げます。このときには、誰が誰に投げるのか、投げたボールが空中でぶつかったりと、大変な騒ぎに。成功させるためにみんなで考えることが必要になっていきます。喧々囂々、熱くなってわれを忘れて意見を交わす先生方に対して、周りでジーンと聞いていた高校生がナイスアイデアを出す場面も。行き交うボールは、まるで人の心のように。伝え合うことの難しさや、大切さが垣間見えたのでした。

体験された皆さん、「ゲームの中で自然にいろんな人と関わることができた。やってみてわかることがたくさんあった。」「思ったよりも面白かった」「早速学校でやってみます」など、先生方自身も体験することの良さを実感されていました。



「福祉教育のつどい」開催レポート

2012年1月26日に、長野市で「福祉教育のつどい」を開催しました。基調講演、参加者全員で自慢の取り組みを見せ合う「情報フリマ」、そして、全員が「福祉教育って…」のあとに続く一言を発表し、「福祉教育」の可能性を考えました。

共催：長野市社会福祉協議会

基調講演 (抄録)

地域にまなぶ・地域をまなぶ 福祉教育のめざすもの

学習院大学教授

講師 **長沼 豊 氏**



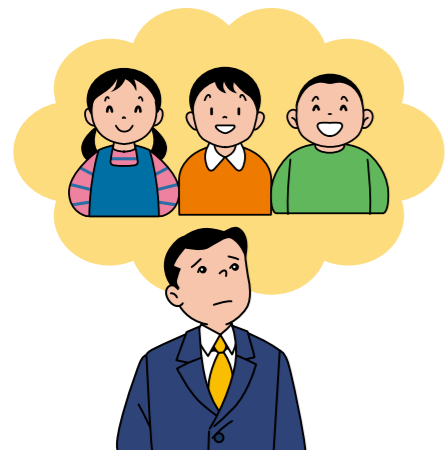
Profile ●ながぬま ゆたか

高校・大学時代からボランティア活動にかかわり、学習院中等科教諭を経て、1999年4月から学習院大学教職課程助教授。その後、准教授を経て2009年4月から現職。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了、博士(人間科学)。ボランティア学習、市民教育、特別活動を中心に研究を進める。日本ボランティア学習協会常任理事、日本特別活動学会副会長などを務める。

福祉教育は子どもたちの視点で 幸せを考えること… 原点から構成しよう

「福祉」という文字は、どちらも幸せを表しています。豊作に感謝してとっくりにお酒をついで、神様にお供えする「福」。神様が私たちの目の前で足を止めてくださるといふ「祉」。福祉とはすべての人の幸せを考えることです。幸せじゃない状態があればそこに福祉課題がある。

ところが、なぜか福祉教育になると、障がい者、障がい、高齢者の生活を考える、車いすに乗ってみる。急に幅が狭く



なって、幸せ、もっといえば子どもたち自身の幸せを考えるという視点が抜け落ちてしまう。その上に、障がい者、高齢者のことを学ぶから、子どもにとっては「あれはあれ、これはこれ」になってしまう。

学校で疑似体験をやった感想文に「他人にやさしくしましょう」って書いておきながら一方でいじめがある。おかしいですね。「福祉」という言葉の原点に戻って、学ぶことと、自分たちの幸せを考えるということを組み合わせていないと「あれはあれ、僕たちには関係がない」「かわいそう」ということで終わってしまう。そこを考え直すといいかもしれません。子どもたちの目線で、幸せって何だろう、という投げかけがあったっていい。100人いれば100通りの幸せ観が出てくるかもしれません。それをベースに、高齢者の、障がい者の、あるいは日本語のわからない人にとっては、ということに広げて、自分たちの幸せと他人の幸せ、両方を考える。自分の幸せを考えないで、誰か別の人の幸せを考えるなんて、そんな器用なことが子どもたちにできるはずありません。

先生方が取り組んでいる教育活動の中に、幸せを考える営みはたくさんありま

す。いじめがあったら、幸せじゃないと感じている子がいる。児童会活動や生徒会活動は自分たちが幸せな学校生活を送るための活動です。原点の「幸せ」に戻って考えたら、今まで考えてきたものではない「福祉教育」をやっているかもしれない。そういう広い意味での福祉教育と、高齢者、障がい者のことを考えましょうというものを合わせて年間の教育活動を構成したら、面白い福祉教育になると思います。

学校でやってほしいと社会に要求されている教育が、130あります。全部切り取っちゃうから130になるんです。ところが、地域へ出て行って、このまちの住民の幸せってなあにという目線から、じゃあどうしようかって子ども達が考えたら、広い意味の福祉教育になるんじゃないでしょうか。

疑似体験の落とし穴… やり方を間違えると うっかり落ちちゃう！

全国的に4年生で点字や手話の学習をやるんですが、目的をどこかに見失っちゃうことがある。



障がいがある人も一緒に楽しめる工夫がされたゲームで、一緒に遊ぼう。

ある中学の文化祭で、舞台で手話コーラスをやっていました。全員白い手袋をして、指の動きが分からない。これは手話とは言いません。あるいは点字。小学校の先生が大きくて打ちやすいのを開発した。打てるようになって、目の見えない人にお手紙を打つ。でも返事が来ない。ふつうのポチポチの間隔と違うから読めないのです。それすらわかっていない。いいことだからやろうとして、逆に点字って何ということすら忘れてしまった。何が目的なのか分からない。

社協と先生と一緒にやって取り組むのが大事です。福祉のプロの方が入って学校のお手伝いをしていただくからいい授業になる。訳がわからない先生がこんなものだろう、とやっちゃったら、それ大丈夫なのってことになります。

車いす、アイマスク、高齢者疑似体験をやる。でも一歩間違えると落とし穴にうっかり落ちちゃう。わかった気にさせちゃう。そこそこよかったという感想文を書く。けれども体験はあくまで疑似で、ここでわかったのは大変な面だけです。そこで終わってはいけません。振り返りの学習の質が勝負です。

「いつも大変なんです」。なんで「いつも」って勝手に決めちゃうのか。「だから助けてあげましょう」。困っている人がいたら助けてあげるとするのは正しいのです。でもよく考えるとそのメッセージの裏で、僕たち私たち、「助けてあげる側」、あの人は、「助けられる側」という、差別的な上下関係があるメッセージを発しているかもしれません。注意が必要です。

疑似体験をやるけれど、当事者の方にお話を聞くことをセットにしている学校は大丈夫だと思います。実際に生身の人

間にお話をいただければ大変な面だけじゃないとわかっていただける。

神奈川県知人に、ゲスト講師として人気のある方がいます。車いすユーザーで下半身が動きません。子どもたちは「高いところのものを取る時は大変だ」という答えを期待して、大変なことは何ですかと聞きます。彼は、最初はわざと違うことを言うのです。「大変なことは何ですか」「最近ベイスターズが弱いことが大変だね」。子どもたちの顔がぱっと変わる。あ、横浜市民のおじさんが、たまたま車いすに乗っているんだ、と。そういうことをわざと言わないと、この人は大変だろうなという目でずっと見る、わかっていない先生がいるんです。子どもたちより前に、先生の人権意識とか福祉意識が大丈夫なのかということかもしれません。

「ボランティアを受け入れる」 というボランティアもある

福祉施設に交流に行きます。施設は忙しい中でたくさんの交流学習やボランティア受け入れなどをしています。元気な子どもたちの笑顔から生活を変える可能性があるからこそ受け入れてくれる。なのに、事前学習もしないでやってきて、よくわからない歌を歌って帰ってしまう。帰った後、あれは何だったんだろうねと。

施設の職員さんが協力してくれる例があります。子どもが大嫌いという利用者

が「帰れ、うるさい」と言ったらかわいそうだから、交流サロンには子どもが大好きという方たちに集まっていたらいい、子どもたちを迎えに出るのです。

以前、中学生と施設へ行きました。一人が緊張で固まってしまった。そこを通りかかったおじさんが、「君、どこから来たんだ」と、ぼーんと肩をたたいて、会話を始めてくれたのです。そこから会話が弾みました。彼は感想文に「固まってしまっていたらおじさんが声をかけてくれました。とてもうれしかった。僕はボランティア活動したつもりがボランティアされちゃったみたい」と書きました。

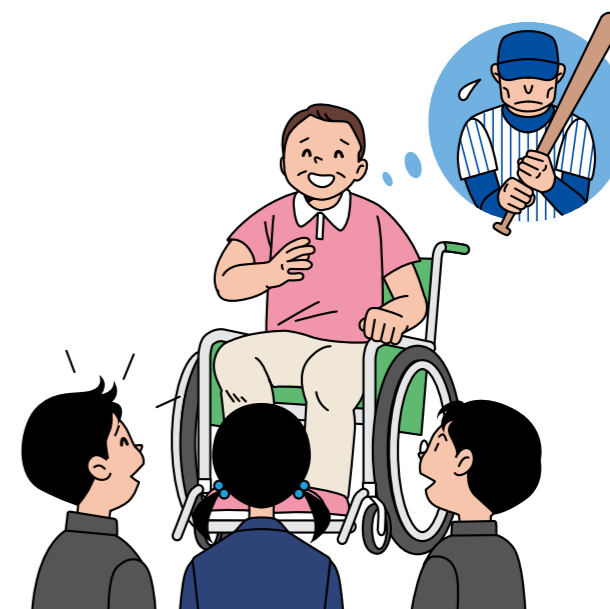
どちらもボランティア、双方向なのです。自分がボランティアされてしまったような、そういう感覚を持つかもしれません。こういう関係を実感できるプログラムが福祉教育ではないかと思います。施設の方は、ボランティア学習受け入れボランティアです。

福祉教育は「出会い系」

これは出会い系の学習です。生身の人間が出会いの中で、幸せって何というキーワードを考えて深めていく。そういう学び合いが福祉学習ではないでしょうか。色々な出会いがあります。

一つは、他者との出会い。施設の利用者さん、職員さん、地域の皆さんとの出会いが待っています。

社会との出会い。地域に出て色々な活





動をすると今の地域の実状、社会の実状を自分の目で見て、感じ取る学びができます。そこで出会ったおじいちゃんのことを頭から離れないという子もいれば、福祉の制度に興味を持つ子もいる。ここが面白い。

もう一つは、自分との出会い。とくにボランティアの場合はここがキーワードになる。終わった後、役に立ったのかなと確認するのは、ボランティアの宿命です。それは自分に跳ね返ってきます。役に立ったということを感じ取る。この確認をさせてあげないと駄目です。

大学生に、これまでにボランティアをやってきたかと聞くと、ほとんどがやってきたと言います。「ボランティアは、嫌いです」と。ゴミ拾い、つらかった、という印象しかないのです。学生時代に地域のゴミ拾いを「やらされて」ボランティアが嫌いになってしまう人が結構います。役に立ったんだってという実感を持ってもらえばずいぶん違う。振り返り学習が非常に大事です。

新しい自分との出会いが生まれる。福祉教育で人生、進路が変わる子どもができます。「私の大事にしたい価値はこれだ」とその子の価値観に響く。全員ではないですけどね。しかし、100人やったら何人かは、たった1時間でも確実に変わる。これは下手なキャリア教育をやるよりも断然いいです。

高校時代のボランティアが人生を変えた

私が高校時代、初めてボランティアをした時の話をします。初めてのボランティアは小さな子どもと遊ぶというもの

でした。今からお話する出来事がなければ私はここにはいません。人生が変わっちゃったんですよ。その女の子の一言で。小学生の、ゆかちゃん。仲が良くって、学校であったことをよく話してくれました。信頼関係ができていたんだと思います。でも、その日に限ってものすごく寂しそうです。どうしたのって聞いても答えてくれないし、目も合わせてくれない。あきらめて他の子と遊んでいたんですがやっぱり気になってもう一度聞いてみました。そしたら一言「長沼さんの横顔が死んだお父さんに似ている」。思いだしちゃったんですね。

そこは母子寮、今でいう母子生活支援施設です。私がやっていた活動は社会的に意味のあるものでした。でも僕がいることで目の前にショックを受けている子がいる。がーんと頭を殴られた気分でした。次にその子が悲しんでいたら、この活動はやめようと思いました。そしたら次はいつものゆかちゃんに戻っていた。

私はこのことをきっかけに変わりました。楽しいというだけではない、別のゆかちゃんを知ることになり、母子寮という制度も知りました。もしこのことがなければ福祉とか、ボランティアということを意識して考えることもなかったと思います。人間の幸せを考えるのが福祉教育だとすれば、不幸せを考えること、人と出会うことでそれを感じ取ることができれば、子どもたちは自分の人生、生き方について考えるようになります。

地域全体で子どもたちを育てる仕組み…地域で学校を支えよう

もう一つ大切なのは役に立ったということを実感できるということです。これを私は社会的有用感といいます。社会の中でということ強調します。

阪神・淡路大震災のときです。神戸に物がなくなってしまって、輸送ボランティアが活躍しました。道も落ちてしまったようなガレキだらけの現地に行けるのは蛇行できるバイクですが、数台でばらばらに行っても、とても間に合わない。

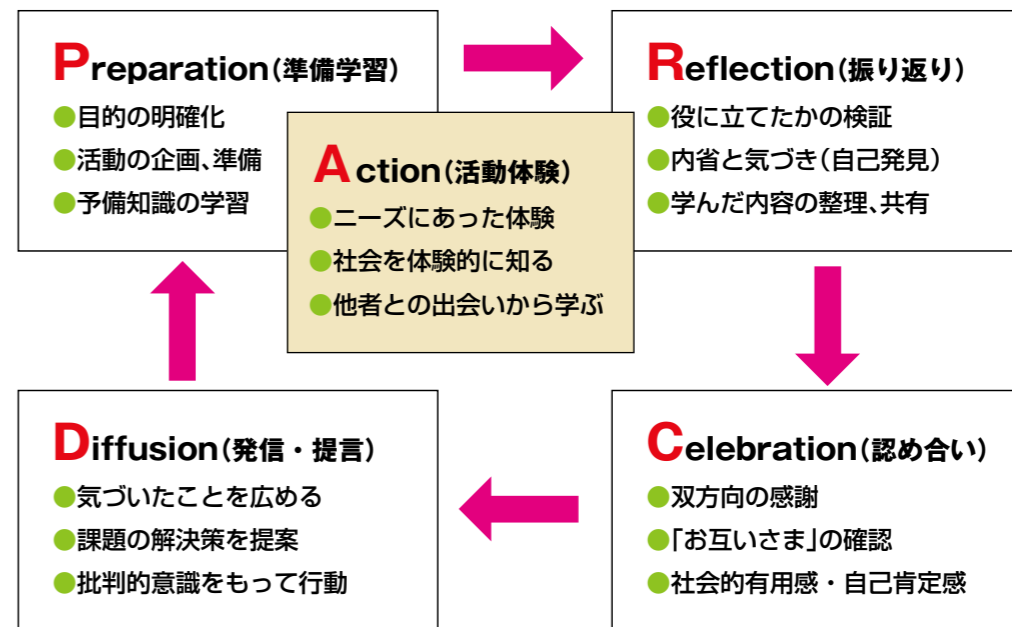
でも、いるじゃないですか、それができる人たち。「バイクを集団で持っている、統率がとれていて、蛇行運転が得意な若い人」が(笑)。そう、暴走族が100台～200台で物資を持っていったら、おばあちゃんが涙ながらに手を握って、「おおきに、おおきに」と言ってくれた。

彼らは感謝されたことがない。ところがこんなことで喜ばれる。自分達でも役に立つことがあるんじゃないかという有用感を味わって、族なんかやってる暇ねえぞって解散する。

だから「荒れてる学校ほど福祉教育・ボランティア学習」。自分達も役に立つことができる。コンビニの前でタバコ吸ってる場合じゃないぞって気づく。先生や親だけでなく、地域全体で子ども達を育てていく仕組みづくりが福祉教育やボランティア学習でできるんです。



福祉教育のプロセス……みんなが嬉しい学びの発展



ボランティア学習のPARCDサイクル(学習過程) ©長沼

こういうやり方で地域を知ると、環境問題も、国際理解も入ってくる、高齢者、障がい者との共存の問題も入ってくる、自分たちも老いていく、クラスの中の問題も福祉課題かもしれない。発達障害、経済的な問題、親が全然子どもに手をかけられない。先生達は今バンク状態です。地域の人たちにヘルプが言えるかどうか重要です。学校支援ボランティアなどの方々と一緒になってやらないとだめです。

こうした福祉教育は先生方だけでは無理です。地域のみなさん、社協、ボランティアグループを巻き込んで一緒にプログラムをつくる。そうすれば落とし穴には絶対落ちない。

先生以外の方が学校を支える仕組みを作らなければならない。学校の先生、社協は異動がある、異動しないのは地域住民だけです。この方が学校を支えましょう。地域に住んでいる人で支える仕組みができたなら、先生方が異動しても大丈夫。地域で学校を支える方を組織化するのが重要です。

福祉教育のプロセス…みんなが嬉しい学びの発展

福祉教育、ボランティア学習のプロセスの中に、意識して、この図のC、Dを盛り込んでほしい(上図)。まずCは、セレブレーション(Celebration)。「認め合い」。

総合学習の最後の1年間の発表会に地域の方をお呼びして聞いていただく。「受け入れてくださってありがとう」とお礼を言う。地域の方も「皆さんが笑顔をふりまいてくれて、みんな今でも元気ですよ」と言う。双方向で認め合うことができます。地域の方は、そこでその後の学びがどうなったかということも知ることができます。あのあと、こんなに勉強してくれたんだ。受け入れてよかったと思う。片方はいい思いをしたけれどももう一方はもう嫌だというのでは、続きません。お互いにとってよい学びにしないといけない。Cの段階を入れることによって、双方向にできるんです。

最後のDの段階も非常に大事です。広げる、発信、提言するということ。

たとえば〇〇中学校の何年生が地域に貢献しましたって記事を書いてもらう。



社会の人たち認めてくれたんだ、また頑張ろうと思うわけです。

一番嬉しいのは、校長先生。校長先生がすごいなって言われたら、嬉しいですよ。

あるまちでバリアフリーマップを作って、市役所に届けた。市長さんが喜んで、足りないところは私が在任中に必ずなおしますって言った。単なる学びじゃない。本当に役に立った。

これが生まれると福祉教育はものすごく面白い発展になる可能性がある。子どもたちも、先生たちも、校長も、地域の皆さんも喜んでくれた。こういう学びを作っていく。大変ですが、面白さを知ったら、もうやめられない、止まらない。こういう世界をぜひ作っていただきたいと思います。

文責・長野県社会福祉協議会



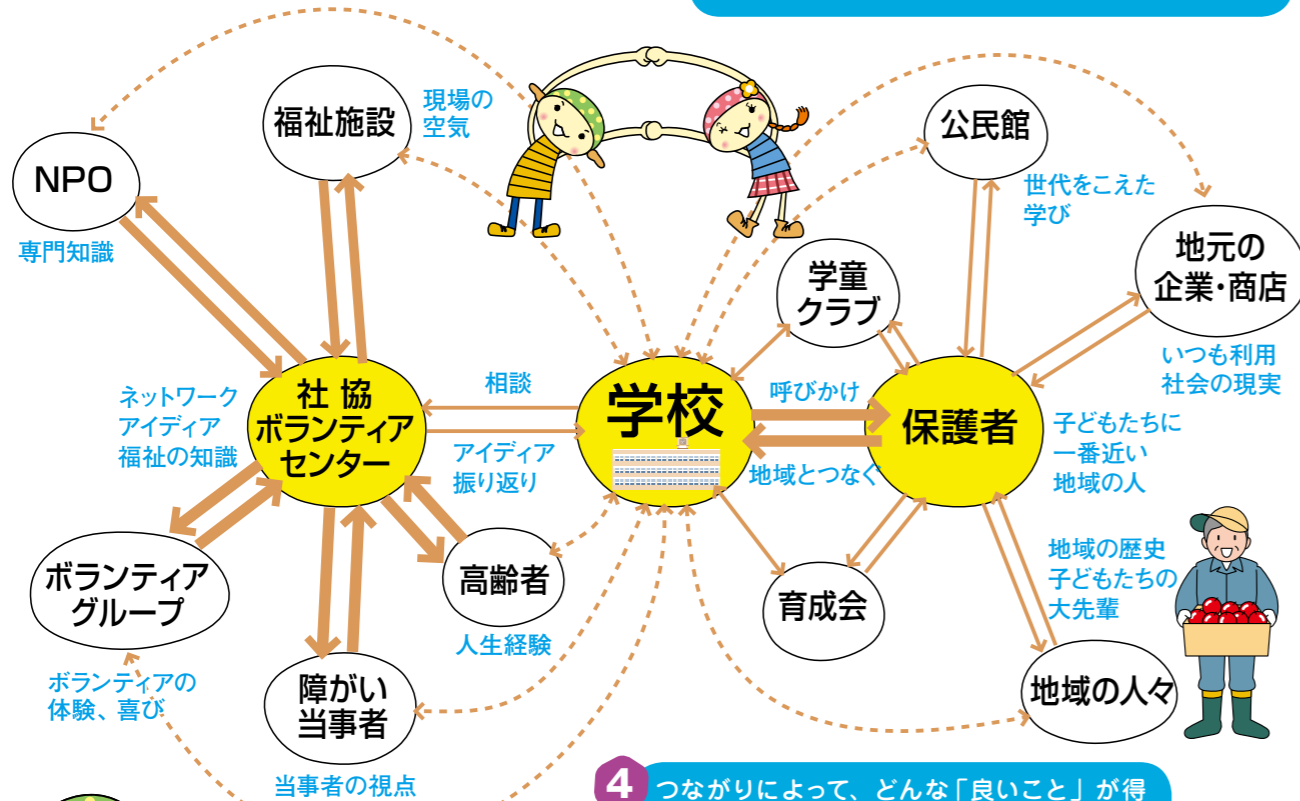
地域にはこんなにいろいろな人がいる…
あなたはどことつながってる？

「つながりマップ」を作ってみよう！

地域には様々な人がいます。それぞれの角度から地域社会、日々の暮らしを良くしようとつとめています。地域の人々とともに学ぶことで多様な人の存在に気づき、そうした人々と一緒に、「幸せ」を考えることができます。また、自分だけの「幸せ」でなく、人との関係の中で自分も幸せになることができるということを学べます。今、あなたはどことつながっていますか？ たとえば、以下のような図でつながりを確認してみましょう。

つながりマップの作り方

- 1 地域にどんな人々がいるかを、カードを並べるように並べてみます。自分たちから近い人や団体は近くに、遠いところは遠くに書いてみます。
- 2 それぞれの人々が、どんな「強み」を持っているかも、あわせて確認します。
- 3 つながりのあるところを線で結びます。つながりの強いところは太い線で、これからつながりたいところは破線で結びます。



4 つながりによって、どんな「良いこと」が得られるかを確認します。お互いに良いものを得られる関係になるようにしながら結びます。

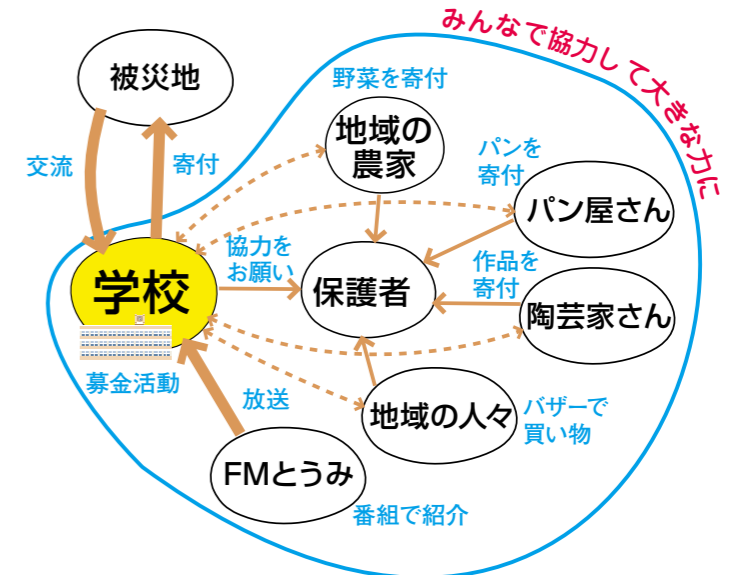
こうして結んでみると、どこにどのようなつながりがあるかが一目でわかります。豊かな学びのためには、誰とつながればよいか、直接のつながりがない場合、どこを経由すればよいかをイメージしながら、地域とのつながりを作っていけば、学びが広がります。



たとえば、こんなかんじ……

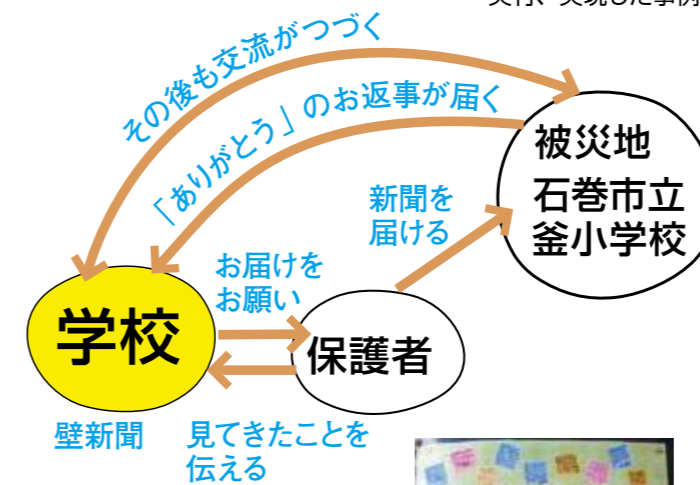
つながりマップの例① 東御市立滋野小学校の場合

東日本大震災をきっかけにした学校で行うボランティア活動に、保護者が協力、そこから地域全体に広がって行った事例 (P61 参照)



つながりマップの例② 佐久市立田口小学校の場合

東日本大震災の被災地を訪れた一人の保護者の体験を学級の子どもたちに伝えることから、子どもたちが自分たちができることを探して実行、実現した事例 (P61 参照)



これらの例のように、地域の人々とつながることで、活動も学びもより大きな広がりを持つことができます。

地域の人々も団体も、学校とつながる機会を待っています。先生方が「助けられ上手」であることが大切です。違う視点、違う場が学びに加わった時に、子どもたちの気づきは深いものになるのです。



小・中学校の新学習指導要領は2011年4月より、
高等学校は2012年4月入学生より、全面実施されています。
指導要領にそって、豊かな福祉教育を実践するアイデアを考えてみましょう。

幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント

参考資料（文部科学省）

1. 今回の改訂の基本的考え方

教育基本法改正等で
明確になった
教育の理念を踏まえ、
「生きる力」を育成

知識・技能の習得と
思考力・判断力・表現力等
の育成のバランスを重視、
授業時数を増加

道徳教育や体育などの
充実により、豊かな心や
健やかな体を育成

2. 授業時数の増加（略）

3. 教育内容の主な改善事項

言語活動の充実

●国語をはじめ各教科等で記録、説明、批評、論述、討論などの学習を充実

理数教育の充実

●国際的な通用性、内容の系統性の観点から指導内容を充実
〔台形の面積(小・算数)、解の公式(中・数学)、イオン、遺伝の規則性、進化(中・理科)]
●反復(スパイラル)による指導、観察・実験、課題学習を充実(算数・数学、理科)

伝統や文化に関する教育の充実

●ことわざ、古文・漢文の音読など古典に関する学習を充実(国語)
●歴史教育(狩猟・採集の生活や国の形成、近現代史の重視等)、宗教、
文化遺産(国宝、世界遺産等)に関する学習を充実(社会)
●そろばん、和楽器、唱歌、美術文化、和装の取扱いを重視(算数、音楽、美術、技術・家庭)
●武道を必修化(保体/中1・2)
●総合的な学習の時間の学習の例示として、地域の伝統と文化を追加(小)

道徳活動の充実

●発達の段階に応じて指導内容を重点化
〔人間としてしてはならないことをしない、きまりを守る(小)、社会の形成への参画(中)など]
●体験活動を推進 ●先人の伝記、自然など児童生徒が感動する魅力的な教材を充実
●道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実

体験活動の充実

●発達の段階に応じ、集団宿泊活動、自然体験活動、職場体験活動などを推進(特別活動等)

外国語教育の充実

●小学校に外国語活動を導入、聞くこと、話すことを中心に指導(小5・6)
●中学校では聞く・話す・読む・書く技能を総合的に充実
(語数を増加〔900語程度まで→1200語程度〕、教材の題材を充実)

重要事項

●幼小連携を推進、幼稚園と家庭の連続性を配慮、預かり保育や子育て支援を推進(幼稚園)
●環境、家族と家庭、消費者、食育、安全に関する学習を充実
●情報の活用、情報モラルなどの情報教育を充実
●部活動の意義や留意点を規定 ●障がいに応じた指導を工夫(特別支援教育)
●「はじめて規定」(詳細な事項は扱わないなどの規定)を原則削除



福祉教育のアイデア たとえば……

- 地域の課題について議論し、その結果を発表したり、学校のホームページで発信する。(国語・社会・情報教育)
- 地域の史跡や昔の暮らしについて、地域のお年寄りの話を聞きに行く。(社会・国語)
- 地域に暮らす外国から来た人に会いに行き、日本と母国の違いについて話を聞く。(外国語)
- 地域の大人に手伝ってもらって、身近な自然や生き物調べをする。(理科)
- 地元で働く人に仕事の話を聞いて、インタビュー番組にまとめる。(社会・国語)
- 自分たちの小学校に入学してくる学区の子どもたちとの交流行事をする(幼小連携)



高等学校学習指導要領の改訂のポイント

参考資料（文部科学省）

1. 今回の改訂の基本的考え方

教育基本法改正等で
明確になった
教育の理念を踏まえ、
「生きる力」を育成

知識・技能の習得と
思考力・判断力・表現力等
の育成のバランスを重視

道徳教育や体育などの
充実により、豊かな心や
健やかな体を育成

2. 卒業単位数、必修科目、教育課程編成時の配慮事項等（略）

3. 教育内容の主な改善事項

言語活動の充実

●国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習を充実

理数教育の充実

●近年の新しい科学的知見に対応する観点から指導内容を刷新(例: 遺伝情報とタンパク質の合成、膨張する宇宙像) ●統計に関する内容を必修化(数学「数学Ⅰ」)
●知識・技能を活用する学習や探究する学習を重視(〔課題学習〕(数学)の導入、「数学活用」「理科課題研究」の新設等)
●指導内容と日常生活や社会との関連を重視(「科学と人間生活」の新設)

伝統や文化に関する教育の充実

●歴史教育(世界史における日本史の扱い、文化の学習を充実)、宗教に関する学習を充実(地理歴史、公民)
●古典、武道、伝統音楽、美術文化、衣食住の歴史や文化に関する学習を充実(国語、保健体育、芸術「音楽」、「美術」、家庭)

道徳活動の充実

●学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育について、その全体計画を作成することを規定
●人間としての在り方生き方に関する学習を充実(公民「現代社会」、特別活動)

体験活動の充実

●ボランティア活動などの社会奉仕、就業体験の充実(特別活動)
●職業教育において、産業界等における長期間の実習を取り入れることを明記

外国語教育の充実

●高等学校で指導する標準的な単語数を1,300語から1,800語に増加
●授業は英語で指導することを基本(中学校、高等学校合わせて2,200語から3,000語に増加)

職業に関する教科・科目の改善

●職業人としての規範意識や倫理観、技術の進展や環境、エネルギーへの配慮、地域産業を担う人材の育成等、各種産業で求められる知識と技術、資質を育成する観点から科目の構成や内容を改善

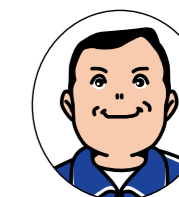
重要事項

●体育、食育、安全教育を充実 ●環境、消費者に関する学習を充実
●情報の活用、情報モラルなどの情報教育を充実
●部活動の意義や留意点を規定 ●障がいに応じた指導を工夫(特別支援教育)
●「はじめて規定」(詳細な事項は扱わないなどの規定)を原則削除



福祉教育のアイデア たとえば……

- 地域が抱える課題について議論し、文化祭でディベートを行ったり、新聞を発行したり、行政に提言したりする。
- 高齢者や障がいのある人と一緒に、新しい製品などを開発し、プレゼンテーションする。
- 地域の人々と一緒に、コミュニティビジネスを企画し、実践してみる。
- 地域で働く人に弟子入りをして、本気で仕事を教えてもらう。
(伝統産業、地域のお店、農林水産業、福祉施設、ボランティアセンター……)



地域と共にある学校づくり

信州型コミュニティスクール

概要版

信州型コミュニティスクールとは

信州型CSとは、学校と地域が「こんな子どもを育てたい」という願いを共有しながら、一体となって子どもを育てる仕組みを持った地域と共にある学校です。



運営委員会って何？

信州型CSの核となる会議です。

運営委員になる方

- ★ボランティア組織の代表または、コーディネーター
- ★学校代表 ○PTA ○公民館 ○育成会
- 民生児童員 ○自治会 等 (★必須 ○任意)

役割

- ①学校運営についての意見交換
- ②学校支援の方向性決定・調整
- ③学校関係者評価について一体的に行う

ねがい

- ◆ボランティアや地域で子どもの育成に関わっている経験をもとに、子どもや学校運営についての意見をいただき、学校運営に生かします。(アドバイスとして)
- ◆子どもや学校運営について話し合ってください。子どもへの願いや課題を共有し、共に何ができるか考えていただきます。
- ◆共有した願いや課題を地域全体へ発信していただきます。

既存会議の活用

これまで行われてきた会議を活用することも可能
例) 学校支援地域本部、放課後子ども教室運営委員会、学校運営協議会、学校評議員の会等

学校支援ボランティアの活用

信州型コミュニティスクールの土台は、学校支援ボランティアです。学校は、積極的に学校支援ボランティアを活用することが求められています。授業等教育活動の中で、地域の人材を含めた教育資源を、どこでどのように生かすことができるか考えて、計画的に取り入れていきましょう。

地域とつながることは、学校にとってはもちろんですが、実は地域住民の皆さんにとっても、そして何より子どもにとっても、多くのメリットがあります。

【地域人財・地域教材を生かした学習活動】

地域人財や地域教材を活用することで様々な効果が・・・

- ゲストティーチャーによる学習の深まり
- 学習アシスタント(補助)によるきめ細かな支援
- 地域学習の充実
- 体験学習や交流学习による学びの裏付けや学びの活用場面づくり 等

学校支援ボランティアにも様々な支援があります。

学校支援ボランティアのタイプ

活動の特殊性(専門知識技能)	
施設メンテナンス型 施設の補修・塗装、飼育小屋づくり、刃物研ぎ、植木の剪定、パソコン管理、保健室補助 ほか	ゲストティーチャー型 教科指導(地域講師)、ものづくり指導、伝統芸能演習、部活動指導 ほか
環境サポーター型 学校内外パトロール、図書室運営、図書管理、花壇整備、草取り、ビデオ撮影、体験活動受け入れ ほか	学習アシスタント型 少人数指導・TT指導の補助、教材作成の協力、通学安全指導、校外学習の引率、児童生徒との交流 ほか
活動の一般性(誰にでも)	

日本大学 発達障害研究「学校支援ボランティア」より

そして

子どもにとって、多様な地域の方とふれ合うことは、
 ◆人と関わる力をつける ◆目指す生き方にふれる
 ◆学ぶ意欲を高める ◆地域への愛着を育む など
 成長に欠くことのできない大切な学びの機会になります。

地域の方にとっても

学校支援ボランティアは、地域の皆さんにも得るものがたくさんあります。



- 学校支援をきっかけに、地域全体で子どもを育てる気運が高まり、地域や家庭の教育力が向上します。
- 子どもを縁に地域の絆が深まり、地域が元気になります。
- 子どもに教えたり、子どもと触れあったりすることで、地域住民の学びや生きがいがいづくりにつながります。

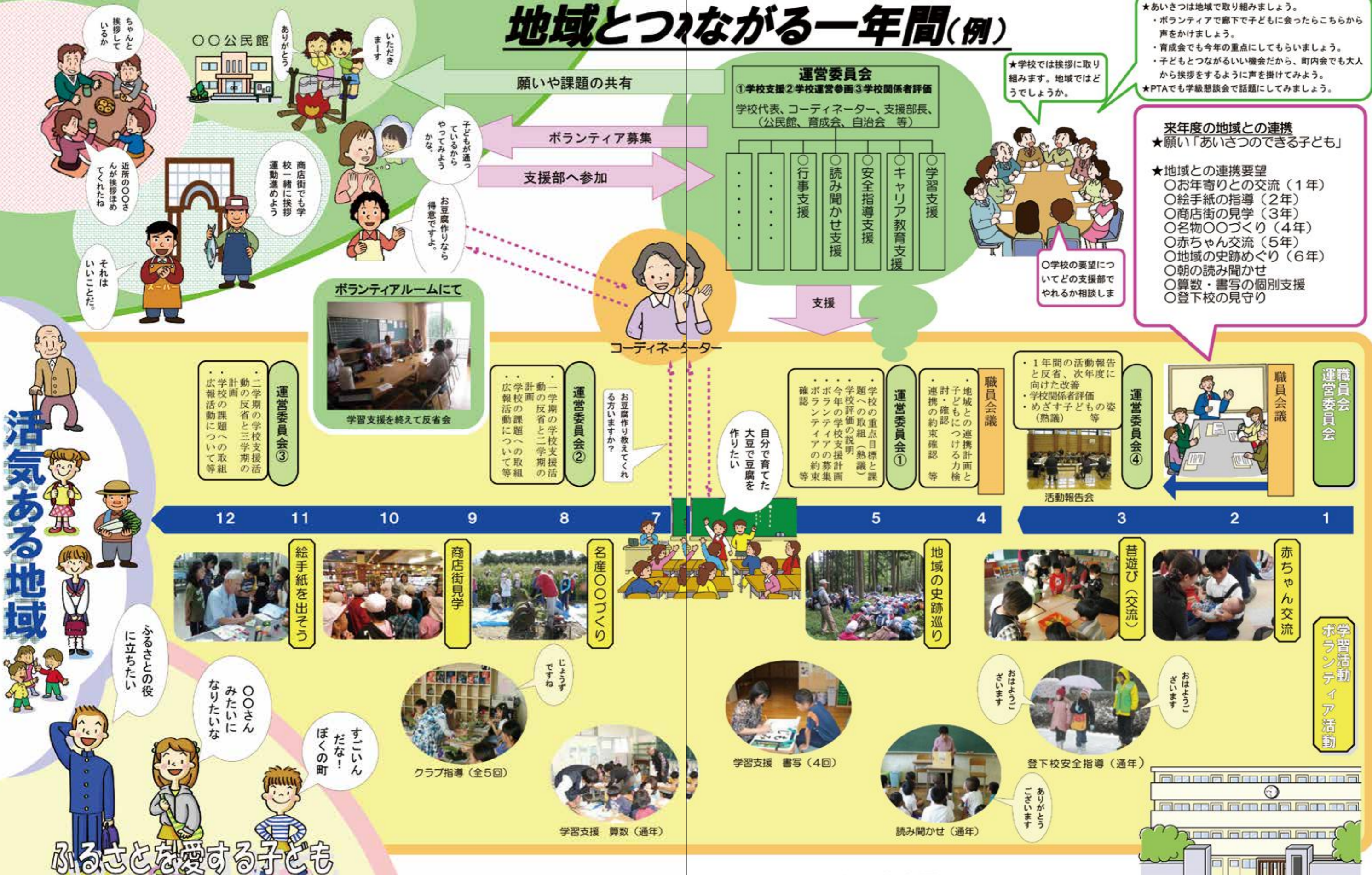
地域の方と連携する場合は、地域の方にとってのやりがいも大切にしながら進めましょう！



■お問い合わせ先■

長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課 TEL026-235-7437 e-mail:bunsho@pref.nagano.lg.jp

地域とつながる一年間(例)



★あいさつは地域で取り組みましょう。
 ・ボランティアで廊下で子どもに会ったらこちらから声をかけましょう。
 ・育成会でも今年の重点にしてもらいましょう。
 ・子どもとつながるいい機会だから、町内会でも大人から挨拶をするように声を掛けてみよう。
 ★PTAでも学級懇談会で話題にしてみましょう。

★学校では挨拶に取り組みます。地域ではどうでしょうか。

来年度の地域との連携
 ★願い「あいさつのできる子ども」

- ★地域との連携要望
- 〇お年寄りとの交流(1年)
 - 〇絵手紙の指導(2年)
 - 〇商店街の見学(3年)
 - 〇名産〇〇づくり(4年)
 - 〇赤ちゃん交流(5年)
 - 〇地域の史跡めぐり(6年)
 - 〇朝の読み聞かせ
 - 〇算数・書写の個別支援
 - 〇登下校の見守り

〇学校の要望についてどの支援部でやれるか相談しま

活気ある地域



広げよう つなげよう ボランティアの ココロ

「気になる」気持ちを力強い活動に育てるためには、小さな気持ちやつぶやきを多くの人と共有し、一緒に考え、行動することが大切です。多様な人と協働し、広くアピールしていきましょう。こうして多くの人を巻き込み、つながり、循環しながら広がる「ボランティアのココロ」の輪が、「私たちの地域をしあわせにする」ための大きな力になるのです。



地域とつながる第一歩!

まずはお近くの社会福祉協議会・ボランティアセンターへご相談ください。



市町村	名称	電話	市町村	名称	電話	市町村	名称	電話
長野市	長野市ボランティアセンター	026-227-3707	小海町	小海町社会福祉協議会	0267-92-4107	喬木村	喬木村社会福祉協議会	0265-33-4567
松本市	松本市ボランティアセンター	0263-25-7311	佐久穂町	佐久穂町ボランティアまちづくりセンター	0267-86-4273	豊丘村	豊丘村ボランティアセンター	0265-35-3327
上田市	上田ボランティア地域活動センター	0268-25-2629	川上村	川上村社会福祉協議会	0267-97-3522	大鹿村	大鹿村社会福祉協議会	0265-39-2865
上田市	丸子ボランティア地域活動センター	0268-43-2566	南牧村	南牧村ボランティアセンター	0267-96-2363	上松町	上松町社会福祉協議会	0264-52-3560
上田市	真田ボランティア地域活動センター	0268-72-2998	南相木村	南相木村社会福祉協議会	0267-78-1001	南木曾町	南木曾町ボランティアセンター	0573-75-5516
上田市	武石ボランティア地域活動センター	0268-85-2466	北相木村	北相木村社会福祉協議会	0267-77-2111	木曾町	木曾町社会福祉協議会	0264-26-1116
岡谷市	岡谷市ボランティアセンター	0266-24-2121	軽井沢町	軽井沢町社会福祉協議会ボランティアセンター	0267-45-8113	木祖村	木祖村ボランティアセンター	0264-36-3441
飯田市	飯田市ボランティアセンター	0265-53-3182	御代田町	御代田町ボランティアセンター	0267-32-1100	王滝村	王滝村社会福祉協議会	0264-48-2008
諏訪市	諏訪市ボランティア・市民活動センター	0266-54-7715	立科町	立科町町民活動センター	0267-56-1825	大桑村	大桑村ボランティアセンター	0264-55-3755
須坂市	須坂市福祉ボランティアセンター	026-245-1619	長和町	長和町社会福祉協議会	0268-88-3069	麻績村	麻績村社会福祉協議会	0263-67-3099
小諸市	小諸市ボランティアセンター	0267-26-0315	青木村	青木村社会福祉協議会	0268-49-2129	生坂村	生坂村福祉ボランティアセンター	0263-69-1122
伊那市	伊那市ボランティア・地域活動応援センター	0265-73-2541	下諏訪町	下諏訪町ボランティアセンター	0266-27-8886	山形村	山形村ボランティアセンター	0263-97-2102
駒ヶ根市	駒ヶ根市社会福祉協議会	0265-81-5900	富士見町	富士見町ボランティアセンター	0266-78-8986	朝日村	朝日村社会福祉協議会	0263-99-2340
中野市	中野市社会福祉協議会	0269-26-3111	原村	原村社会福祉協議会	0266-79-7228	筑北村	筑北村ボランティアセンター	0263-66-2506
大町市	大町市ボランティアセンター	0261-22-1501	辰野町	辰野町ボランティアセンター	0266-41-5558	池田町	池田町ボランティアセンター	0261-62-9544
飯山市	飯山市民活動支援センター	0269-62-2840	箕輪町	みのわふれ愛センター(箕輪町ボランティアセンター)	0265-70-1061	松川村	松川村ボランティアセンター	0261-62-9000
茅野市	茅野市ボランティア・市民活動センター	0266-73-4431	飯島町	飯島町ボランティアセンター	0265-86-5511	白馬村	白馬村ボランティアセンター	0261-72-7230
塩尻市	地域福祉・ボランティアセンター	0263-52-2795	南箕輪村	南箕輪村ボランティアセンター	0265-76-5522	小谷村	小谷村ボランティアセンター	0261-82-2430
佐久市	佐久市ボランティアセンター	0267-64-2426	中川村	中川村ボランティアセンター	0265-88-3552	坂城町	坂城町ボランティアセンター	0268-82-2551
佐久市	佐久地域ボランティアセンター	0267-67-2463	宮田村	宮田村ボランティアセンター	0265-85-5010	小布施町	小布施町ボランティアセンター	026-242-6665
佐久市	白田地域ボランティアセンター	0267-82-4332	松川町	松川町地域ボランティアセンター	0265-36-3778	高山村	高山村社会福祉協議会ボランティアセンター	026-242-1220
佐久市	浅科地域ボランティアセンター	0267-58-0383	高森町	高森町ボランティアセンター	0265-34-3001	信濃町	信濃町ボランティア・まちづくりセンター	026-255-5926
佐久市	望月地域ボランティアセンター	0267-51-1520	阿南町	阿南町ボランティアセンター	0260-22-3151	飯綱町	飯綱町ボランティアセンター	026-253-1001
千曲市	千曲市ボランティアセンター	026-276-2687	阿智村	阿智村社会福祉協議会ボランティアセンター	0265-45-1234	小川村	小川村社会福祉協議会	026-269-2255
東御市	東御市社会福祉協議会ボランティアセンター	0268-62-4455	平谷村	平谷村社会福祉協議会	0265-48-2220	山ノ内町	つつみ住民活動センター	0269-33-2810
安曇野市	安曇野市社会福祉協議会ボランティアセンター	0263-72-1871	根羽村	根羽村社会福祉協議会	0265-49-2288	木島平村	木島平村ボランティアセンター	0269-82-4888
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 明科支所	0263-62-2429	下條村	下條村社会福祉協議会	0260-27-2858	野沢温泉村	野沢温泉村社会福祉協議会	0269-85-4347
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 堀金支所	0263-73-5288	売木村	売木村社会福祉協議会	0260-28-2004	栄村	栄村社会福祉協議会	0269-87-3020
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 穂高支所	0263-82-2940	天龍村	天龍村社会福祉協議会	0260-32-2277	長野県	長野県社会福祉協議会	026-226-1882
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 三郷支所	0263-77-8080	泰阜村	泰阜村社会福祉協議会	0260-26-2162			